講座の紹介

中2 国語（共通版）を受講するみなさんへ

講座の特徴

● 〈要点がコンパクトにまとまった動画〉＋〈確認テスト〉なので、スキマ時間で国語の知識や読解力を身につけるのにオススメです。

講師からのメッセージ

● 伝えたいのは、「Let's（レッツ）感動！」
正しい日本語の読み方を身につけると、文章の内容がもっとわかりやすくなって、文章から受ける感動は、もっともっと大きくなるよ。
キミも、感動への第一歩をいっしょに踏み出そう！

宮田泰三

それでは、一緒にスタディサプリで学習していきましょう！

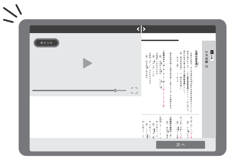
テキストの使い方

はじめに

スタディサプリは、スマホやタブレット、ＰＣを使って動画を見たり問題を解いたりすることができますが、テキストを使うと、より学びやすく、理解しやすくなります。
テキストはさまざまな使い方ができるので、ぜひ自分に合った使い方をみつけて活用してください。

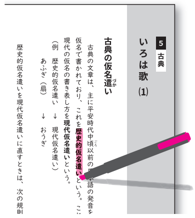
基本の使い方

ステップ 1　動画をみる



※本文のある講義は動画を見る前に本文を読んでおきましょう。

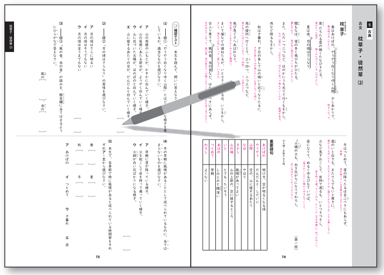
テキストはこう使う！



講師が話したことや大事だと思ったことをメモすると自分オリジナルのまとめノートになります。

ステップ 2　確認テストを解く

オススメの使い方



テキストはアプリやウェブで問題を解いた後の復習や、テストに近い問題形式に取り組みたい時に活用できます。

各パートの説明

4 現代文 読解法
文学的文章　**主題の捉え方**

主題の読み取り

作者が文章を通じて表現しようとしている中心的な内容を主題という。
物語の主題を捉えるには、次の点に注目するとよい。
・人物を通して描かれる価値観や考え、人物の心情の変化や成長。
・出来事の展開、各場面における人物の行動。
・作品の状況設定、時代背景。

例題

本文で中心的に描かれている内容として正しいものを選びなさい。

ア 先生に叱られるかもしれないのに、生真面目に机の拭き掃除までしようとする権太に対していらだつ耕作の心情。
イ 先生に叱られると級長から指摘されても、罰当番の権太を手伝い、正しいことを堂々とやろうとする耕作の心情。
ウ 先生に叱られるのをおそれて掃除をいい加減に済ませようとしたが、権太の言葉に自分を恥ずかしく感じた耕作の心情。

［　　］

確認テスト　本文を読んで、問いに答えなさい。

(1) 本文中で心情の変化が描かれている人物を選びなさい。

ア 耕作　**イ** 権太　**ウ** 先生　**エ** 若浜

［　　］

関連する知識や、重要なポイントがまとまっています。

例題

「現代文 読解法」の単元には例題が付いています。例題は動画を見ながら解き方を確認しましょう。例題を事前に解いてから動画を見ると、学習効果が高まります。

確認テスト

動画で学習した内容や、作品について問題が出題されます。解答は別冊で確認できます。
※解説を確認したい場合はアプリでご確認ください。

目次

1 言葉

話し言葉と書き言葉 …… P006
敬語 …… P008
類義語・対義語・多義語 …… P012
上位語・下位語 …… P014

2 文法

活用のある自立語 …… P016
活用のない自立語 …… P024
付属語 …… P030
〈助動詞活用表〉 …… P038

3 漢字

熟語の構成 …… P040
熟語の読み …… P044
同音・同訓 …… P048

4 現代文読解法

説明的文章 …… P052
文学的文章 …… P060
随筆 …… P068

5 古典

古文　枕草子・徒然草 …… P072

古文　平家物語 …… P084

漢詩 …… P098

※「論語」は、中３国語（共通版）に掲載しています。

6 詩・短歌

詩　大阿蘇 …… P106

短歌 …… P108

鑑賞文　短歌を楽しむ …… P110

7 現代文実践（説明的文章）

生物多様性「私」から考える進化・遺伝・生態系 …… P116

日本人にとって美しさとは何か …… P120

ゴリラからの警告「人間社会、ここがおかしい」 …… P124

「今、ここ」から考える社会学 …… P130

8 現代文実践（文学的文章）

欅を、君に。 …… P136

走れメロス …… P140

よこまち余話 …… P152

リーチ先生 …… P156

9 現代文実践（随筆）

ごはん …… P160

日常の中から …… P166

※本文は原則として原典のまま表記しています。

話し言葉と書き言葉

話し言葉

音声によって伝えられる言葉を**話し言葉**という。話し言葉は目の前の相手に対して使われることが多く、その場の状況を共有していることを前提にした伝え方ができる。

- その場にあるものや様子を指示する語句が使える。
  「それ、持って帰ってね。」
- 状況に応じて言葉を省略できる。
  （バスを待っていて）「あ、（バスが）来たよ。」

また、話し方によって内容を強調したり、念押しや確認をしたりすることができる。

- 大事な部分を話し方によって強調できる。
  言葉を繰り返す。
  （集合時間を念押しして）「九時よ。九時。」
  大事な部分を大きな声で発音する。重要な部分をゆっくり話す。
  「ここに九時に来てください。」
- 念押しや確認の言葉を使って相手の反応や理解を確かめられる。
  「……ですね。」

このほか、くだけた表現や、方言が用いられることがあるのも話し言葉の特徴である。話し言葉では、同音異義語などの区別がつきづらいので、読み方を変えることもある。

（例）「シリツ（市立・私立）」→「イチリツ」・「ワタクシリツ」

書き言葉

文字によって伝えられる言葉を**書き言葉**という。その場限りで消えてしまう話し言葉と違い、書き言葉は記録として情報を残すことができる。

- 内容を書き直したり、読み返したりすることができる。

書き言葉は、誰が、どのような状況で読むかわからないので、正確に情報が伝わるように書く必要がある。

- 情報は具体的に書く。
  ×次の日曜日 → 6月27日(日)
- 表記や文末を整える。
  漢字・ひらがな・カタカナを使い分ける。
  常体（だ・である）、敬体（です・ます）のどちらかに統一する。

語句の中には、話し言葉ではよく使われても、書き言葉ではあまり用いられないものもあるので注意する。

（例）なので（話し言葉）→ そのため・このため
　　　でも（話し言葉）→ だが・しかし

確認テスト

(1) 次の中から、話し言葉の特徴として適当でないものを選びなさい。

ア その場にあるものを指し示す語句を使うことができる。
イ 内容を、必要に応じて何度も読み返すことができる。
ウ 言葉を発する状況によっては、内容を省略できる。
エ 音声を調整して、重要な情報を強調することができる。

〔　　〕

(2) 次の中から、書き言葉の特徴として適当でないものを選びなさい。

ア 同じ発音の言葉も、漢字で書くことで区別することができる。
イ その場にいない人にも、文字で情報を伝えることができる。
ウ 誰が読んでも誤解が生じないように、共通語を使うことが多い。
エ その場で相手が内容を理解しているか確認することができる。

〔　　〕

(3) 次の話し言葉の内容について、気を付けて話すべきこととして適当でないものを選びなさい。

（調理実習の前日、持ち物を連絡(れんらく)していて）
「それではみなさん、明日は調理実習なのでエプロンと三角巾(きん)を忘れずに持ってきてください。」

ア 持ち物であるエプロンと三角巾は、大きな声やゆっくりした声で話すなど、強調する。
イ 相手がいつ内容を確認するかわからないので、明日と言わずに具体的な日付を伝えなければならない。
ウ 聞き手が内容を理解できているか確認するために、問いかけたり、念を押す言葉を使ったりするとよい。

〔　　〕

敬語(1)

敬語の働き

聞き手や話題の中の人物に敬意を表す表現を**敬語**という。敬語は、他者とのコミュニケーションをとるうえで、大切な表現である。

敬語には、相手に対する敬意を表すほかに、改まった気持ちを表したり、相手との距離をとったりする働きもある。状況や相手との関係に応じて、適切な敬語を使うことが大切である。

敬語の種類

敬語には、丁寧語・尊敬語・謙譲語などの種類がある。

●**丁寧語**・美化語

丁寧な表現を使って、話し手が聞き手に敬意を表す言葉を丁寧語という。

〈主な表現〉「……**です**」「……**ます**」「……**ございます**」

（例）私は中学生だ。　→　私は中学生です。
　　　朝食を食べる。　→　朝食を食べます。

また、物事を上品に述べる言葉を美化語という。美化語は、名詞に「**お**（ご）」を付けるものが多い。

（例）お米・お金

●**尊敬語**

動作・行為をする人（主体）を高めて言う言葉を尊敬語という。

〈主な表現〉

・「**お**（**ご**）……**になる**」
（例）話す　→　お話しになる

・「**お**（**ご**）＋名詞」　※謙譲語の場合もある
（例）（先生からの）お電話　ご挨拶

・助動詞「……**れる**（**られる**）」
（例）話す　→　話される

・尊敬の意味をもつ特別な動詞

行く・来る・いる	**いらっしゃる・おいでになる**
見る	**ご覧になる**
言う・話す	**おっしゃる**
食べる・飲む	**召し上がる**
くれる	**くださる**
する	**なさる**

確認テスト

(1) 次の①〜④の——線部が、丁寧語ならア、尊敬語ならイで、それぞれ答えなさい。

①先生が昔のことを話される。［　］
②右が入口でございます。［　］
③昨日、田中先生に会いました。［　］
④今日はいい天気ですね。［　］

(2) 次の①〜④の——線部が、美化語ならア、尊敬語ならイで、それぞれ答えなさい。

①お花をかざる。［　］
②お言葉をいただく。［　］
③お水をください。［　］
④お菓子(かし)を買う。［　］

(3) 次の中から、——線部が尊敬語ではないものを選びなさい。

ア 先生がお帰りになる。
イ ここをお使いになる。
ウ 全てご着席になる。
エ 私からご連絡(れんらく)する。

［　］

(4) 次の——線部の言葉をひらがな五文字の尊敬語に直しなさい。

先生が言うとおりでした。

□□□□□

(5) 次の——線部の言葉をひらがな四文字の尊敬語に直しなさい。

あの方はいつも助けてくれる。

□□□□

(6) 次の①〜④の言葉の尊敬語として適当なものを、それぞれ選びなさい。

①来る［　］
②食べる［　］
③する［　］
④見る［　］

ア ご覧になる
イ 召し上がる
ウ いらっしゃる
エ なさる

敬語の種類

●謙譲語

動作・行為の受け手（客体）などを高めて言う言葉を謙譲語という。

〈主な表現〉

・「**お（ご）……する**」

（例）話す → お話しする　※「お話しになる」は尊敬語

・「**お（ご）**＋名詞」　※尊敬語の場合もある

（例）（先生への）お電話　ご挨拶

・謙譲の意味をもつ特別な動詞

行く・来る	**伺う・※参る**
いる	**※おる**
見る	**拝見する**
聞く	**伺う・承る**
言う・話す	**※申す・申し上げる**
食べる・飲む・もらう	**いただく**
やる・与える	**差し上げる**
する	**※いたす**

謙譲語のうち、自分や自分に近い人の動作をかしこまって言うことで聞き手への敬意を表す言葉を**丁重語**（※）ということもある。丁重語は、「ます」を付けて用いられることが多い。

（例）おります。

敬語の使い方

・自分や、身内など自分に近い人に尊敬語を使わない。

（例）×お父さんは今 ×いらっしゃいません。
→ 父は今おりません。

・敬語を重ねすぎない。

（例）×お話を ×お承りする。 → お話を承る。

×お読みになられる。 → お読みになる。

確認テスト

(1) 次の①〜⑥の――線部が、謙譲語なら**ア**、謙譲語でなければ**イ**で、それぞれ答えなさい。

①私からお届けする。〔　　〕

②荷物をお預かりする。〔　　〕

③ここをお使いになる。〔　　〕

④会場までご案内する。〔　　〕

⑤概要（がいよう）をご説明する。〔　　〕

⑥お客様がご利用になる。〔　　〕

(2) 次の――線部の言葉をひらがな四文字の謙譲語に直しなさい。

校長先生のお話を聞く。

□□□□

(3) 次の――線部の言葉をひらがな四文字の謙譲語に直しなさい。

お祝いの言葉をもらう。

□□□□

(4) 次の――線部の言葉をひらがな六文字の謙譲語に直しなさい。

ご意見を聞く。

□□□□□□

(5) 次の言葉の謙譲語を選びなさい。

見る

ア　拝見する　　**イ**　召（め）し上がる

ウ　ご覧になる　　**エ**　差し上げる

〔　　〕

(6) 次の――線部の敬語を正しく直しなさい。

新聞をお読みになられた。

新聞をお読みに□□□。

類義語・対義語・多義語

類義語・対義語

●**類義語**

互(たが)いに似た意味をもつ語を類義語という。

(例)「去年」と「昨年」　「用意」と「準備」

類義語には、表す意味が微妙(びみょう)に異なるものもある。

(例)「案外」と「意外」

案外…予想や常識とくいちがっている様子。

意外…自分が考えていたこととくいちがっていたり、予想もできなかったりする様子。

●**対義語**

意味が反対の関係や対(つい)の関係にある二つの語を対義語という。

(例)「生産」と「消費」　「需要(じゅよう)」と「供給」

「直接」と「間接」　「偶然(ぐうぜん)」と「必然」

対義語は、着目する観点によって変わることもある。

(例)「姉」↕「妹」…年上と年下

「姉」↕「兄」…女性と男性

多義語

一つの語で複数の意味や用法をもつ語を**多義語**という。

(例)高い所……位置

高い商品…値段

多義語は、それぞれの意味によって、類義語・対義語が変わることがある。

(位置が)「高い」↕「低い」

(値段が)「高い」↕「安い」

確認テスト

(1) 次の①・②の類義語となるように、□に入る漢字を後の〈　〉の中からそれぞれ選びなさい。

①方法・□□

②重要・□□

〈　大　手　切　不　的　厚　段　量　〉

(2) 次の①・②の類義語となるように、□に入る漢字を後の〈　〉の中からそれぞれ選びなさい。

①有名・□名

②帰郷・帰□

〈　近　故　述　書　省　属　著　無　〉

(3) 次の①〜④の対義語となるように、□に入る漢字を後の〈　〉の中からそれぞれ選びなさい。

①積極・□極

②主観・□観

③収入・□出

④拡大・□小

〈　客　支　縮　消　対　張　得　楽　〉

(4) 次の①〜④の対義語となるように、□に入る漢字を後の〈　〉の中からそれぞれ選びなさい。

①原因・□□

②抽象（ちゅうしょう）・□□

③集合・□□

④形式・□□

〈　内　体　果　具　容　結　散　解　〉

(5) 次の文の――線部の語の意味を選びなさい。

彼女（かのじょ）はこのクラスの顔だ。

ア　頭部の前面。

イ　顔つき、表情。

ウ　ある集団の代表的な人やもの。

エ　体面、面目（めんぼく）。

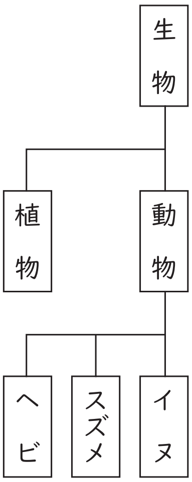
〔　　〕

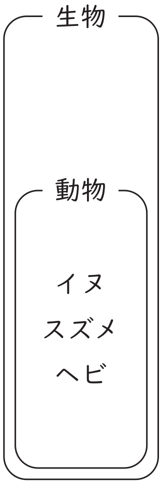
上位語・下位語

上位語・下位語

ある言葉に対して、その言葉を含むまとまりを表す言葉を**上位語**という。上位語に対して、上位語が表す意味の範囲に含まれる物事を表す言葉を**下位語**という。

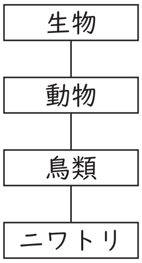
（例）より上位語 ⟷ より下位語





同じ言葉でも、どの言葉と比べるかによって、上位語にも下位語にもなる。

（例）



※「動物」は、「生物」の下位語で、「鳥類」や「ニワトリ」などの上位語。

上位語は、下位語よりも**抽象的**な意味を、下位語は、上位語よりも**具体的**な意味を表す。

上位語を使うと、論をまとめることができる。

（例）現在、日本の肉類の自給率は約50％、小麦の自給率は約15％である。つまり、日本は食料の多くを輸入に頼っているのである。

下位語を使い、具体例を挙げると、論に説得力をもたせることができる。

（例）現在、日本は、食料の多くを輸入に頼っている。例えば、日本の肉類の自給率は約50％、小麦にいたっては約15％である。

確認テスト

(1) 次の中から、「日本語」の上位語を選びなさい。

ア 英語　**イ** 言語　**ウ** 発音　**エ** 文字

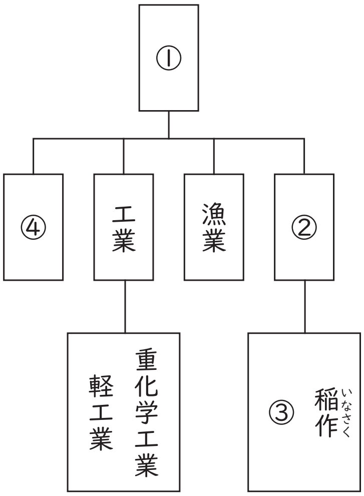
〔　　　〕

(2) 「野菜」の上位語と下位語を、それぞれ**ア**～**エ**から選びなさい。

ア くだもの　**イ** 穀物　**ウ** 食べ物　**エ** レタス

上位語〔　　　〕　下位語〔　　　〕

(3) 次の①～④に当てはまる言葉を、それぞれ**ア**～**エ**から選びなさい。



ア 商業　**イ** 産業　**ウ** 畑作　**エ** 農業

①〔　　　〕　②〔　　　〕　③〔　　　〕　④〔　　　〕

(4) 次の中から、最も抽象的な言葉を選びなさい。

ア 球技　**イ** サッカー　**ウ** スポーツ　**エ** 野球

〔　　　〕

活用のある自立語 (1)

活用のある自立語

自立語の中で、活用があり、単独で述語になることができるものを**用言**という。品詞では、動詞・形容詞・形容動詞が用言に当たる。

・**動詞**………動作・作用・存在を表す。言い切りが「**ウ段**」で終わる。
・**形容詞**……状態・性質を表す。言い切りが「**い**」で終わる。
・**形容動詞**…状態・性質を表す。言い切りが「**だ・です**」で終わる。

単語が活用するときに、形が変わらない部分を**語幹**、形が変わる部分を**活用語尾**（ごび）という。

（例）［話］す｜＋た → ［話］し｜ た
［明る］い｜＋なる → ［明る］く｜ なる
［静か］だ｜＋なる → ［静か］に｜ なる

単語
- **自立語**
  - 活用する ― 述語になる（用言）
    - 動作・作用・存在を表す・終止形が「ウ段」で終わる ― **動詞**
    - 状態・性質を表す
      - 終止形が「い」で終わる ― **形容詞**
      - 終止形が「だ・です」で終わる ― **形容動詞**
  - 活用しない
    - 主語になる（体言） ― 物事の名前を表す・物事を指し示す ― **名詞**
    - 修飾語になる
      - 主に用言を修飾する ― **副詞**
      - 常に体言を修飾する ― **連体詞**
    - 接続語になる ― **接続詞**
    - 独立語になる ― **感動詞**
- **付属語**
  - 活用する ― **助動詞**
  - 活用しない ― **助詞**

動詞の活用形

活用で変化した単語の形を活用形という。動詞の活用形は６種類に分けられる。

①**未然形**…まだ動作・状態が実現していないことを表す形。
助動詞「ない（ぬ）」「う（よう）」「れる（られる）」「せる（させる）」などが続く。
②**連用形**…他の用言や、助動詞「ます」「た（だ）」、助詞「て（で）」などが続く形。
③**終止形**…言い切る形。
④**連体形**…体言や、助詞「ので」「のに」などが続く形。
⑤**仮定形**…もし～すれば、と仮定する形。助詞「ば」が続く。
⑥**命令形**…命令して言い切る形。

基本形	語幹＼続き方	未然形	連用形	終止形	連体形	仮定形	命令形
	続き方	―ない ―う（よう）	―ます ―た（だ） ―て（で）	―。 言い切る。	―とき ―こと ―ので	―ば	―。 命令して言い切る。
話す	はな	さ そ	し	す	す	せ	せ

確認テスト

(1) 動詞「書く」を、解答欄（かいとうらん）に合わせて形を変えなさい。また、「書く」の語幹をひらがなで答えなさい。

［　　］ます

語幹［　　］

(2) 形容詞「暑い」を、解答欄に合わせて形を変えなさい。また、「暑い」の語幹をひらがなで答えなさい。

［　　］なる

語幹［　　］

(3) 形容動詞「おだやかだ」を、解答欄に合わせて形を変えなさい。また、「おだやかだ」の語幹をひらがなで答えなさい。

［　　］なる

語幹［　　］

(4) 動詞「行く」を、①～④の続く言葉に合わせてそれぞれ形を変え、ひらがなで答えなさい。

①［　　］ない　②［　　］う

③［　　］ます　④［　　］ば

(5) 次の①～⑥の――線部の動詞の活用形の種類を、それぞれ**ア**～**カ**から選びなさい。

① 校庭で走る。［　　］　② 走る人を見た。［　　］

③ いざ走れ。［　　］　④ 走れば間に合う。［　　］

⑤ 私が走ります。［　　］　⑥ まだ走らない。［　　］

ア 未然形　**イ** 連用形　**ウ** 終止形

エ 連体形　**オ** 仮定形　**カ** 命令形

活用のある自立語(2)

動詞の活用の種類

動詞の活用の仕方は5種類に分けられる。

①**五段活用**……活用語尾(ごび)が五段(ア・イ・ウ・エ・オ)にわたって変化する。

②**上一段活用**…活用語尾がイ段を中心に変化する。

③**下一段活用**…活用語尾がエ段を中心に変化する。

④**カ行変格活用**…「来る」のみの特殊(とくしゅ)な活用。

⑤**サ行変格活用**…「する」や「〜する」の形の複合語の特殊な活用。

活用の種類	基本形	語幹	未然形	連用形	終止形	連体形	仮定形	命令形
続き方			―ない ―う(よう)	―ます ―た(だ) ―て(で)	―。言い切る。	―とき ―こと ―ので	―ば	―。命令して言い切る。
五段	話す	はな	さ そ	し	す	す	せ	せ
上一段	起きる	お	き	き	きる	きる	きれ	きろ きよ
下一段	食べる	た	べ	べ	べる	べる	べれ	べろ べよ
カ変	来る	○	こ	き	くる	くる	くれ	こい
サ変	する	○	し せ さ	し	する	する	すれ	しろ せよ

※カ変・サ変や、上一段の「着る」、下一段の「寝(ね)る」などの動詞は、語幹と活用語尾を区別できない。

音便

発音しやすいように音が変化することを**音便(おんびん)**という。五段活用の動詞は、連用形で音便が現れることがある。

・**イ音便**
(例) 書く＋た → 書きた → 書いた

・**撥(はつ)音便**
(例) 読む＋た → 読みた → 読んだ

・**促(そく)音便**
(例) 走る＋た → 走りた → 走った

基本形	語幹	連用形
続き方		―ます ―た(だ) ―て(で)
書く	か	き い
読む	よ	み ん
走る	はし	り っ

動詞の活用の種類の見分け方

五段・上一段・下一段は、助動詞「ない」を付けて見分けるとよい。
(例) 話す　＋ない → 話さ(a)ない　五段活用は「ア段」に変化
起きる＋ない → 起き(i)ない　上一段活用は「イ段」に変化
食べる＋ない → 食べ(e)ない　下一段活用は「エ段」に変化

確認テスト

(1) 動詞「見る」を、①～④の続く言葉に合わせてそれぞれ形を変え、ひらがなで答えなさい。

① ［　　］ない　② ［　　］よう
③ ［　　］ます　④ ［　　］ば

(2) 動詞「来る」を、①～③の続く言葉に合わせてそれぞれ形を変え、ひらがなで答えなさい。

① ［　　］ない　② ［　　］ます
③ ［　　］ば

(3) 動詞「する（サ行変格活用）」を、①～③の続く言葉に合わせてそれぞれ形を変え、ひらがなで答えなさい。

① ［　　］ない　② ［　　］ます
③ ［　　］ば

(4) 次の①～⑤の動詞の活用の種類を、それぞれ**ア**～**オ**から選びなさい。

① 開ける［　　］　② 閉じる［　　］
③ 来る［　　］　④ 勉強する［　　］
⑤ 泳ぐ［　　］

ア　五段活用　**イ**　上一段活用　**ウ**　下一段活用
エ　カ行変格活用　**オ**　サ行変格活用

(5) 次の①～③の動詞の連用形でおこる音便を、それぞれ**ア**～**ウ**から選びなさい。

① 遊ぶ［　　］　② 歩く［　　］　③ 言う［　　］

ア　イ音便　**イ**　撥音便　**ウ**　促音便

活用のある自立語(3)

自動詞・他動詞

動詞は、動作の対象「何を」を必要とするかどうかによって、自動詞と他動詞に分けられる。他動詞は、何かに対して働きかける動作や作用を表す。

・**自動詞**…動作の対象「〜を」をとらない動詞。
（例）人が集まる。　ものが壊（こわ）れる。　花が咲く。

・**他動詞**…動作の対象「〜を」をとる動詞。
（例）人を集める。　ものを壊す。　本を読む。

可能動詞

五段活用の動詞が変化してできた、「……することができる」という意味を表す下一段活用の動詞を、**可能動詞**という。

（例）話す → 話せる
聞く → 聞ける
書く → 書ける
読む → 読める

可能動詞はそれだけで一つの単語なので注意する。また、可能動詞には命令形はない。

補助動詞

動詞のうち、上の語に意味を補う、本来の意味が薄（うす）れた動詞を、**補助動詞**（形式動詞）という。

（例）人が　歩いて　いる。（補助動詞）

※補助動詞「いる」は、「存在する」という元の意味が薄れ、今動作が継続しているという意味を補う働きをしている。

補助動詞は主に「〜て（で）＋補助動詞」の形で用いられる。

（例）〜て　いる　　〜て　ある　　〜て　みる
〜て　くる　　〜て　いく　　〜て　おく
〜て　あげる　　〜て　もらう

ら抜き言葉とれ足す言葉

上一段・下一段・カ変の動詞には可能動詞がなく、可能の意味を表すときは助動詞「られる」を使う。

（例）見る→見られる（助動詞）　出る→出られる（助動詞）　来る→来られる（助動詞）

「見れる・出れる・来れる」といった言い方は、ら抜（ぬ）き言葉といい、共通語では規範（きはん）的ではないとされる。　※これまだ食べれる（×）よ。

五段活用の動詞で可能の意味を表すときは可能動詞にすることが多いが、助動詞「れる」を使うこともある。

（例）行く→行ける（可能動詞）　行く→行かれる（助動詞）

・「行けれる」といった言い方は、れ足す言葉といい、共通語では規範的ではないとされる。　※このペンなら書けれる（×）よ。

確認テスト

(1) 次の①〜④の動詞が、自動詞なら**ア**、他動詞なら**イ**で、それぞれ答えなさい。

① 動く〔　　〕　② 動かす〔　　〕
③ 変える〔　　〕　④ 変わる〔　　〕

(2) 次の中から、――線部が可能動詞であるものを二つ選びなさい。

ア 何も話せない。　**イ** 何も話さない
ウ これで書きます。　**エ** これで書けます。

〔　　・　　〕

(3) 例に従って、次の①〜④の動詞が五段活用の動詞なら可能動詞を答えなさい。また、五段活用以外の動詞なら助動詞「られる」を付けた形を答えなさい。

（例）話す→〔話せる〕　見る→〔見られる〕

① 言う〔　　〕〔　　〕
② 来る〔　　〕〔　　〕
③ 走る〔　　〕〔　　〕
④ 起きる〔　　〕〔　　〕

(4) 次の中から、――線部が補助動詞であるものを三つ選びなさい。

ア とりあえずやってみる。　**イ** 美術館で絵画を見る。
ウ メモを机の上に置く。　**エ** 楽しみをとっておく。
オ お土産を学校でもらう。　**カ** お菓子（かし）を買ってもらう。

〔　　・　　・　　〕

形容詞の活用

形容詞の活用形には未然形・連用形・終止形・連体形・仮定形があり、命令形はない。

基本形	語幹（活用形／続き方）	未然形	連用形	終止形	連体形	仮定形	命令形
	続き方	—う	—た —ない —なる	—。 言い切る。	—とき —こと —ので	—ば	—。 命令して 言い切る。
明るい	あかる	かろ	かっ く （う）	い	い	けれ	○

動詞と形容詞で、続き方が異なることがあるので注意する。

（例）「〜ない」が続くとき

・動詞　話さ（未然形） ない（助動詞）　（一文節）

「ない」は助動詞で、「話さ」は未然形。

・形容詞　明るく（連用形）／ ない（補助形容詞）　（二文節）

「ない」は補助形容詞（用言）で、「明るく」は用言に連なるので連用形。

形容詞は連用形で音便（おんびん）が現れることがある。

・ウ音便

（例）明るく　ございます　→　明るう｜ございます

楽しく　ございます　→　楽しゅう｜ございます

補助形容詞

形容詞のうち、上の語に意味を補う、本来の意味が薄（うす）れた形容詞を、**補助形容詞（形式形容詞）**という。

（例）リンゴが　赤く　ない（補助形容詞）。

補助形容詞には「ない・よい・ほしい」などがあり、主に次の形で用いられる。

・形容詞（形容動詞）＋補助形容詞「ない」

・〜て（で）＋補助形容詞

（例）〜て　ない　　〜て　よい　　〜て　ほしい

形容動詞の活用

形容動詞の活用形には未然形・連用形・終止形・連体形・仮定形があり、命令形はない。「〜です」の形容動詞には仮定形もない。

形容詞と形容動詞には語幹が共通するものもある。活用語尾（ごび）がどちらの活用表にあるかで見分けるとよい。

（例）暖かい（形容詞）｜日。　暖かな（形容動詞）｜日。

基本形	語幹（活用形／続き方）	未然形	連用形	終止形	連体形	仮定形	命令形
	続き方	—う	—た —ない —なる	—。 言い切る。	—とき —こと —ので	—ば	—。 命令して 言い切る。
静かだ	しずか	だろ	だっ で に	だ	な	なら	○
静かです	しずか	でしょ	でし	です	（です）	○	○

確認テスト

(1) 形容詞「新しい」を、①～④の続く言葉に合わせてそれぞれ形を変え、活用語尾を答えなさい。

① 新し［　　］う　② 新し［　　］た

③ 新し［　　］なる　④ 新し［　　］ば

(2) 次の①～⑥の――線部の形容詞の活用形の種類を、それぞれ**ア**～**オ**から選びなさい。ただし同じ記号を何度使ってもよい。

① 今日は暑かった。［　　］　② とても暑い。［　　］

③ 暑い夏になる。［　　］　④ 暑ければ休もう。［　　］

⑤ 外は暑かろう。［　　］　⑥ 今年は暑くなる。［　　］

ア 未然形　**イ** 連用形　**ウ** 終止形

エ 連体形　**オ** 仮定形

(3) 次の中から、――線部が補助形容詞であるものを二つ選びなさい。

ア 問題は難しくない。　**イ** 何も問題はない。

ウ ヒントがほしい。　**エ** 答えを教えてほしい。

［　　・　　］

(4) 形容動詞「爽(さわ)やかだ」を、①～④の続く言葉に合わせてそれぞれ形を変え、活用語尾を答えなさい。

① 爽やか［　　］う　② 爽やか［　　］た

③ 爽やか［　　］なる　④ 爽やか［　　］風

(5) 次の①～⑥の――線部の形容動詞の活用形の種類を、それぞれ**ア**～**オ**から選びなさい。ただし同じ記号を何度使ってもよい。

① もう元気だろう。［　　］　② 元気ならばよいが。［　　］

③ 彼(かれ)は元気だ。［　　］　④ とても元気だった。［　　］

⑤ 元気な人だね。［　　］　⑥ みんな元気になる。［　　］

ア 未然形　**イ** 連用形　**ウ** 終止形

エ 連体形　**オ** 仮定形

(6) 次の①～④の――線部が、形容詞なら**ア**、形容動詞なら**イ**、その他なら**ウ**で、それぞれ答えなさい。

① 小さい模様。［　　］　② 小さな模様。［　　］

③ 細かい模様。［　　］　④ 細かな模様。［　　］

活用のない自立語（1）

活用のない自立語

自立語の中で、活用がなく、主語になることができるものを**体言**という。品詞では、名詞が体言に当たる。

・**名詞**……物事の名前を表す。物事を指し示す。

その他の活用のない自立語は、文中の働きによって分類される。

・**副詞**……主に連用修飾語になる。状態や程度などを表す。
・**連体詞**…常に連体修飾語になる。
・**接続詞**…接続語になる。前後の文や語をつなぐ。
・**感動詞**…独立語になる。感動・呼びかけ・挨拶・応答を表す。

- 単語
  - **自立語**
    - 活用する ― 述語になる（用言）
      - 動作・作用・存在を表す・終止形が「ウ段」で終わる ― **動詞**
      - 状態・性質を表す
        - 終止形が「い」で終わる ― **形容詞**
        - 終止形が「だ・です」で終わる ― **形容動詞**
    - 活用しない
      - 主語になる（体言） ― 物事の名前を表す・物事を指し示す ― **名詞**
      - 修飾語になる
        - 主に用言を修飾する ― **副詞**
        - 常に体言を修飾する ― **連体詞**
      - 接続語になる ― **接続詞**
      - 独立語になる ― **感動詞**
  - **付属語**
    - 活用する ― **助動詞**
    - 活用しない ― **助詞**

名詞

名詞は、助詞などを伴って主語になることができるほか、述語・修飾語・接続語・独立語になることもできる。

（例）鳥が（主） 飛ぶ。 あれは 鳥だ（述）。 鳥の（修飾） 巣。

名詞は、次のように分類される。

普通名詞	ある種類に属する人や物事などを広く表す。（例）山・花・学校
固有名詞	人名・地名など特定のものを表す。（例）夏目漱石・東京・万葉集
代名詞	人や物事、場所、方向などを指し示す。（例）人称代名詞…私・あなた・彼・誰 指示代名詞…これ・そこ・あちら・どれ
数詞	数量や順序を表す。（例）一人・二個・いくつ・何本
形式名詞	本来の意味が薄れ、常に連体修飾語とともに使われる。（例）勉強すること 暑いとき 雨のため

確認テスト

(1) 次の①〜⑧の名詞の種類を、それぞれ**ア**〜**エ**から選びなさい。

①北海道［　　］　②動物［　　］　③何匹［　　］

④こちら［　　］　⑤五回［　　］　⑥本［　　］

⑦源頼朝［　　］　⑧あなた［　　］

ア 普通名詞　**イ** 固有名詞　**ウ** 代名詞　**エ** 数詞

(2) 次の中から、――線部が形式名詞であるものを選びなさい。

ア 彼のことを知っていますか。

イ リンゴはいくつ必要ですか。

ウ 駅はどちらにありますか。

エ 私が読んだのはそれです。

［　　］

(3) 次の中から、――線部が名詞であるものを三つ選びなさい。

ア 雨だと思ったが晴れた。

イ 今日の天気は晴れだ。

ウ とても難しい話だ。

エ 学校で友達と話した。

オ 象は鼻が長い。

カ これくらいの長さだ。

［　・　・　］

(4) 例に従って、次の文に含まれる名詞を、全て□で囲みなさい。

（例）彼は中学生だ。

この学校の校庭には、有名な木が立っている。

(5) 次の各文の――線部の文節の働きを、それぞれ**ア**〜**オ**から選びなさい。

①夏休みがもうすぐ始まる。［　　］

②夏休みなので、遊びに行こう。［　　］

③夏休み、これは大切な時間です。［　　］

④これが夏休みの宿題です。［　　］

⑤来週の月曜日は夏休みです。［　　］

ア 主語　**イ** 述語　**ウ** 修飾語　**エ** 接続語　**オ** 独立語

活用のない自立語 (2)

副詞

副詞は主に連用修飾語（しゅうしょくご）になり、状態や程度などを表す。

（例）ゆっくり　歩く（用言）。　もし　外に　出かける（用言）なら、

副詞は次のように分けられる。

・**状態の副詞**…「どのように」という状態や頻度（ひんど）を表す。
　擬音語（ぎおんご）（擬声語）・擬態語も含（ふく）まれる。

（例）ゆっくり・いつも・ざあざあ（擬音語（擬声語））・きらきら（擬態語）

※「ゆっくりと」「すぐに」の「と」「に」は、副詞の一部と考える。

・**程度の副詞**…「どれくらい」という程度を表す。

（例）とても・もっと・少し・かなり

※程度の副詞は、他の副詞や名詞を修飾することもある。
　とても　ゆっくり（副詞）　　もっと　前（名詞）

・**呼応（こおう）**（陳述（ちんじゅつ）・叙述（じょじゅつ））**の副詞**…話し手の判断や述べ方を表す。
　下に決まった言い方がくる。

（例）もし（～なら）・たとえ（～ても）・全く（～ない）
　きっと（～だろう）・まるで（～ようだ）・なぜ（～か）

連体詞

連体詞は常に連体修飾語になる。

（例）この　花（体言）　　ある　日（体言）

連体詞には次のようなものがある。

（～の）　この・その・あの・どの
（～な）　大きな・小さな・いろんな
（～る）　ある・あらゆる・いわゆる
（～た・だ）　たいした・とんだ

連体詞にはほかの品詞とまぎらわしいものもあるので注意する。

（例）大きな（連体詞）　鳥。　　大きい（形容詞）　鳥。
　ある（連体詞）　日。　　時間が　ある（動詞）。

修飾語になる品詞

副詞と連体詞はともに修飾語になる品詞だが、修飾語になるのは副詞・連体詞ばかりではないので注意する。

・連用修飾語　ゆっくり（副詞）　話す。　友達に（名詞）　話す。
　明るく（形容詞）　話す。　静かに（形容動詞）　話す。

・連体修飾語　この（連体詞）　花。　梅の（名詞）　花。　咲く（動詞）　花。
　赤い（形容詞）　花。　きれいな（形容動詞）　花。

確認テスト

(1) 例に従って、次の各文に含(ふく)まれる副詞に〰〰線を引き、副詞が修飾する文節に――線を引きなさい。また、副詞の種類をそれぞれ**ア**～**ウ**から選びなさい。

(例) 私は ゆっくりと 歩いた。

① 今日は ずいぶん おだやかな 日だ。 〔　〕

② 彼は 決して そんな ことは しない。 〔　〕

③ 私は そっと ドアを 開けた。 〔　〕

ア 状態の副詞　**イ** 程度の副詞　**ウ** 呼応の副詞

(2) 次の――線部の品詞の種類を、それぞれ**ア**～**エ**から選びなさい。

① 友達と歩く。 〔　〕　② のんびり歩く。 〔　〕

③ 速く歩く。 〔　〕　④ 静かに歩く。 〔　〕

ア 形容詞　**イ** 形容動詞　**ウ** 名詞　**エ** 副詞

(3) 呼応の副詞に注意して、解答欄に当てはまる言葉を答えなさい。

① どうやら雨が降り□□□。

② よもや延期にはなる□□。

(4) 例に従って、次の文に含まれる連体詞に〰〰線を引き、連体詞が修飾する文節に――線を引きなさい。

(例) ここには いろんな 本が ある。

その 赤い ペンを とって ください。

(5) 次の――線部の品詞の種類を、それぞれ**ア**～**エ**から選びなさい。

① 小さい花。 〔　〕　② 小さな花。 〔　〕

③ 咲(さ)く花。 〔　〕　④ バラの花。 〔　〕

ア 動詞　**イ** 形容詞　**ウ** 名詞　**エ** 連体詞

(6) 次の「こそあど言葉」の品詞をそれぞれ**ア**～**ウ**から選び、記号で答えなさい。ただし同じ記号を何度使ってもよい。

① こう 〔　〕　② ここ 〔　〕　③ こちら 〔　〕

④ この 〔　〕　⑤ これ 〔　〕　⑥ こんな 〔　〕

ア 名詞　**イ** 副詞　**ウ** 連体詞

活用のない自立語 (3)

接続詞

接続詞は接続語になり、前後の文や語をつなぐ。
接続語の働きには次のようなものがある。

・**順接**…前に述べた内容が、後に述べる内容の原因や理由になる。
(例) だから・すると・したがって

・**逆接**…前に述べた内容から予想されることとは違う内容が後にくる。
(例) しかし・ところが・けれども

・**並列**・**累加**…前に述べた内容に、後に述べる内容を並べたり、
内容を付け加えたりする。
(例) そして・また・しかも・そのうえ

・**対比**・**選択**…前後の内容を比べたり、
前後の内容のどちらかを選んだりする。
(例) 一方・または・それとも・あるいは

・**説明**・**補足**…前に述べた内容をまとめたり、理由を述べたりする。
また、内容を補う。
(例) つまり・なぜなら・例えば・ただし・ちなみに

・**転換**…前に述べた内容から話題を変える。
(例) さて・ところで・では

感動詞

感動詞は独立語になり、感動・呼びかけ・挨拶・応答などを表す。
(感動) ああ　　(呼びかけ) ねえ
(挨拶) おはよう　　(応答) はい・いいえ

まぎらわしい品詞

●「……だ」

・形容動詞の終止形
活用があるので、連体形「……な」の形にできる。
(例) ここは 静かだ。 → 「静かな」 ○
副詞「とても」で修飾できる。
(例) ここは 平和だ。 → ここは とても(○) 平和だ。

・名詞＋断定の助動詞「だ」
「……な」の形にできない。
(例) 彼は 中学生だ。 → 「中学生な」 ×
副詞「とても」で修飾できない。
(例) 私の 願いは 世界の 平和だ。
→ 私の 願いは 世界の とても(×) 平和だ。

●「……な」

・形容動詞の連体形
活用があるので、終止形「……だ」の形にできる。
(例) 静かな 湖。 → 「静かだ」 ○

・連体詞
活用がないので、「……だ」の形にはできない。
(例) 大きな 湖。 → 「大きだ」 ×

確認テスト

(1) 次の――線部の接続詞の働きを、それぞれ**ア**～**カ**から選びなさい。

① ずいぶん探した。しかし、どこにも見つからない。
② あそこにいるのは私の妹の娘（むすめ）、つまり、私のめいです。
③ この話は興味深く、しかも、考えさせられる内容です。
④ 今日は雨です。だから、傘（かさ）を持っていきなさい。
⑤ これで終わりますか。それとも、もう少し続けますか。
⑥ 説明は以上です。ところで、明日の準備はできましたか。

ア 順接　**イ** 逆接　**ウ** 並列・累加
エ 対比・選択　**オ** 説明・補足　**カ** 転換

①［　　］　②［　　］　③［　　］
④［　　］　⑤［　　］　⑥［　　］

(2) 次の各文は**ア**と**イ**のどちらか。それぞれ選びなさい。

① 今は五月だ。だから、まだ寒い。［　　］
② 今は五月だ。しかし、まだ寒い。［　　］

ア 話し手（書き手）は、五月は寒い時期だと思っている。
イ 話し手（書き手）は、五月は寒い時期ではないと思っている。

(3) 次の中から、――線部が感動詞であるものを選びなさい。

ア ふと、窓の外を見た。
イ おや、何かが落ちている。
ウ 先生、質問があります。

［　　］

(4) 次の中から、――線部が形容動詞であるものを**三つ**選びなさい。

ア 好きな季節は春だ。　**イ** 外の様子が変だ。
ウ 彼女（かのじょ）はいつも元気だ。　**エ** 彼は兄の親友だ。
オ そう考えるのが自然だ。　**カ** この町の魅力（みりょく）は郊外の自然だ。

［　　・　　・　　］

(5) 次の中から、――線部が形容動詞であるものを**二つ**選びなさい。

ア おかしな話。　**イ** にぎやかな通り。
ウ 小さな机。　**エ** 親切な人。

［　　・　　］

付属語（1）

助詞

付属語のうち、活用がないものを**助詞**という。助詞は自立語の後に付いて、語句と語句の関係を示したり、意味を付け加えたりする。

①**格助詞**…主に体言に付いて、語句と語句との関係を示す。
「が・を・に・と・へ・で・から・より・の・や」の10種類。
（例）主語を作る……鳥が飛ぶ。（主体）
連用修飾語を作る…本を読む。（対象）・先生に話す。（相手）
学校から帰る。（起点）
連体修飾語を作る…私の本。（所有）
並立の関係を作る…山や川。（列挙）

②**副助詞**…さまざまな語句に付いて、意味を添える。
「は・も・こそ・まで・でも・さえ・すら・だけ・のみ・しか・くらい（ぐらい）・ばかり・ほど・など・とか・なり・やら・か・ずつ」など。
（例）ネコは哺乳類です。（題目）　私も行きます。（同類）

③**接続助詞**…主に用言や助動詞に付いて、前後をつなぐ。
「て（で）・と・ば・から・ので・が・けれど・のに・ても（でも）・ながら・つつ・なり・し・たり」など。
（例）転んで、けがをした。（原因）　走っている。（補助の関係）

④**終助詞**…文や文節の終わりに付いて、話し手や書き手の気持ち、態度を表す。
「か・の・な・よ・ぞ・ぜ・さ・な（なあ）・ね（ねえ）」など。
（例）これは何ですか。（疑問）　走るな。（禁止）

※格助詞「が」と副助詞「は」の違い
・「が」の伝えたい内容は前。「は」の伝えたい内容は後。
彼が山田さんです。　彼は山田さんです。
・「は」は文全体の題目「……について言えば」を表す。
妹が帰ると遊びに行った。（遊びに行ったのはだれかわからない。）
妹は帰ると遊びに行った。（帰ったのも遊びに行ったのも妹。）
・「は」は、他のものと対比的に述べることがある。
リンゴが食べたい。
リンゴは食べたい。（リンゴ以外は食べたくない。）

助詞の用法

助詞にはさまざまな用法があり、同じ語でも種類が異なることがある。
（例）「から」
・格助詞　友達から聞く。
・接続助詞　暑いから休む。（原因・理由）＝暑い。だから休む。
また、同じ語、同じ種類の助詞でも、意味が異なることも多い。
（例）「の」
・連体修飾語を表す　私の本。
・主語を表す。　雪の降る日。＝雪が降る日。
※「が」に言い換えられる。
・体言の代用。　これは私のだ。＝これは私のものだ。
※「～のもの・こと」に言い換えられる。

確認テスト

(1) 次の――線部が、格助詞なら**ア**、副助詞なら**イ**で答えなさい。

① 花は咲く。［　］　② 花が咲く。［　］

③ 水を飲む。［　］　④ 水だけ飲む。［　］

⑤ 駅へ行く。［　］　⑥ 駅へも行く。［　］

(2) 次の――線部の接続助詞の働きをそれぞれ**ア**～**エ**から選びなさい。

① 走れば間に合うよ。［　］

② 走ったので間に合った。［　］

③ 走りつつ景色を眺めた。［　］

④ 走ったのに間に合わなかった。［　］

ア 原因・理由　**イ** 仮定の条件　**ウ** 逆接　**エ** 同時

(3) 次の――線部の終助詞の働きをそれぞれ**ア**～**エ**から選びなさい。

① いつ終わるの。［　］　② 一緒に帰ろうよ。［　］

③ もうわかったね。［　］　④ 何も言うな。［　］

ア 疑問（質問）　**イ** 禁止　**ウ** 勧誘　**エ** 念押し

(4) 次の――線部が、格助詞なら**ア**、接続助詞なら**イ**で答えなさい。

① あれが、私の家です。［　］

② 押したが、開かない。［　］

③ 冬になると、北風が吹く。［　］

④ 雨と風が激しい。［　］

(5) 次の――線部の助詞の働きをそれぞれ**ア**～**ウ**から選びなさい。

① 友達と話した。［　］　② 「いいえ。」と答える。［　］

③ スズメとカラス。［　］

ア 列挙　**イ** 相手　**ウ** 引用

(6) 次の――線部の助詞の働きをそれぞれ**ア**～**ウ**から選びなさい。

① 本を読むのは楽しい。［　］

② 木の苗を植える。［　］

③ いちょうの散る並木道。［　］

ア 連体修飾語を表す。　**イ** 主語を表す。

ウ 「～もの・こと」という意味を表す。

付属語⑵

助動詞

付属語のうち、活用があるものを**助動詞**という。助動詞は用言、体言や他の助動詞などに付いて、さまざまな意味を付け加える。

●れる・られる

・**受け身**…他からの動作を受ける。（名前を呼ばれる。）
「〜に…される」という意味を表す。

・**可能**……そうすることができる。（早く起きられる。）
「〜することができる」と言い換(か)えられる。

・**尊敬**……動作主への敬意を表す。（先生が話される。）
接続する動詞が、尊敬の対象となる人物の動作である。

・**自発**……自然とその状態になる。（故郷のことが思い出される。）
「自然と」を補える。前に心情を表す語があることが多い。

直前の動詞が五段・サ変の未然形なら「れる」。　書か れる。
上一段・下一段・カ変の未然形なら「られる」。　見 られる。

●せる・させる

・**使役**(しえき)…他に何かをさせる。　　（本を読ませる。）

直前の動詞が五段・サ変の未然形なら「せる」。　書か せる。
上一段・下一段・カ変の未然形なら「させる」。　見 させる。

※「見せる」「着せる」などは一語の動詞で、助動詞「せる」ではないので注意。

●ない・ぬ（ん）

・**打ち消し（否定）**…動作や物事を打ち消す。
（走らない。）（わかりません。）

※「ない」の識別

・**打ち消しの助動詞**…「ぬ（ん）」に言い換えられる。
（例）見ない（助動詞）→ 見ぬ（見ん）○
「いない」「しない」の「ない」も助動詞である。
直前の単語が動詞であることでも見分けられる。

・**形容詞**…「ぬ（ん）」に言い換えられない。
（例）水がない（形容詞）→ 水がぬ×
暑くない（補助形容詞）→ 暑くぬ×
「〜て（で）ない」や「形容詞（形容動詞）＋ない」の形なら補助形容詞。

・**形容詞の一部**
（例）危ない → 「危ない」で一つの形容詞。
ほかに「少ない・きたない」など。

確認テスト

(1) 次の――線部の意味を、それぞれ**ア**～**エ**から選びなさい。

① あの方も出席される。［　　］

② 春の陽気が感じられる。［　　］

③ 弟が母にしかられる。［　　］

④ 私は何でも食べられる。［　　］

ア 受け身　**イ** 可能　**ウ** 尊敬　**エ** 自発

(2) 次の――線部に、助動詞「れる・られる」を付けた形をそれぞれ答えなさい。

① 今日は来る。［　　］

② 本を渡す。［　　］

(3) 次の――線部に、助動詞「せる・させる」を付けた形をそれぞれ答えなさい。

① お使いに行く。［　　］

② 礼服を着る。［　　］

(4) 次の中から、――線部が助動詞であるものを三つ選びなさい。

ア 書くものがない。
イ 何も知らない。
ウ そんなことはできない。
エ 部屋がきたない。
オ 外はまだ明るくない。
カ どこにもいない。

［　　・　　・　　］

付属語(3)

助動詞

●う・よう

・**意志**…何かをしようとする。（私から話そう。）
「（私が）〜しよう」と言い換えられる。

・**推量**…想像・予想し、推し量る。（外は暑かろう。）
「〜だろう」と言い換えられる。

・**勧誘**…何かをしようと誘う。（一緒に帰ろう。）
「（一緒に）〜しよう」と言い換えられる。

直前の動詞が五段活用の未然形なら「う」。　書こう。
それ以外の活用の動詞の未然形なら「よう」。　見よう。

●まい

・**打ち消しの意志**…何かをしないようにする。（もう話すまい。）
「〜ないようにしよう」と言い換えられる。

・**打ち消しの推量**…そうならないだろうと推し量る。（ドアは開くまい。）
「〜ないだろう」と言い換えられる。

●たい・たがる

・**希望**…話し手や書き手が何かを望む。（遊びたい。）
話し手や書き手以外が何かを望む。（遊びたがる。）

●ます

・**丁寧**…相手に対する丁寧な気持ちを表す。（始めます。）

●た（だ）

・**過去**…現在より以前である。（昨日、友達と話した。）

・**完了**…物事が終了した。（今、着いたよ。）
「もう〜（してしまった）」
「ちょうど〜（したところだ）」を補える。

・**存続**…ある状態が続いている。（眼鏡をかけた人。）
「〜ている」と言い換えられる。

・**想起（確認）**…思い出す、確かめる。（これだったよね。）

確認テスト

(1) 次の——線部の意味を、それぞれ**ア**～**ウ**から選びなさい。

① またここに来ることもできよう。

② 休みなら公園に行こうよ。

③ そろそろ始めようかな。

ア 意志　**イ** 推量　**ウ** 勧誘

(2) 次の——線部の意味は**ア**と**イ**のどちらか。それぞれ選びなさい。

① もう弱音をはくまい。

② 今日は雪にはなるまい。

ア 打ち消しの意志　**イ** 打ち消しの推量

(3) 次の——線部の意味は**ア**と**イ**のどちらか。それぞれ選びなさい。

① 本を読みました。

② 本を読みたかった。

ア 希望　**イ** 丁寧

(4) 次の——線部の意味を、それぞれ**ア**～**エ**から選びなさい。

① 昔、駅前に公園があった。

② 壁（かべ）にかけられた絵を眺（なが）める。

③ そういえばそうでしたね。

④ もう準備ができましたよ。

ア 過去　**イ** 完了　**ウ** 存続　**エ** 想起（確認）

助動詞

●らしい

・**推定**（すいてい）…根拠（こんきょ）をもとに推し量る（お）。（外は雪らしい。）

※「らしい」の識別

・**推定の助動詞**…「どうやら～」を補える。

（例）彼（かれ）は 先生 の 子ども らしい。

・**形容詞の一部（接尾語（せつび））**…「いかにも～」を補える。

（例）彼 は 子どもらしい 性格 だ。

※「子どもらしい」という形容詞の一部。

●そうだ・そうです

・**様態・推定**…様子や状態から推し量る。（雪が降りそうだ。）

※動詞の連用形や形容詞・形容動詞の語幹に接続する。

・**伝聞**………人から伝え聞く。（雪が降るそうだ。）

※用言の終止形に接続する。

●ようだ・ようです

・**推定**…根拠をもとに推し量る。（雪が降るようだ。）

・**たとえ（比喩（ひゆ））**…物事をたとえる。（まるで山のようだ。）

・**例示**…具体的な例を示す。（日本のような島国。）

●だ・です

・**断定**…確かなこととして言い切る。（彼は中学生だ。）

※「～だ」の識別

・**名詞（助詞「の」）＋断定の助動詞「だ」**

「……な」の形にできない。

（例）彼は 中学生だ。 → 「中学生な」×

副詞「とても」で修飾（しゅうしょく）できない。

（例）私の願いは 平和だ。

→ 私の願いは ×とても 平和だ。

・**形容動詞の終止形**

連体形「……な」の形にできる。

（例）ここは 静かだ。 → 「静かな」○

副詞「とても」で修飾できる。

（例）ここは 平和だ。 → ここは ○とても 平和だ。

・**動詞＋過去（完了（かんりょう）・存続）の助動詞「だ」**

（例）本を読んだ。

確認テスト

(1) 次の——線部は**ア**と**イ**のどちらか。それぞれ選びなさい。

① 彼らしい発言だ。〔　〕

② 彼が来たらしい。〔　〕

ア 推定の助動詞　**イ** 形容詞の一部

(2) 次の——線部の意味は**ア**と**イ**のどちらか。それぞれ選びなさい。

① 式が始まりそうだ。〔　〕

② 式が始まるそうだ。〔　〕

ア 様態・推定　**イ** 伝聞

(3) 次の——線部の意味を、それぞれ**ア**～**ウ**から選びなさい。

① 梅雨(つゆ)の時期には、滝(たき)のような雨が降る。〔　〕

② レモンのようにすっぱいものが苦手だ。〔　〕

③ 今日はずいぶん疲(つか)れているようだ。〔　〕

ア 推定　**イ** たとえ（比喩）　**ウ** 例示

(4) 次の——線部は何か。それぞれ**ア**～**ウ**から選びなさい。

① ここは安全だ。〔　〕

② 明日は休みだ。〔　〕

③ 海で泳いだ。〔　〕

ア 断定の助動詞　**イ** 過去の助動詞　**ウ** 形容動詞の一部

助動詞活用表

意味	基本形	未然形	連用形	終止形	連体形	仮定形	命令形	主な接続
受け身 可能 尊敬 自発	れる	れ	れ	れる	れる	れれ	れろ れよ	未然形（五段・サ変動詞）
	られる	られ	られ	られる	られる	られれ	られろ られよ	未然形（上一段・下一段・カ変動詞、一部の助動詞）
使役（しえき）	せる	せ	せ	せる	せる	せれ	せろ せよ	未然形（五段・サ変動詞）
	させる	させ	させ	させる	させる	させれ	させろ させよ	未然形（上一段・下一段・カ変動詞）
打ち消し （否定）	ない	なかろ	なかっ なく	ない	ない	なけれ	○	未然形（動詞、一部の助動詞）
	ぬ（ん）	○	ず	ぬ（ん）	ぬ（ん）	ね	○	
意志 推量 勧誘（かんゆう）	う	○	○	う	（う）	○	○	未然形（五段動詞、形容詞、形容動詞、一部の助動詞）
	よう	○	○	よう	（よう）	○	○	未然形（五段以外の動詞、一部の助動詞）
打ち消しの意志 打ち消しの推量	まい	○	○	まい	（まい）	○	○	終止形（動詞） ※五段以外の動詞の場合は未然形に付くこともある。
希望	たい	たかろ	たかっ たく とう	たい	たい	たけれ	○	連用形（動詞、一部の助動詞）
	たがる	たがら たがろ	たがり たがっ	たがる	たがる	たがれ	（たがれ）	

意味	基本形	未然形	連用形	終止形	連体形	仮定形	命令形	主な接続
丁寧	ます	ませ ましょ	まし	ます	ます	ますれ	（ませ） （まし）	連用形（動詞、一部の助動詞）
過去 完了 存続 想起（確認）	た （だ）	たろ （だろ）	○	た （だ）	た （だ）	たら （だら）	○	連用形（動詞、形容詞、形容動詞、一部の助動詞）
推定	らしい	○	らしかっ らしく らしゅう	らしい	らしい	（らしけれ）	○	終止形（動詞、形容詞）、形容動詞の語幹、体言　など
様態 推定	そうだ	そうだろ	そうだっ そうで そうに	そうだ	そうな	そうなら	○	連用形（動詞、一部の助動詞）、形容詞・形容動詞の語幹
	そうです	そうでしょ	そうでし	そうです	（そうです）	○	○	
伝聞	そうだ	○	そうで	そうだ	○	○	○	終止形（動詞、形容詞、形容動詞、一部の助動詞）
	そうです	○	そうでし	そうです	（そうです）	○	○	
推定 たとえ（比喩） 例示	ようだ	ようだろ	ようだっ ようで ように	ようだ	ような	ようなら	○	連体形（動詞、形容詞、形容動詞、一部の助動詞）、体言＋助詞「の」、「この」などの連体詞
	ようです	ようでしょ	ようでし	ようです	（ようです）	○	○	
断定	だ	だろ	だっ で	だ	（な）	なら	○	体言、助詞「の」　など ※「だろ（でしょ）」＋「う」、「なら」＋「ば」などの場合は動詞・形容詞の終止形にも付く。
	です	でしょ	でし	です	（です）	○	○	

二字熟語

二字以上の漢字が組み合わさってできた語を**熟語**という。熟語の構成を理解すると、その語の意味を推測しやすくなる。
二字熟語の構成には次のようなものがある。

●二字が**似た意味**をもつもの。
（例）思考（思う≒考える）　道路（道≒路）

●二字が**対**(つい)**の意味**をもつもの。
（例）高低（高い⇔低い）　進退（進む⇔退く）

●上の漢字が**主語**、下の漢字が**述語**の関係になるもの。（主・述の関係）
（例）国立（国が立てる）　雷鳴(らいめい)（雷(かみなり)が鳴る）

●上の漢字が下の漢字を**修飾**(しゅうしょく)するもの。（修飾・被(ひ)修飾の関係）
（例）海水（海の水）　必要（必ず要(い)る）

●下の漢字が上の漢字の**目的**や**対象**となるもの。
（例）読書（書を読む）　着席（席に着く）

●**同じ漢字**を重ねるもの。
（例）転転（転々）　喜喜（喜々）
※「々」は、同じ漢字を重ねることを表す記号で、**踊**(おど)**り字**という。

二字が「主・述の関係」になっている熟語と「修飾・被修飾の関係」になっている熟語は、上から下への係り受けの方向が同じなのでまぎらわしい。上の漢字に「……が」を付けて読み、主語になっているかどうかを確認(かくにん)するとよい。

・人造（人が造る）→ 主語と述語の関係
・偉人(いじん)（偉(えら)い人）→ 修飾語と被修飾語の関係

確認テスト

(1) 次の中から、意味が似ている漢字を組み合わせた熟語を選びなさい。

ア 往復　**イ** 最大　**ウ** 日没（にちぼつ）　**エ** 絵画　〔　　〕

(2) 次の中から、意味が対になる漢字を組み合わせた熟語を選びなさい。

ア 温暖　**イ** 停止　**ウ** 豊富　**エ** 乗降　〔　　〕

(3) 次の中から、上の漢字が主語、下の漢字が述語の関係になっている熟語を選びなさい。

ア 清流　**イ** 地震（じしん）　**ウ** 濃霧（のうむ）　**エ** 売買　〔　　〕

(4) 次の中から、上の漢字が下の漢字を修飾する熟語を選びなさい。

ア 暗示　**イ** 負傷　**ウ** 就職　**エ** 取捨　〔　　〕

(5) 次の中から、下の漢字が上の漢字の目的や対象となる熟語を選びなさい。

ア 親友　**イ** 晴天　**ウ** 拡大　**エ** 登山　〔　　〕

(6) 次の熟語と、構成が同じものを選びなさい。

貧富（ひんぷ）

ア 納税　**イ** 弱点　**ウ** 師弟（してい）　**エ** 開会　〔　　〕

(7) 次の中から、熟語の構成が他と異なるものを選びなさい。

ア 年長　**イ** 頭痛　**ウ** 国営　**エ** 恩人　〔　　〕

(8) 次の熟語の構成を選びなさい。

再会

ア 上の漢字が主語、下の漢字が述語の関係になる。
イ 上の漢字が下の漢字を修飾する。
ウ 下の漢字が上の漢字の目的や対象を示す。

〔　　〕

熟語の構成 (2)

二字熟語

二字熟語の構成には他に次のようなものもある。

●上に**接頭語**「**不・無・非・未**」が付くもの。
「不・無・非・未」は、打ち消しや、存在しないといった意味をもつ漢字である。

（例）不安（安心でない）
　　無理（理がない）
　　非常（常ではない）
　　未来（まだ来ていない）

●下に**接尾語**「**的・性・然・化**」が付くもの。
「的・性・然」は性質や状態などの意味を、「化」は変化の意味をもつ漢字である。

（例）知的（知性がある様子の）
　　急性（急に起こる性質の）
　　平然（平気な様子）
　　美化（美しくする）

●長い熟語を**省略**したもの。

（例）特急（特別急行）
　　国連（国際連合）
　　原発（原子力発電所）

三字熟語

三字熟語の構成には次のようなものがある。

●漢字一字の語を組み合わせたもの。

（例）衣食住…衣＋食＋住

●漢字一字の語と二字熟語を組み合わせたもの。

（例）未完成…未＋完成
　　共通語…共通＋語

四字熟語

四字熟語の構成には次のようなものがある。

●漢字一字の語を組み合わせたもの。

（例）春夏秋冬…春＋夏＋秋＋冬

●二字熟語を組み合わせたもの。

（例）自由研究…自由＋研究

確認テスト

(1) 次の中から、上に打ち消しの「無」を付けて熟語となるものを選びなさい。

ア 在　イ 来　ウ 運　エ 益　〔　　〕

(2) 次の熟語の上に付ける打ち消しの意味をもつ漢字として最も適当なものを選びなさい。

常識

ア 不　イ 無　ウ 非　エ 未　〔　　〕

(3) 次の中から、下に「性」を付けて熟語となる漢字として最も適当なものを選びなさい。

ア 理　イ 突　ウ 美　エ 端　〔　　〕

(4) 次の中から、熟語の構成が他とは異なるものを選びなさい。

ア 液化　イ 難化　ウ 変化　エ 緑化　〔　　〕

(5) 次の中から、熟語の構成が他とは異なるものを選びなさい。

ア 国連　イ 高校　ウ 乗車　エ 入試　〔　　〕

(6) 次の中から、熟語の構成が他とは異なるものを選びなさい。

ア 初対面　イ 大発見　ウ 天地人　エ 新製品　〔　　〕

(7) 次の中から、熟語の構成が他とは異なるものを選びなさい。

ア 平均気温　イ 通信手段　ウ 国立公園　エ 花鳥風月　〔　　〕

漢字の音訓

●音読み（音）

漢字の中国語での発音を元にした読み方を音読みという。

（例）花(カ)

音読みは単独では意味がわかりにくいものも多い。

次の場合は音読みであることが多い。（例外もある）

・「ン」（撥音(はつおん)）が入る。　（例）本(ホン)　※例外・何(なん)など

・小さい「ャ・ュ・ョ」が入る（拗音(ようおん)）。　（例）朝(チョウ)

・ラ行で始まる。　（例）楽(ラク)

●訓読み（訓）

漢字が表す意味に基づいて、もともと日本語にあった言葉を当てはめた読み方を訓読みという。

（例）花(はな)

訓読みは単独でも意味がわかりやすいものが多い。

また、訓読みは送り仮名が付くものも多い。

漢字の中には、音読み・訓読みのどちらか一方でしか使われないものや、複数の音読み・訓読みがあるものもある。

（例）明　音　メイ・ミョウ
　　　　　訓　あか-るい・あき-らか・あ-ける・あ-くる　など

確認テスト

(1) 次の中から、――線部が音読みのものを選びなさい。

ア 役場に行く。　イ 道具を使う。
ウ 仲間と集(つど)う。　エ 宿屋を出る。

〔　　〕

(2) 次の中から、――線部が音読みのものを選びなさい。

ア 雪国への旅。　イ 友達からの話。
ウ 店内のお客。　エ 三枚のお皿。

〔　　〕

(3) 次の中から、――線部が訓読みのものを選びなさい。

ア 作品の題名。　イ わずかな空席。
ウ 二階の窓ぎわ。　エ 熱いお茶。

〔　　〕

(4) 次の中から、――線部が訓読みのものを選びなさい。

ア 動物　イ 穀物　ウ 着物　エ 荷物

〔　　〕

(5) 次の熟語の中から、漢字が二字とも音読みであるものを選びなさい。

ア 空気　イ 手順　ウ 残高　エ 真夏

〔　　〕

(6) 次の熟語の中から、漢字が二字とも訓読みであるものを選びなさい。

ア 番組　イ 片側　ウ 株券　エ 料理

〔　　〕

熟語の読み (2)

熟語の読み

熟語は、音どうし（音＋音）、訓どうし（訓＋訓）という読み方のものが多いが、音と訓を組み合わせて読むものもある。

①音＋音　（例）山脈（サンミャク）

②訓＋訓　（例）朝日（あさひ）

③重箱（ジュウばこ）読み（音＋訓）　（例）駅前（エキまえ）

④湯桶（ゆトウ）読み（訓＋音）　（例）場所（ばショ）

熟字訓

熟語には、漢字一字ごとに読むのではなく、熟語全体で一つの訓を当てる特別な読み方をするものもあり、これを**熟字訓**という。

〈主な熟字訓〉

明日（あす）　小豆（あずき）　田舎（いなか）　乳母（うば）　叔父・伯父（おじ）　大人（おとな）　乙女（おとめ）　叔母・伯母（おば）
鍛冶（かじ）　風邪（かぜ）　固唾（かたず）　為替（かわせ）　昨日（きのう）　今日（きょう）　果物（くだもの）　今朝（けさ）　今年（ことし）　五月（さつき）
早苗（さなえ）　五月雨（さみだれ）　時雨（しぐれ）　尻尾（しっぽ）　竹刀（しない）　老舗（しにせ）　芝生（しばふ）　清水（しみず）　白髪（しらが）　相撲（すもう）
太刀（たち）　七夕（たなばた）　一日（ついたち）　梅雨（つゆ）　凸凹（でこぼこ）　名残（なごり）　雪崩（なだれ）　二十・二十歳（はたち）
二十日（はつか）　一人（ひとり）　日和（ひより）　二人（ふたり）　二日（ふつか）　吹雪（ふぶき）　迷子（まいご）　真面目（まじめ）　土産（みやげ）
息子（むすこ）　紅葉（もみじ）　八百屋（やおや）　大和（やまと）　弥生（やよい）　行方（ゆくえ）　若人（わこうど）

複数の読み方がある熟語

同じ漢字を使っていても、読み方によって意味が異なる熟語もある。

（例）風車　オランダの風車（フウシャ）。　風車（かざぐるま）で遊ぶ。
今日　今日（コンニチ）の世界情勢。　今日（きょう）はいい天気だ。

確認テスト

(1) 次の熟語の読み方をそれぞれ**ア**～**エ**から選びなさい。

① 若葉〔　〕　② 台所〔　〕

③ 油絵〔　〕　④ 社会〔　〕

ア 二字ともに音読み　**イ** 二字ともに訓読み

ウ 重箱読み　**エ** 湯桶読み

(2) 次の熟語の読み方をそれぞれ**ア**～**エ**から選びなさい。

① 役割〔　〕　② 手紙〔　〕

③ 行動〔　〕　④ 値段〔　〕

ア 二字ともに音読み　**イ** 二字ともに訓読み

ウ 重箱読み　**エ** 湯桶読み

(3) 次の日にちに関する言葉をそれぞれ漢字に直しなさい。

① きのう〔　〕　② きょう〔　〕

③ あす〔　〕

(4) 次の熟語の読みをそれぞれ答えなさい。ただし、いずれも熟字訓である。

① 五月雨〔　〕　② 梅雨〔　〕

③ 時雨〔　〕

(5) 次の熟語の読みをそれぞれ答えなさい。ただし、いずれも熟字訓である。

① 竹刀〔　〕　② 為替〔　〕

③ 雪崩〔　〕

(6) 次の——線部の読みをそれぞれ答えなさい。

① 演技が上手になる。〔　〕

② 舞台(ぶたい)の上手に立つ。〔　〕

③ 彼(かれ)のほうが一枚上手だった。〔　〕

同じ音をもつ漢字

同じ音をもつ漢字を**同音異字**という。中国語と日本語では発音のしかたが異なるので、中国語では異なる発音でも、日本語の音読みでは同じ音となった漢字も多い。
(例)口・工・広・交・向
同じ読みで、異なる意味をもつ語を**同音異義語**という。
(例)正確と性格

タイショウ		
対象	行為(こうい)の目標。	(調査の対象。)
対称	つり合っている。	(左右対称。)
対照	照らし合わせて比べる。	(対照的な性格。)

イギ		
意義	意味、価値。	(意義のある仕事。)
異義	異なる意味。	(同音異義語。)
異議	異なる意見。	(異議を唱える。)

ホショウ		
保証	確かだと請(う)け合う。	(正しいと保証する。)
保障	立場や権利を保護し守る。	(憲法で保障された権利。)
補償	損失を補う。	(損害を補償する。)

カンショウ		
鑑賞	芸術作品を味わう。	(音楽を鑑賞する。)
観賞	見て楽しむ。	(熱帯魚を観賞する。)
干渉	他人のことに立ち入る。	(他国の政治に干渉する。)
感傷	物に感じて心をいためる。	(感傷的になる。)

確認テスト

(1) 次の――線部を漢字に直しなさい。

① 止まれとシジされる。

② 国民のシジを得る。

(2) 次の――線部を漢字に直しなさい。

① 駅まで車でイドウした。

② 海外支店にイドウになる。

③ 原作とのイドウが気になる。

(3) 次の――線部を漢字に直しなさい。

① シュウカン誌を読む。

② 天気のシュウカン予報。

③ 早起きがシュウカンになる。

(4) 次の――線部を漢字に直しなさい。

① 同音異義語にカンシンをもつ。

② すばらしい演奏にカンシンした。

③ 昨今の風潮はカンシンに堪(た)えない。

(5) 次の――線部を漢字に直しなさい。

① 校庭をカイホウする。

② 人質をカイホウする。

③ 病気がカイホウに向かう。

同じ訓をもつ漢字

同じ訓をもつ漢字を**同訓異字**という。漢字ごとの意味の違いに注意して、同訓異字を使い分けるようにする。

(例) 友達と会う。　性格が合う。

あつい	
暑い	気温が高い。(夏は暑い。　猛暑)
熱い	物質が熱をもっている。(お湯が熱い。　熱湯)
厚い	幅が大きい。(本が厚い。　厚紙) 気持ちの入れ方の程度が深い。(人情に厚い。　温厚)

あらわす	
表す	思いや意味を示す。(思いを表す。　表情)
現す	見えなかった形を見せる。(姿を現す。　出現)
著す	書物を書き、世に出す。(本を著す。　著書)

はかる	
計る	時間、数などを調べる。 (時間を計る。　時計・計算・計画)
測る	長さ、高さ、面積、深さなどを調べる。 (面積を測る。　観測・測定)
量る	重さ、体積などを調べる。 (分量を量る。　重量・雨量)
図る	物事を実行するために工夫する。 (解決を図る。　意図)
諮る	相談する、協議する。 (会議に諮る。　諮問)
謀る	くわだてる、だます。 (悪事を謀る。　陰謀)

確認テスト

(1) 次の――線部を漢字に直しなさい。

① 勉強をはじめる。

② はじめての出来事。

(2) 次の――線部を漢字に直しなさい。

① 机を隣(となり)の部屋にうつす。

② ノートに書きうつす。

③ 池に月がうつっている。

(3) 次の――線部を漢字に直しなさい。

① 窓をあける。

② 夜があける。

③ 席をあける。

(4) 次の――線部を漢字に直しなさい。

① 会社につとめる。

② 主役をつとめる。

③ 解決につとめる。

(5) 次の――線部を漢字に直しなさい。

① 成功をおさめる。

② 税金をおさめる。

③ 国をおさめる。

④ 学問をおさめる。

説明的文章　指示語の内容の捉え方

　世の中のすべての生物が、ナンバー1になれる※ニッチを探し求め、他の生物とニッチが重ならないようにニッチをずらしていく。これが「ニッチ分化」または「ニッチシフト」と呼ばれる現象である。

　そして、ジグソーパズルのたくさんのピースのように、たくさんの生物によってニッチが埋（う）められているのだ。

　どんな生き物も、ナンバー1になる場所がなければ生きていくことができない。

　それでは、弱い生き物は、どのようにしてジグソーのピースを手に入れれば良いのだろうか。

　どんな生き物も、ニッチを得るためにはナンバー1にならなければならない。弱い生物はニッチを欲張ってはいけない。大きなピースを埋め込（こ）むことは難しいが、小さなピースであれば、はめ込むチャンスが生まれる。

　たとえば、百獣（ひゃくじゅう）の王として、サバンナでナンバー1になることは難しくても、他の動物が寝（ね）静まった夜に行動すれば良い。ただ、夜に行動する生き物は他にもいるから、①それだけでナンバー1になることは難しい。そうであれば、他の生き物は見向きもしないような土の中のミミズを食べるニッチがある。②それがサバンナのハリネズミのニッチである。このニッチでハリネズミはナンバー1である。

　このように条件を小さく狭（せま）く、細かくすれば、限られたニッチの中でナンバー1になれるチャンスが生まれてくるのである。

（稲垣栄洋『弱者の戦略』新潮社　による。一部表記を変えた箇所がある）

※ニッチ…すきまの領域。ここではある種の生物が生息する環境、その種の生態的な地位のこと。

指示語の読み取り

説明的文章では、言葉や内容の繰（く）り返しを避（さ）けるために**指示語**がよく使われる。指示語が表す内容は、次のようにして捉（とら）えるとよい。

①指示語を含（ふく）む文に注目し、指示語の内容を押（お）さえる。

②指示語が指す内容を探す。

・多くの場合、指示語の指す内容は指示語の前にある。

（例）私には大事にしている宝物がある。それは祖父からもらった時計だ。

・後に続く内容を指す場合もあるので注意する。

③探した内容を指示語に当てはめて、意味が通じるか確かめる。

（例）（私が）大事にしている宝物は祖父からもらった時計だ。

例題

――線「これ」が指している内容を、解答欄(かいとうらん)に合うように文章中から四十五字以上、五十字以内で探し、最初と最後の三字を答えなさい。

生物が、（　四十五字以上、五十字以内　）現象。

□□□〜□□□

確認テスト　本文を読んで、問いに答えなさい。

(1) ――線①「それだけで」が指す内容となるように、解答欄に当てはまる言葉を本文中から六字で書きぬきなさい。

□□□□□□だけで

(2) ――線②「それ」とは何か。本文中から三十字で探し、最初と最後の三字を答えなさい。

□□□〜□□□

(3) 弱い生き物はどのようにしてニッチを得ているのか。本文の内容に合うものを選びなさい。

ア　ナンバー1(ワン)になるのではなく、欲張らずに他の生物たちと同じニッチの中で生きるようにしている。

イ　サバンナのような大きな環境でナンバー1(ワン)になれるよう、他の生物にはない強みをもつようにしている。

ウ　行動する時間や食べものなどの条件を小さく狭くし、限られた中で他の生物と重ならないニッチを得ている。

〔　　〕

説明的文章　接続語の捉え方

　他人を羨ましいと感じるときがある。羨ましいなどと思ってはいけないと言う人もあるが、このような感情は勝手に生じてくるので、いかんともし難いものである。それはいけないというので、一所懸命に抑えこもうとしたり、羨ましいなどと感じる自分は悪い人間であると、自分を責めたり、※卑下したりして、余計に問題を大きくしてしまう人もある。

　羨ましい気持が起こったら、それは自然に生じてきたことだから、よしあしを言う前にそれはそれと認めることにしよう。そして、いったいそれがどのあたりから来ているか、考えてみることにしてはどうだろう。あんがいなことが見つかるものである。

　羨ましいというのは、物にしろ能力にしろ、ともかく自分の持っていないものを他人が持っている、というところに生じてくる感情である。□、自分の持っていないものを他人が持っているときに必ず生じるとは限らないところに、その不思議さがある。

（　）、自分は数学の才能が無いときに、知人のなかに数学のできる人が居たとする。そんなとき、別にそれだからと言って、何も感じないときもある。つまり、自分の生きてゆくこととあまり関係がないのである。また、その人を尊敬することもある。羨ましいと感じるよりも、偉い人だと感じて尊敬の気持が湧いてくる。このような場合のことを考えると、羨ましいというのは、他人が何か自分の持っていないものを持っているという事実にプラスされるXがないと生じない、ということがわかる。

（河合隼雄『こころの処方箋』新潮社　による）

※卑下…自ら劣ったものとしていやしめること。へりくだること。

接続語の読み取り

特に説明的な文章では、接続語に注目すると内容が捉えやすくなる。それぞれの語句がどのような関係を表すのかを理解しておく。

順接	前の内容が、後の内容の原因・理由になる。（例）だから、そこで、したがって、すると
逆接	前の内容から予想されることと逆の内容が後にくる。（例）しかし、だが、けれども、ところが
並列・累加	内容を並べる、付け加える。（例）そして、また、しかも、および、なお
対比・選択	前後の内容を比べる、前後のどちらかを選ぶ。（例）または、あるいは、それとも、もしくは
説明・補足	内容をまとめたり、理由や情報を補ったりする。（例）つまり、なぜなら、ただし、たとえば
転換	話題や観点を変える。（例）ところで、さて、では

例題

□に当てはまる接続語として最も適当なものを選びなさい。

ア だから　**イ** しかし
ウ つまり　**エ** なぜなら

〔　　〕

確認テスト 本文を読んで、問いに答えなさい。

(1) （　）に当てはまる接続語として、最も適当なものを選びなさい。

ア すると　**イ** ところが
ウ あるいは　**エ** たとえば

〔　　〕

(2) ――線部「このような場合」が表す内容として、適当でないものを選びなさい。

ア 自分が持っていないものを他人が持っているときに、羨ましく感じる場合。
イ 自分が持っていないものを他人が持っていても、別に何も感じない場合。
ウ 自分の持っていないものを他人が持っていて、その人を尊敬する場合。

〔　　〕

説明的文章

段落の要点・関係の捉え方

1 どんな生物でも、一人で生きていくことはできない。生物は必ず生態系の中で生きている。だから生物にとっては、生態系が崩壊せずに安定して存在し続けることが大切だ。そのためには、いろいろな種類の生物がいた方がよい。

2 たとえば、ある年に干ばつが起きたとしよう。そのとき、乾燥に弱い植物しかいなければ、その多くは枯れてしまう。そのため、光合成による有機物の生産は激減する。すると、光合成で作られる有機物に頼っていた動物なども激減し、中には絶滅するものもいるだろう。そうして、生態系は大きなダメージを受ける。

3 一方、乾燥に弱い植物だけでなく、乾燥に強い植物もいたとしよう。その場合は干ばつが起きても、光合成による有機物の生産はそれほど減らない。（　　）、動物などが絶滅することもない。生態系は大きなダメージを受けることなく、干ばつがすぎれば、再び以前のような生態系が回復するだろう。さらに、乾燥に強い植物も一種でなく何種もいた方が、生態系が安定する。

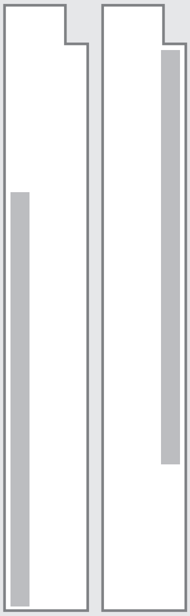
4 このように、種は異なるが、役割は同じ生物が複数いることを「冗長性」という。このような冗長性も含めて、いろいろな種類の生物がいることを「生物多様性」という。

（更科功『若い読者に贈る美しい生物学講義』ダイヤモンド社　による）

段落の要点・関係

各段落の**要点**（中心となる内容）を捉えるには、次のような箇所・表現に注目するとよい。

・各段落の初めや終わり。



・「まとめ」や「筆者の意見」を表す文。

（例）つまり、……。　このように、……。
……と思う。　……べきだ。

各段落の要点や、段落の冒頭の接続語などに注目すると、段落どうしの関係がわかりやすくなる。

例題

1段落と2段落の関係を正しく述べたものを選びなさい。

ア　1段落の事例に対して、2段落では対照的な事例を挙げている。
イ　1段落では一般論を述べ、2段落では筆者の主張を述べている。
ウ　1段落で述べた内容を、2段落では具体的に説明している。

〔　　〕

確認テスト　本文を読んで、問いに答えなさい。

(1)　2段落と3段落を通じて筆者が説明しようとしている内容として最も適当なものを選びなさい。

ア　生物は生態系の中で生きており、どんな生物も単体で生きていくことはできないこと。
イ　生態系が崩壊せずに安定して存在し続けるためには、いろいろな種類の生物がいた方がよいこと。
ウ　植物は光合成によって有機物を生産しており、この有機物によって動物が生きていること。

〔　　〕

(2)　（　　）に当てはまる言葉として適当なものを選びなさい。

ア　そのため　　イ　けれども
ウ　たとえば　　エ　ところで

〔　　〕

(3)　次の中から、本文の内容に当てはまらないものを選びなさい。

ア　生態系が存在し続けるためには、生態系の中にさまざまな種が存在するほうがよい。
イ　生態系の中に存在する種が、それぞれ他とは異なる役割を持っていることを冗長性という。
ウ　生態系にさまざまな種がいることを生物多様性といい、生物多様性が低いほど生態系は不安定になる。

〔　　〕

説明的文章　段落の役割・要旨の捉え方

1 なぜ、地震はこわいのでしょうか。

2 地震は突然くるから？　たしかにそうです。自然の災害は、地震のほかにも数多くあります。しかし、地震のように、なんの前触れもなく、突然おそってくるものは、ほかにはまずありません。

3 たとえば、台風は、何日もまえから刻々と予報がだされますし、実際に、何時間も前から風や雨が強くなって、危険の予告をしてくれます。土砂くずれや洪水でも、いきなりおそってくるというよりは、大雨のあととか、なにかの警戒のしるしがあってからおこるものです。

4 では、火山はどうでしょう。火山は地震に似て、いきなり人々をおそうことがあります。みなさんも、火山の噴火で多くの人が死んだり、古くはイタリアのポンペイのように、町ごと火山灰に埋まってしまった、といった被害のあったことを知っているでしょう。

5 □、火山は、たとえば、東京や大阪のまん中で、いきなり噴火が始まることはありません。火山の近くに住んでいる人たちは、十分、注意する必要があるでしょうが、日本のどこにでも、危険があるわけではありません。

6 これにくらべて、地震は、日本のどこがおそわれなくてすむのか、どこなら絶対に安全かということは、今の研究の水準では、残念ながらまだわかっていません。

7 ですから、地震は、いつくるか、どこにくるか、そのどちらもわからないうちにわたしたちをおそう、そういう意味では、たいへんにおそろしい災害です。

（島村英紀『地震をさぐる』国土社　による。一部表記を変えた箇所がある）

段落の役割と要旨

説明的文章を読むときには、各段落の文章中での役割に注目するとよい。

導入 話題提示 問い	話題に導く。話題を提示する。
根拠 具体例 答え	根拠を示す。例や対比を用いて具体的に説明をする。
まとめ 主張	説明をまとめる。筆者の主張を示す。

特に説明的文章では、「問い」を投げかけるかたちで**話題**が示されることが多い。「問い」と、それに対する「答え」に注目すると、文章の**要旨**（文章の中で最も伝えたいこと）を捉えやすくなる。

また、序論・本論・結論のまとまりにも注目するとよい。

・**序論**…話題を提示する。
・**本論**…事例や根拠を挙げて具体的に説明する。
・**結論**…内容をまとめる。主張を述べる。

（文章の構成の例）
・頭括型　**結論**　→　本論
・尾括型　（導入）　本論　→　**結論**
・双括型　**結論**　→　本論　→　**結論**

例題

[3]段落について正しく述べたものを選びなさい。

ア 地震以外の災害について具体的に説明することで、[2]段落の内容に説得力をもたせている。
イ 地震以外の災害について具体的に説明することで、[2]段落の内容に反論を加えている。
ウ 地震以外の災害についても説明し、新しい話題を提示している。

〔　　〕

確認テスト 本文を読んで、問いに答えなさい。

(1) □に当てはまる言葉として適当なものを選びなさい。

ア すると　**イ** でも
ウ あるいは　**エ** つまり

〔　　〕

(2) 次のA・Bはどの段落の内容を述べたものか。段落番号で答えなさい。

A 火山の危険は特定の場所に限られる。
B 台風や土砂くずれ、洪水は、発生の前触れがある。

A〔　　〕 B〔　　〕

(3) 本文の要旨として適当なものを選びなさい。

ア 台風や土砂くずれ、洪水などは、何らかの警戒のしるしがあってから発生する災害である。
イ 火山は、いつ発生するかの予測が難しいという点で地震に似た点がある。
ウ 地震は、いつ、どこで発生するかわからないため、たいへんおそろしい災害である。

〔　　〕

文学的文章　場面・状況の捉え方

夏代はほおずきを花束のように抱えながら並木道を歩き、坂道を下り、昇り、また下った。

川っぷちの町に着いて、商店街で訊ねながら行くと、その家は案外簡単に見つかった。

【ひっそりとした、木造の小さな家の門柱に「藤原」という表札が見えた。①人気のない玄関の引き戸の前で、なんとなく入りかねていると、背後で足音が聞こえた。

犬を連れた老人が立っていた。柴犬に似た雑種らしい犬は、はッはッと息を吐きながら立ち止まった主人を見あげている。

「あの……、藤原俊造さんですか」

「そうですが」

老人は不思議そうに、ほおずきの花束を抱えた奇妙な女の子を見つめた。

「あの、あたし、お財布を拾ってもらった者なんですけども……」

「ああ」

②老人は合点がいったように頷いた。

「あの、ほんとにありがとうございました」

そう言って頭を下げたとたん、唐突に冷たい涙が滝のように夏代の頬を流れ落ちた。びっくりしたのと恥ずかしいのが一緒くたになって、夏代の身体の内側を駆けまわった。

夏代は「お礼です」と叫ぶように言ってほおずきを老人に渡し、驚いた顔の老人と犬に「さようならっ」と言った。

駅へ続く坂道を、夏代は駆け昇った。心臓がばくんばくんと音を立てた。終わりかけた夏の風が夏代の頬をすべっていった。

そう思ってしたことでなくとも、優しさとか善意とかいうものは確かに人間を救うことがあるんだな。わけのわからなくなった頭の中で、夏代はそんなことを考えていた。

何か月ぶりかで走った。何か月ぶりかで身体が汗のぶんだけ軽くなり、そのぶん心も軽くなったような気がした。】

（鷺沢萠『海の鳥・空の魚』角川書店　所収「ほおずきの花束」による）

例題

＝＝線部「夏代はほおずきを……また下った」とあるが、夏代は何のためにほおずきを抱えているのか。本文中の言葉を参考に簡潔に答えなさい。

［　　　　　　　　　　］

場面・状況の読み取り

文学的文章は、時・場所・登場する人物が変わる箇所（かしょ）に注目し、場面に分けながら読むとよい。場面を捉え（とら）ることで、物語の展開や登場人物の心情の変化が読み取りやすくなる。

・いつ（時代、季節、時期、時刻）
・どこで（登場人物がいる場所、出来事が起きる場所）
・だれが（どんな人物が登場しているか）
・どうした（何をして、何があって、結果どうなったか）

また、場面が変わったときは、まずはその場面の状況（じょうきょう）を理解することが大切である。

・「いつ」「どこで」の出来事が描（えが）かれているか。
・「だれが」その場面に登場し、人物の設定や人物どうしの関係はどう描かれているか。

※「　」内の文（会話文）とそれ以外の文（地の文）で、登場人物の呼び方が異なる場合があるので整理しながら読む。

登場人物が多い場合は相関図などを作りながら読み進めるとよい。

確認テスト　本文を読んで、問いに答えなさい。

(1)【　】の箇所を、「夏代」がいる場所に注目して二つに分けたとき、後半の最初の三字を答えなさい。

(2)——線①「人気」の読みを答えなさい。

〔　　　　〕

(3)——線②「老人は合点がいったように頷いた」とあるが、老人はどんなことを理解したのか。適当なものを選びなさい。

ア　目の前にいる女の子が「夏代」であること。
イ　女の子が財布を拾ってもらったお礼を言いに来たこと。
ウ　「夏代」が自分の善意のために救われた気持ちになったこと。

〔　　　　〕

文学的文章　心情・人物像の捉え方

　次の図画の時間に、先生は採点のすんだぼくらの「夕焼け空」の絵を、パラパラめくりかえしながら言った。
「おまえたちは町の中で育って、自然の景色を知らないんだな。夕焼けがどんなかもわからんやつがいるとはなァ。先生の田舎は霞ガ浦のそばで、じつにもうきれいな夕焼けなんだ」
　なんだか、ぼくらに話しかけたって仕方がないといった口ぶりだった。そして、ヒョイと一枚の絵を抜きだして、教壇の上に紙芝居のように立てて言った。「どうしてこうなるのかねえ？」
　前の方でだれかが笑ったのをきっかけに、①教室中にワァと笑いがおこった。ぼくも首をのばしてみた。机にのりだして、眼をこらした。それはぼくの絵だった。
　先生は、その絵がだれのものとも言わなかった。すぐ引っこめると一緒に重ねて裏返し、順々に返しはじめた。ぼくは返された絵をすぐに二つに折り、四つに折り、八つにたたんでポケットにねじこんだ。先生はなにもいわなかった。ぼくは動転しながらも、②クラスの連中の手前、名前まで公表されなくて、やれ助かったと思った。なにをどうまちがえたのか、ぼく自身はまだわからなかったが。笑った連中がみんな一目でわかったほどのまちがいで、しかもそれは、算術の計算や書取りをしくじるのとはまるでちがう、了解しがたいほどあわれなことらしかった。
　貼りだされた絵をみると、みんな下の方が赤く、上の方が青く塗ってある。「だれなんだい、あのサカサマの絵をかいたヤツは？」とだれかが大声で言うのを聞いて、③ぼくの顔はまるでオレだよと白状しているみたいに、みるみる赤くなるのが自分でよくわかった。

（小沢信男「昼と夜の境い」筑摩書房 による）

心情・人物像の読み取り

文学的文章で心情を捉えるためには次の内容に注目する。
①「誰の」心情か（主語）
②「誰・何に対する」心情か（対象）
③「どんな」心情か（心中）
心中は直接書かれるだけでなく、会話、動作、表情、情景描写に表れることも多い。
（例）目を丸くした。思わず体をのけぞらせた。
　→驚きなど
　進む先にはどんよりとしたくもり空が広がっていた。
　→憂鬱など

また、登場人物ごとの人物像を理解しておくと、物語の展開が捉えやすい。
・人物の設定（年齢・性格・職業）
・人物がおかれた状況・境遇
・人物の価値観や考え
などに注目して読み進めるとよい。

例題

＿＿線部「どうしてこうなるのかねえ？」とあるが、このときの「先生」の心情として適当なものを選びなさい。

ア 自分の常識とは異なる「夕焼け空」の絵を見て、子どもたちの感性に驚いている。

イ 自然にはありえない「夕焼け空」の絵を見て、子どもたちが自然を知らないことにあきれている。

ウ 霞ガ浦の夕焼けのきれいさに比べ、町の夕焼けが気味の悪いものであることに困惑（こんわく）している。

〔　　〕

確認テスト　本文を読んで、問いに答えなさい。

(1) ＿＿線①「教室中にワァと笑いがおこった」とあるが、何に対して笑っているのか。適当なものを選びなさい。

ア 先生が、生徒たちが自然の景色を知らないことに小言を言ったこと。

イ 前の方のだれかが、うっかり先生が見せた絵に対して笑ってしまったこと。

ウ だれかがかいた夕焼けの絵が、色づかいのまちがったサカサマの絵だったこと。

〔　　〕

(2) ＿＿線②「クラスの連中の……助かったと思った」とあるが、クラスのみんなに笑われた絵が、自分がかいたものであることに気づかれたくない「ぼく」の心情が、行動に表れている一文を探し、その最初の五字を答えなさい。

(3) ＿＿線③「ぼくの顔はまるで……自分でよくわかった」とあるが、このときの「ぼく」の心情として適当なものを選びなさい。

ア 自分の絵がけなされたことについての怒（いか）り。

イ 自分がまちがった絵をかいたことへの恥（は）ずかしさ。

ウ 自分を理解してもらえないことに対する悲しみ。

〔　　〕

文学的文章　表現・描写の捉え方

（ある冬の日、「私」は、夕方になっても帰って来ない二人の弟を捜しに行くよう母から頼まれました。空腹だった「私」は頼みを断ろうとしましたが、結局捜しに行くことになりました。）

まず私は近所の◯◯さんや××堂へ行って、弟達を見なかったかと か、どこかへ行くと云っていなかったかとか云ってききただしたが、何の手懸りもえられなかったので、不平でぶーぶー膨れ面をしながら暗い路を◯◯神社の方へあるき出した。私の心の中の不平は憤りとなって、その道々弟達の上に燃えた。

「捕まえたら、撲りつけてやる。」

しかしその報いられない捜索が別に確かなあてのあるものでもなく、そして何というつまらなく腹立たしいことを強いられているのだろうと思いながら、その賑かな通りをあるいていると、小料理屋の格子から冷い夜気の中へ白く湧き出て来る湯気や、醤油のたきつまる匂は堪らなく私の空腹を淋しがらせはじめたのだった。するとまた、こんな考えも浮んで来る。――（もう彼等は家へ帰っているかも知れない）そんな気持が湧いて来ると、一人で空腹を抑えながら不熱心にその辺りをほっつき歩いている私には、その好都合な想像がやがて本当の事実として映るようになり、無責任にいい加減歩きまわったのを機会に私はまた急いで家へ帰りはじめた。

「帰っていたら、いきなり撲ってやる。」

私はまだ不平を※街上に鳴らしながら家まで帰った。

（梶井基次郎「夕凪橋の狸」筑摩書房　による）

※街上…町のなかの路上。みちばた。

表現・描写の特徴

文章は、表現や描写の仕方にさまざまな特徴がある。

●**文体**（文章の様式、スタイル）

・文末…常体「〜だ。〜である。」（硬い印象）
　　　　敬体「〜です。〜ます。」（やさしく語りかけるような印象）

・語句…和語（やわらかい語感）、漢語（硬い語感）、
　　　　外来語（新鮮で軽快な語感）

●**語り手**…誰の視点で描かれるか。

・一人称…ある人物（「私」など）の視点から語る。

・三人称…第三者の視点から語る。

●**象徴**や**情景描写**

象徴的なものや情景を通して人物の心情が描写されることがある。

●**表現技法**

比喩（直喩・隠喩・擬人法）、体言止め、倒置、対句、反復、省略などの表現技法を用いて印象を強める。

例題

――線部「小料理屋の……はじめたのだった」の表現の特徴について、正しく述べたものを選びなさい。

ア 湯気や匂いの印象や、空腹を感じている「私」の心情を、倒置表現で強調している。

イ 擬人法を用いて、小料理屋の湯気や醤油の匂いに感じた「私」の心情を描いている。

ウ 第三者の視点から、弟達に対する「私」の怒り（いか）を、情景を通して表現している。

〔　〕

確認テスト 本文を読んで、問いに答えなさい。

(1) ――線部「好都合な想像」とあるが、なぜ好都合なのか。適当なものを選びなさい。

ア 空腹で家に帰りたい「私」にとっては、弟たちが家に帰っているほうが都合がいいから。

イ 弟たちを見つけられない「私」にとっては、弟たちの居場所がわかったほうが都合がいいから。

ウ 不平や憤りで気が立っている「私」にとっては、弟たちに今は出会わないほうが都合がいいから。

〔　〕

(2) 本文の表現の特徴として正しいものを選びなさい。

ア 「私」の心情は直接は描かれず、行動を通して間接的に表現されている。

イ 「私」の心情が、比喩的な表現や「私」の様子をまじえながら印象的に描かれている。

ウ 「私」の心情の変化が、敬体の短い文を多用することで語りかけるように述べられている。

〔　〕

「おっかあ！」
与吉（よきち）は、うちのわら屋根が見えると、思わず大きな声でさけんだ。
妹のふみが、すばやく兄のすがたを見つけたらしい、［　　　］とんでくる。
ふみは、どしんと兄にぶつかると、
「にい！」
といって、まぶしいものでもながめるように、与吉の顔を見あげた。
「ふみ、もちを食（く）ったら、ますますふくれたな。」
与吉も、なつかしさがむねにいっぱいになって、ふみのほっぺたを両手でだいた。
考えてみると、正月以来、ちょうどひと月ぶりに家にかえったことになる。
与吉は、去年の十月から弥平（やへい）じいや五助（ごすけ）おじといっしょに、油島（あぶらしま）の工事に出ていた。
与吉がふみの手をひいて、家のかどぐちの戸をくぐると、奥（おく）のほうから母親のふさがとびだしてきた。
「まあ、与吉！　なんやおまえ、ちょっともうちへこずに……。」
と、おこったような声でいうと、じいっと与吉の顔を見つめて、
「与吉、おまえ、ちょっとやせやせんか。」
と、ふいに与吉の顔を両手ではさんだ。
なんともいえない母親のなつかしいにおいが、与吉のからだ全体をつつんだ。与吉は、思わずふさにだきつきたくなったが、あわてて母親の手をはらいのけた。
「ううん、おら元気や、うでやって太うなったぞ。」
と、仕事着をめくって力こぶをつくってみせた。
「そんならええけど……。でも、なんでまた、ひと月もかえってこんのや。」
ふさは、またおこったようにいう。
「そんなもん、仕事がいそがしいんやでしかたがないさ。それに、日一日とつつみがりっぱにでけていくんや、楽しみでうちなんかかえっておれん。」
与吉は、おとなのようにそういって、いろりの横にあぐらをかいた。
（岸武雄『千本松原』あかね書房　による。一部省略した箇所がある）

主題の読み取り

作者が文章を通じて表現しようとしている中心的な内容を主題という。物語の主題を捉（とら）えるには、次の点に注目するとよい。

・人物を通して描（えが）かれる価値観や考え、人物の心情の変化や成長。
・出来事の展開、各場面における人物の行動。
・作品の状況（じょうきょう）設定、時代背景。

例題

この文章では、与吉のどのような気持ちが中心に描かれているか。最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア 長い間家を離れていたことへの申し訳なさと、家族に対するうしろめたい気持ち。

イ 家族から離れて暮らすわびしさと、それをこらえている自分を励ます気持ち。

ウ 久しぶりに会った家族に感じるなつかしさと、自分の仕事を誇らしく思う気持ち。

〔　　〕

確認テスト 本文を読んで、問いに答えなさい。

(1) 本文の状況に合うように、次の文の解答欄に当てはまる言葉を本文中から書きぬきなさい。

与吉は、〔　　　〕をつくる仕事が忙しく、正月から〔　　　〕ぶりに家に帰った。

(2) 〔　〕に当てはまる言葉として、適当なものを選びなさい。

ア おそれるように
イ ころがるように
ウ ためらうように

〔　　〕

(3) ――線部「じいっと与吉の顔を見つめて」とあるが、このときの母の心情として適当なものを選びなさい。

ア 与吉が急に家に帰ってきたことに困惑する気持ち。
イ なかなか帰って来ない与吉に怒りがこみ上げる気持ち。
ウ 少しやせた様子の与吉を心配する気持ち。

〔　　〕

随筆 話題の読み取り

一期一会（いちごいちえ）というのは、今日の茶会は一生に一度しかない茶会と思って、茶会の席に臨（のぞ）むべきだということを、その意味内容として持っている言葉である。従って、茶湯（ちゃのゆ）の本質を示している言葉であると言っていいであろう。（中略）

一期一会という言葉は、たいへんきびしくはあるが、いい言葉である。茶道の言葉ではあるが、そこから取り出して、ひろい人生の中に置いても、①その四字の持っている輝（かがや）きはいささかも消えない。確かに人生のあらゆることが一期一会であると言っていい。あらゆることが一生に一度で、再びくり返されることはないのである。遠くから訪ねて来る友人を迎（むか）えるのも、一期一会でなければならないし、一つの集まりに臨むにも一期一会であるべきである。

人生百般（ひゃっぱん）、あらゆることに一期一会の観念を生かすべきであるが、ただそれは実際にはなかなか難しい。難しいからこそ、茶湯というものの存在理由があるのであって、茶湯という特殊（とくしゅ）な約束の世界を設定し、せめて、②そこに於（お）てだけでも、一期一会の精神を生かそうというのが、茶道の開拓者（かいたくしゃ）たちの考えであったろうと思われる。

しかし、ひと度（たび）、自分が歩んできた過去を振（ふ）り返ってみると、何とたくさんのすばらしい一生に一度の出会いがあることか。その多くは自分が意識して作ったものでも、自分が意識して求めたものでもなく、偶然（ぐうぜん）によって生み出されたものではあるが、長い人生行路に於（お）て、そこだけが輝いて見えている。人間との出会い、事件との出会い、風景との出会い、絵画や彫刻（ちょうこく）との出会い、言葉との出会い——そのいずれもが、なんらかの意味で、自分の考え方や、生きる姿勢に影響（えいきょう）を与（あた）えてくれたものである。いずれも一生に一度の出会いであって、再びくり返すことのできないものばかりである。

（井上靖『井上靖全集　第二十三巻』新潮社　所収「わが一期一会」による）

例題

本文中から、次の内容が書かれている段落を探し、その最初の十字を答えなさい。ただし句読点も一字に含（ふく）む。

筆者自らが経験したいくつもの出会いが、一期一会のものであったことを思い起こしている。

随筆の話題

筆者の体験・見聞・感想などを、筆に任せて自由な形式で書いた文章を**随筆**（ずいひつ）という。随筆には、体験などを文学的に描（えが）いたもの、筆者の見方・考え方を説明的に述べたものなどさまざまな形式がある。

	話題	内容
文学的随筆	季節・自然・旅・日常・家族　など	体験や、それに対する感想・思いなど。
説明的随筆	言語・社会・科学・読書・生き方　など	ものの見方や筆者の考えなど。

随筆は、次の点に注意して読み進めるとよい。

①**話題**を捉（とら）える。
　題や、繰（く）り返し使われる語句に注目する。

②**事実**と**意見**・**感想**を区別する。
・事実……筆者の体験や見聞など。
・意見・感想…経験や見聞に対する筆者の思い・考え。
※意見・感想を表す文末表現
　（例）…と思う。…と感じる。…だろう。…べきだ。

③**主題**（筆者が特に伝えたい内容）を捉える。
※意見・感想の部分に描かれていることが多い。

確認テスト

本文を読んで、問いに答えなさい。

(1) ――線①「その四字」とは何か。本文中から書きぬきなさい。

□□□□

(2) ――線②「そこ」とは何か。本文中から十字以上、十五字以内で探し、最初と最後の三字を答えなさい。

□□□～□□□

(3) 次の筆者の考えが中心に述べられている段落を探し、その最初の十字を答えなさい。ただし、句読点も一字に含む。

人生のあらゆることが一期一会であり、どのような機会にも一期一会の思いをもって臨むべきである。

□□□□□□□□□□

随筆　筆者の見方・考え方の読み取り

（次の文章は、筆者が女学校の低学年だった頃の出来事を描いたものです。）

ある日、寝ころんでいた兄が、
「綾子、水を持って来てくれないか。塩を入れてな」
と言った。私は内心、寝ころんでいて人に用事を頼むのはおかしいと思ったが、何しろ戦前である。自分より年上の者に、口を返すということはわが家にはなかった。私は黙って、コップに水を注ぎ、塩を入れて持って行った。兄は起き上がり、ひと口飲んで言った。
「綾子、お前、塩をあとから入れただろう」
私はうなずいた。
「塩を先に入れてから、水を入れるもんだよ」
そう言って、兄はにやりと笑った。別にどうということはない。ただそれだけのことなのだが、私は突如、兄を偉いと思った。塩水一つつくるのに、私は無雑作だった。その無雑作なやり方を、兄は素早く見破ったばかりでなく、笑いながら注意してくれた。
（侮れないわ）
私はそう思ったのだ。私と兄は九つちがいであった。私が生れた時、兄は既に十歳であった。私が十になった時、兄は十九であった。
同じ部屋に住んでいても、二人だけで共に遊ぶとか、ゆっくり話し合うという機会はなかった。私の話相手は、三つ上の姉であり、二つ下の弟であった。
（菊夫兄さんは、大人なんだわ）
大人という者は、塩水一つつくるにしても、ことをおろそかにしない。それはおそらく、幾度もの体験の中で得たものにちがいない。そして、これは単に塩水だけにとどまることではないのであろうと考えた。大人になるまでの積み重ねの中で、どれほど多くのことを知り弁えているか計り知れないのが大人だと感じた。兄の前に一歩引き下がる思いが湧いた。これは私にとって、私が成長する上に、実に大きな体験となった。

（三浦綾子『忘れえぬ言葉　私の赤い手帖から』小学館　による）

筆者の見方・考え方と主題

随筆に表れる筆者特有の見方や考え方を捉えると、**主題**が読み取りやすくなる。
①文章の題や、繰り返し使われる語句などに注目し、**話題**を読み取る。
②話題に対する**筆者の意見・感想**を読み取る。
③**筆者特有の思い・考え**を捉える。
※特に、表現技法や印象的な描写が使われている箇所、筆者特有の視点が表れている箇所に注目する。

例題

本文中の体験から、筆者は大人に対してどのように感じたか。本文中から四十字で探し、最初と最後の三字を答えなさい。ただし句読点も一字に含む。

［　　　］〜［　　　］

確認テスト　本文を読んで、問いに答えなさい。

(1) 本文の前半と後半の内容をそれぞれ選びなさい。

ア 筆者が体験した出来事をくわしく述べている。

イ 体験した出来事から考えたことを述べている。

前半［　　］　後半［　　］

(2) 本文の内容に合うものを選びなさい。

ア 兄に塩水のつくり方を注意されて以降、筆者は年上の者に口を返すということをしなくなった。

イ 兄に塩水のつくり方を注意されたとき、筆者は用事を頼んでおいて注意をする兄に内心疑問を抱いた。

ウ 兄に塩水のつくり方を注意された経験を通じて、筆者は大人とはどのようなものかということを実感した。

［　　］

古文　枕草子・徒然草（1）

『枕草子（まくらのそうし）』の基礎知識

『枕草子』は**平安時代**中頃（ごろ）の**清少納言（せいしょうなごん）**による**随筆（ずいひつ）**。清少納言は歌人・清原元輔（きよはらのもとすけ）の娘（むすめ）で、一条（いちじょう）天皇の※中宮（ちゅうぐう）・定子（ていし）に仕えた女房（にょうぼう）だが、本名はわかっていない。

『枕草子』には、筆者が宮仕えを通して見聞きしたことや、四季の自然や人に対する鋭（するど）い観察・感性が、才気あふれる簡潔な文で表現されている。明るく知的な**「をかし」**の文学といわれる。

※中宮…后の称号。後に藤原道長の娘・彰子が中宮となると、定子の称号は皇后となった。

年	時代	作品
	奈良	『万葉集』この頃までに成立
800	平安	
900	平安	『竹取物語』『古今和歌集』
1000	平安	『枕草子』『源氏物語』
1100	平安	
1200	鎌倉	『新古今和歌集』

藤原道隆（ふじわらのみちたか）（兄）―定子……清少納言
　　　　　　　　　　　　　＝一条天皇
藤原道長（みちなが）（弟）―彰子（しょうし）……紫式部（むらさきしきぶ）

随筆
筆者が体験したことや感じたことを、筆のおもむくままに自由に書き記した文章を随筆という。

古文の特色

●歴史的仮名遣（づか）い

①語頭以外の「は・ひ・ふ・へ・ほ」→「**わ・い・う・え・お**」
※語頭のハ行や、助詞「は」「へ」などはそのまま。
②「ゐ・ゑ・を」→「**い・え・お**」
※助詞「を」などはそのまま。
③「ぢ・づ」→「**じ・ず**」
④「くわ・ぐわ」→「**か・が**」
⑤助動詞や助詞の「む・なむ」→「**ん・なん**」
⑥母音（ぼいん）（a・i・u・e・o）が連続するとき
・au（ア段＋う・ふ）→ **ô**
・iu（イ段＋う・ふ）→ **yû**
・eu（エ段＋う・ふ）→ **yô**

●古文の語句

古文には、「いと（とても）」のように、現代では使われなくなった語句や、「うつくし（かわいらしい）」のように、現代と意味が異なる語句が見られる。

確認テスト

(1) 次の文の（　）に当てはまる言葉をそれぞれ選びなさい。

『枕草子』は（①）の中頃に（②）によって書かれた（③）である。

ア 奈良時代　**イ** 平安時代　**ウ** 鎌倉(かまくら)時代
エ 紀貫之(きのつらゆき)　**オ** 清少納言　**カ** 紫式部
キ 歌集　**ク** 紀行文　**ケ** 随筆

①［　　］　②［　　］　③［　　］

(2) 次の文の（　）に当てはまる言葉を選びなさい。

『枕草子』は、筆者の鋭い感性が才気あふれる簡潔な文で表現されており、明るく知的な「（　）」の文学といわれる。

ア ますらをぶり　**イ** たをやめぶり
ウ をかし　**エ** もののあはれ

［　　］

(3) 次の言葉を現代仮名遣いに直したものとなるように、解答欄(かいとうらん)に当てはまる言葉を**ひらがな**で答えなさい。

飛び急ぐさへあはれなり

飛び急ぐ［　　］

(4) 次の言葉を現代仮名遣いに直し、**ひらがな**で答えなさい。

やうやう［　　］

(5) 次の古語の意味を選びなさい。

いと うつくし

ア しみじみと趣(おもむき)深い
イ ちょっときれいだ
ウ とてもかわいらしい

［　　］

枕草子

春はあけぼの。①やうやう白くなりゆく山際、少しあかりて、
春は明け方（がよい）。　明るくなって、
紫だちたる雲の細くたなびきたる。
紫がかった雲が　細くたなびいている（のがよい）。

夏は夜。②月の頃はさらなり、
闇もなほ、蛍の多く飛びちがひたる。
闇もやはり、　蛍が多く飛び交っている（のがよい）。
また、ただ一つ二つなど、ほのかにうち光りて行くもをかし。
ただ（蛍が）一、二匹など、　ほのかに光って飛んでいくのも　風情がある。
雨など降るもをかし。

秋は夕暮れ。夕日の差して山の端いと近うなりたるに、
夕日が差して山の端にたいへん近くなった頃に、
烏の寝所へ行くとて、三つ四つ、二つ三つなど、
烏がねぐらに行くというので、三、四羽、　二、三羽などと、
飛び急ぐさへあはれなり。
飛び急ぐことまでもしみじみと趣深い。
まいて雁などの連ねたるが、いと小さく見ゆるは、いとをかし。
まして　雁などが列になって（飛んで）いるのが、
日入り果てて、③風の音、虫の音など、はた言ふべきにあらず。
日が沈んでしまって、　風の音、虫の音など（が聞こえてくるのも）、また言うまでもない。

冬はつとめて。雪の降りたるは言ふべきにもあらず、
早朝　雪が降っている早朝は言うまでもなく、
霜のいと白きも、またさらでもいと寒きに、
霜がとても白いのも、またそうでなくても（霜などがなくても）とても寒いときに、
火など急ぎおこして、炭持て渡るも、いとつきづきし。
炭を持って通っていくのも、たいへん（冬の早朝に）似つかわしい。
昼になりて、ぬるくゆるびもていけば、
（寒さが）しだいに暖かくゆるんでいくと、
※火桶の火も、白き灰がちになりてわろし。　（第一段）
白い灰ばかりになってよくない。

※火桶…木製の丸火鉢。

重要語句

あけぼの	明け方、空が明るくなる頃
やうやう	だんだんと・しだいに
山際	空の、山に接するあたり
なほ	やはり
をかし	風情があってよい
山の端	山の、空に接するところ
いと	とても・たいそう
あはれ	しみじみと趣深い
つとめて	早朝
わろし	よくない

確認テスト

本文を読んで、問いに答えなさい。

(1) ――線①「やうやう白くなりゆく山際」とはどのような様子を表しているか。適当なものを選びなさい。

ア 山の周囲のふもとが、かすかに白んでいく様子。
イ 山の尾根にあたる部分が、ようやく白んでいく様子。
ウ 山に近づいた太陽が、ほのぼのと白んでいく様子。
エ 山に接するあたりの空が、だんだんと白んでいく様子。

〔　　〕

(2) ――線②「月の頃はさらなり」の意味を選びなさい。

ア 月の頃はさらに明るい
イ 月の頃はそうでもない
ウ 月の頃は言うまでもない

〔　　〕

(3) ――線③「風の音、虫の音」の読みを、解答欄(かいとうらん)に当てはまるようにひらがなで答えなさい。

風(かぜ)の〔　　〕、虫(むし)の〔　　〕

(4) 冬の早朝に風情があることとして述べられているものに、当てはまらないものを選びなさい。

ア 早朝に雪が降っている様子。
イ 火を起こして炭を持って通っていく様子。
ウ 火鉢(ひばち)が白い灰ばかりになる様子。

〔　　〕

(5) 本文で、各季節で特に風情があると述べられている時間帯をそれぞれ**ア**〜**エ**から選びなさい。

春〔　　〕　夏〔　　〕
秋〔　　〕　冬〔　　〕

ア あけぼの　**イ** つとめて　**ウ** 夕暮れ　**エ** 夜

枕草子(まくらのそうし)

うつくしきもの　【瓜(うり)にかきたるちごの顔。

かわいらしいもの。　瓜に描いてある幼児の顔。

①雀(すずめ)の子のねず鳴きするに踊り来る。　二つ三(み)つばかりなるちごの、

二、三歳ほどの幼児が、

急ぎて這(は)ひ(イ)来る道に、いと小さき塵(ちり)のありけるを、

急いではって来る途中に、とても小さいごみがあったのを、

目ざとに見つけて、いとを(オ)かしげなる②指(および)に捕(と)らへ(エ)て、

目ざとく　とても愛らしい指につかまえて、

大人ごとに見せたる、いとうつくし。

大人たち一人一人に見せている（様子は）、

頭(かしら)は※尼(あま)そぎなるちごの、目に髪(かみ)の覆(おほ(オ))へ(エ)るを、かきはやらで、

頭はあまそぎにしている幼女が、　目に髪がかかっているのを、かき払いはしないで、

うち傾(かたぶ)きて物など見たるも、うつくし。】

顔を傾けて

（第百四十五段）

月のいと明(あ)かきに、川を渡(わた)れば、牛の歩むままに、

月のとても明るい夜に、（牛車で）川を渡ると、牛が歩くにつれて、

③水晶(すいさう(ショウ))などのわれたるやう(ヨウ)に、水の散りたるこそを(オ)かしけれ。

水晶などが割れたように、　水が飛び散ったのは　風情がある。

（第二百十六段）

※尼そぎ…髪を肩のあたりで切りそろえる髪型。当時の女性は、出家して尼となる場合、髪を肩のあたりで切りそろえた。この尼の髪型のようであるので、尼そぎという。

ものづくし

『枕草子』の約三百の章段の中には、「山は」「うつくしきもの」など、ある標題を掲(かか)げてその同類のものを列挙するものがあり、「ものづくし」とよばれる。

（例）あてなるもの　薄色(うすいろ)に白襲(しらがさね)の汗衫(かざみ)。かりのこ。削(けず)り氷(ひ)に甘葛(あまづら)入れて、あたらしき鋺(かなまり)に入れたる…（第四十段）

虫は　鈴虫(すずむし)。蜩(ひぐらし)。蝶(てふ)。松虫。きりぎりす…（第四十一段）

確認テスト　本文を読んで、問いに答えなさい。

(1) 本文中の【　】で囲まれた範囲(はんい)で、「うつくしきもの」として挙げられているものはいくつあるか。算用数字で答えなさい。
［　　］

(2) ——線①「雀の子のねず鳴きするに踊り来る」とはどのような意味か。適当なものを選びなさい。
ア 雀の子が、ねずみのような鳴き声で踊るようにやって来る。
イ ねずみが、雀の子のもとに鳴きながら踊るようにやって来る。
ウ 雀の子の鳴き声を聞いて、ねずみが踊るようにやって来る。
エ ねずみの鳴きまねをすると、雀の子が踊るようにやって来る。
［　　］

(3) ——線②「指に捕らへて」とあるが、何を指でつまんでいるのか。適当なものを選びなさい。
ア 瓜　イ 雀の子　ウ 塵　エ 大人
［　　］

(4) 「うつくしきもの」として述べられている内容に合うものを選びなさい。
ア 瓜に描いてある幼児の顔はかわいらしい。
イ 見つけたごみを捨てる幼児はきれい好きだ。
ウ 尼そぎの幼児が髪を払いのける姿は美しい。
［　　］

(5) ——線③「水晶などのわれたるやうに」とは何の様子をたとえたものか。適当なものを選びなさい。
ア 月がとても明るい様子。
イ 牛が歩く様子。
ウ 水が飛び散る様子。
［　　］

『徒然草（つれづれぐさ）』の基礎知識（きそちしき）

『徒然草』は**鎌倉時代（かまくらじだい）**末頃（ごろ）の**兼好法師（けんこうほうし）**による**随筆（ずいひつ）**。筆者は鎌倉時代末期から南北朝時代にかけての歌人で、出家し、兼好法師とよばれる。

『徒然草』には、古い時代への憧（あこが）れや仏教の**無常観**を背景に、社会や人々に対する鋭（するど）い批評が筆者の見聞を通して記されている。『枕草子（まくらのそうし）』と並んで、代表的な随筆文学と評される。

『徒然草』冒頭（ぼうとう）

①つれづれなるままに、②日暮らし硯（すずり）に向かひ(イ)て、
（硯に向かって、）

心にうつりゆく③よしなしごとを、そこはかとなく書きつくれば、
（心に浮かんでは消えてゆく）（何というあてもなく書きつけていると、）

あやしう（シュウ）こそものぐるほし(オ)けれ。
（妙に心騒ぎがすることである。）

（序段）

年	時代	作品
1200	鎌倉	『新古今和歌集』
		『方丈記』
		『平家物語』
1300		『徒然草』

古文の特色

●係（かか）り結び

古文には係りの助詞とよばれる語があり、文中で係りの助詞が用いられると、文末などの結びの部分が変化する。これを**係り結び**といい、感動や疑問などといった気持ちを強調する働きがある。

・係りの助詞
「**ぞ**」「**なむ**」「**こそ**」…前の語の強調
「**や**」「**か**」…………疑問・反語

（例）「山までは見ず。」と言ひけり。
「山までは見ず。」と**ぞ**（係り）言ひける（結び）。（前の発言が強調される）
尊くおはしけり。
尊く**こそ**（係り）おはしけれ（結び）。（「尊く」が強調される）

●古文の文末表現

古文には、現代では見られない文末の表現がある。
「〜けり（〜た、〜たそうだ）」・「〜たり（〜た、〜ている）」
「〜なり（〜だ、〜である）」・「〜ぬ（〜た、〜てしまった）」
「〜ず（〜ない）」

確認テスト 本文を読んで、問いに答えなさい。

(1) 次の文の（　　）に当てはまる言葉をそれぞれ選びなさい。

『徒然草』は（**A**）の末頃に（**B**）によって書かれた（**C**）である。

ア 平安時代　**イ** 鎌倉時代　**ウ** 室町時代
エ 鴨長明（かものちょうめい）　**オ** 兼好法師　**カ** 藤原定家（ふじわらのさだいえ）
キ 歌集　**ク** 軍記物語　**ケ** 随筆

A〔　　〕　**B**〔　　〕　**C**〔　　〕

(2) ――線①「つれづれなるままに」とあるが、これはどのような様子か。適当なものを選びなさい。

ア 忙（いそが）しく、落ち着かない様子。
イ 硯に向かって集中する様子。
ウ 何もすることがない様子。

〔　　〕

(3) ――線②「日暮らし」の意味を選びなさい。

ア ある日　**イ** 一日中　**ウ** 夕方

〔　　〕

(4) ――線③「よしなしごと」の意味を選びなさい。

ア 大切なこと
イ とりとめもないこと
ウ 良くないこと

〔　　〕

(5) 次の文に含（ふく）まれる係りの助詞を書きぬきなさい。

聞きしにも過ぎて、尊くこそおはしけれ。

〔　　〕

徒然草（つれづれぐさ）

※仁和寺（にんなじ）にある法師、年寄るまで※石清水（いはしみづ）を拝まざりければ、
仁和寺にいる法師が、年をとるまで石清水八幡宮を参拝したことがなかったので、

心憂（う）く覚えて、あるとき思ひ立ちて、ただ一人※徒歩（かち）より詣（まう）でけり。
残念なことに思われて、ただ一人で徒歩で参詣した。

極楽寺（ごくらくじ）・高良（かうら）などを拝みて、①かばかりと心得て帰りにけり。
極楽寺・高良神社などを参拝して、帰ってしまった。

さて、かたへの人にあひて、
仲間に向かって、

「②年ごろ思ひつること、果たしはべりぬ。
長年思っていたことを、果たしました。

③聞きしにも過ぎて、尊（たふと）くこそおはしけれ。
聞いていたのにも勝って、尊くいらっしゃいました。

そも、参りたる人ごとに山へ登りしは、何事かありけん、
それにしても、参拝している人々がみな山へ登ったのは、何かあったのだろうか、

④ゆかしかりしかど、神へ参るこそ本意（ほい）なれと思ひて、
知りたかったけれど、本来の目的であると思って、

山までは見ず。」とぞ言ひける。

少しのことにも、先達（せんだち）はあらまほしきことなり。
その道の先導者はあってほしいものである。

（第五十二段）

※仁和寺…京都市右京区御室にある真言宗の寺。
石清水…石清水八幡宮。京都府八幡市男山の山上にあり、ふもとには付属の極楽寺・高良神社があった。
徒歩…当時、都から石清水への参詣は、桂川・淀川を使う舟便が一般的だった。

重要語句

……はべり	……ます
おはす	いらっしゃる
ゆかし	見たい、聞きたい、知りたい

確認テスト 本文を読んで、問いに答えなさい。

(1) ――線①「かばかりと心得て」とはどういうことか。適当なものを選びなさい。

ア 石清水八幡宮（いわしみずはちまんぐう）はこれだけのものだと思い込（こ）んで
イ 極楽寺・高良神社はこれだけのものだと思い込んで
ウ 徒歩ではこれ以上、山に登れないと思い込んで

〔　　〕

(2) ――線②「年ごろ思ひつること」とは何か。適当なものを選びなさい。

ア 石清水八幡宮に参拝すること。
イ 極楽寺・高良神社に参拝すること。
ウ どこかの神社に徒歩で参拝すること。

〔　　〕

(3) ――線③「聞きしにも過ぎて、尊くこそおはしけれ」とあるが、法師は何が尊かったと述べているのか。適当なものを選びなさい。

ア 仁和寺　イ 石清水　ウ かたへの人

〔　　〕

(4) ――線④「ゆかしかりしかど」とあるが、何を知りたかったのか。適当なものを選びなさい。

ア 参拝したかった石清水八幡宮はどこにあるか。
イ 山の上にある石清水八幡宮はどんな様子か。
ウ 参拝している人々が山に登っていたのは何かあったのか。

〔　　〕

(5) 次の本文中の表現について、含（ふく）まれる係りの助詞をそれぞれ書きぬきなさい。

A 何事かありけん
B 神へ参るこそ本意なれ

A〔　　〕 B〔　　〕

(6) 本文中で筆者の考えが述べられている一文を探し、最初の三字を答えなさい。

徒然草

【ある人、弓射ることを習ふ（ウ）に、※もろ矢をたばさみて的に向かふ（ウ）。
ある人が、 二本の矢を手に持って
師の言はく、
師が言うことには、
「初心の人、①二つの矢を持つことなかれ。
初心の人は、 持ってはならない。
後の矢を頼みて、初めの矢になほざり（オ）の心あり。
後の矢をあてにして、 初めの矢をおろそかにする心がある（からだ）。
毎度ただ得失なく、この一矢に定むべしと思へ（エ）。」と言ふ（ウ）。
毎回ただ当たりはずれを考えることなく、この一本の矢で決めようと思え。
②わづか（ズ）に二つの矢、師の前にて一つをおろかにせんと思はんや（ワ）。
わずかに二本の矢を、（しかも）師の前でその一本をいいかげんにしようと思うだろうか。
③懈怠の心、みづから（ズ）知らずといへ（エ）ども、師これを知る。
怠ける心は、 自らは気づかなくても、 師はこれを知る。
この戒め、万事にわたるべし。】 （第九十二段）
全てに通じるはずである。

※もろ矢…対になった二本の矢で、初めの矢を甲矢（はや）、後の矢を乙矢（おとや）という。

高名の木登りといひ（イ）し男（オ）、人を掟てて、
名高い木登りといわれた男が、 人に指示して、
高き木に登せて梢（エ）を切らせしに、
高い木に登らせて 梢を切らせたときに、
④いと危ふ（ウ）く見えしほどは言ふ（ウ）こともなくて、
たいへん危なく見えた間は何も言うこともなくて、
降るるときに軒長ばかりになりて、
（梢を切る人が）降りるときに軒の高さくらいになって、
「誤ちすな。心して降りよ。」と言葉をかけはべりしを、
けがをするな。用心して降りよ。 かけましたので、
「かばかりになりては、飛び降るるとも降りなん。
これくらい（の高さ）になれば、飛びおりてもおりられよう。
如何にかく言ふ（ウ）ぞ。」と申しはべりしかば、
（それなのに）どうしてそのように言うのか。 と申しましたところ、
「そのことにさうらふ（ソウ）（ウ）。目くるめき、枝危ふ（ウ）きほどは、
そのことでございます。 目がくらみ、 枝の危ない間は、
己が恐れはべれば申さず。誤ちは、やすきところになりて、
自分が恐れていますから（私は何も）申しません。けがは、簡単なところになってから、
必ずつかまつることにさうらふ（ソウ）（ウ）。」と言ふ（ウ）。 （第百九段）
いたすものでございます。

重要語句

なほざり	いいかげんだ・おろそかだ
さうらふ	あります・ございます・…ます（でございます）

確認テスト　本文を読んで、問いに答えなさい。

(1) 本文中の【　】で囲まれた範囲は、前半で筆者の見聞を記し、後半で筆者の考えを記している。後半の最初の三字を答えなさい。

(2) ――線①「二つの矢を持つことなかれ」と師が言うのはなぜか。適当なものを選びなさい。

ア　初心の人では、矢を二本とも当てることは難しいから。
イ　矢を一つにしないと、当たりはずれがわからなくなるから。
ウ　矢を二本持っていると、最初の矢がいいかげんになるから。

〔　　〕

(3) ――線②「わづかに……思はんや」とあるが、これは何を言おうとしているのか。適当なものを選びなさい。

ア　師が言っていることは間違っているということ。
イ　師の前では、怠けてはいけないのだということ。
ウ　怠ける心は、自分では気づきにくいのだということ。
エ　怠ける原因は、矢が二本しかないからだということ。

〔　　〕

(4) ――線③「懈怠の心」と、ほぼ同じ意味を表す言葉を第九十二段の本文中から六字で書きぬきなさい。

(5) ――線④「いと危ふく見えしほどは言ふこともなくて」とあるが、なぜ何も言わなかったのか。適当なものを選びなさい。

ア　梢を切っている人が、怖がって用心していたから。
イ　まだ木に登った人が梢を切り終わっていなかったから。
ウ　木が軒の高さくらいしかなく、もう安全だったから。

〔　　〕

(6) 「高名の木登りといひし男」は、「誤ち」はどのようなときにするものだと述べているか。最も適当なものを選びなさい。

ア　人から注意されないとき。
イ　目がくらんでしまうとき。
ウ　怖がってしまっているとき。
エ　もう大丈夫だと思ったとき。

〔　　〕

『平家物語』の世界

●平氏政権の成立

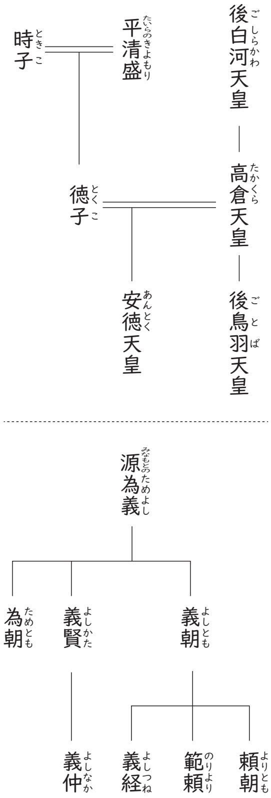
平安時代末期、保元の乱、平治の乱に勝利した平清盛が政治の実権を握り、平家一門は栄華を極めた。次第に清盛は後白河法皇と対立するようになり、各地で平家に反発する動きが起こった。

●源頼朝の挙兵

一一八〇年、平治の乱ののち伊豆に流されていた源頼朝や、信濃の源義仲（木曾義仲）らが、平家打倒の兵を挙げた。頼朝は石橋山の戦いで大敗したが、勢力を立て直して鎌倉に拠点を置くと、進軍してきた平家の軍を富士川の戦いで破った。一一八一年には、清盛が熱病で亡くなった。

●源義経の派遣

一一八三年、義仲の軍が京に迫り、平家は西国に逃れた。都では次第に義仲と後白河法皇との対立が深まり、頼朝は弟の範頼・義経を都に派遣した。義経は宇治川の戦いで義仲を破った。

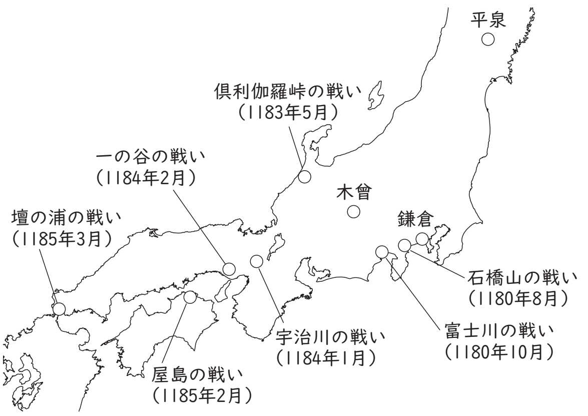


●一の谷の戦いと「敦盛の最期」

西国に逃れていた平家は勢力を盛り返し、福原近くの一の谷に陣を構えた。しかし、義経の奇襲によって平家は破れ、屋島に退いた。『平家物語』ではここで「敦盛の最期」の場面がえがかれる。

●屋島の戦いと「扇の的」

一一八五年、ひそかに海を渡った義経は、平家の背後から屋島を急襲した。平家は舟で海に逃れ、海上の平家と陸上の源氏が向かい合った。『平家物語』ではここから「那須与一」「弓流」の場面がえがかれる。屋島の戦いに敗れた平家は西に逃れ、壇の浦で滅亡する。



	平安	保元の乱・平治の乱 平氏政権の成立 源平の争乱 奥州藤原氏の滅亡
1200	鎌倉	『平家物語』

確認テスト

(1) 次の各文を、過去の出来事から順に並べなさい。

ア 『平家物語』が成立する。
イ 平清盛が政治の実権を握る。
ウ 源義経が壇の浦で平家を滅(ほろ)ぼす。
エ 源頼朝が伊豆で挙兵する。

［　］→［　］→［　］→［　］

(2) 『平家物語』の主な戦いを、過去のものから順に並べなさい。

ア 一の谷の戦い　**イ** 壇の浦の戦い
ウ 富士川の戦い　**エ** 屋島の戦い

［　］→［　］→［　］→［　］

(3) 『平家物語』の主な戦いが行われた場所は、現在の何県か。それぞれ**ア**～**エ**から選びなさい。

① 一の谷［　］　② 壇の浦［　］
③ 富士川［　］　④ 屋島［　］

ア 静岡県　**イ** 兵庫県　**ウ** 香川県　**エ** 山口県

(4) 一の谷の戦い・屋島の戦いで、平家を急襲した人物として適当なものを選びなさい。

ア 源義朝　**イ** 源頼朝　**ウ** 源義仲　**エ** 源義経

［　］

(5) 次の中から、内容が正しいものを選びなさい。

ア 伊豆で挙兵した源頼朝は、のちに平泉を拠点とした。
イ 木曾義仲は政治の実権を握り、鎌倉幕府を成立させた。
ウ 源頼朝は弟の義経らを西国に派遣し、平家を滅ぼした。
エ 一の谷の戦いで平家は滅亡し、源平の争乱は終結した。

［　］

『平家物語』の基礎知識

『平家物語』は**鎌倉時代**に成立した**軍記物語**。『徒然草』によると、信濃前司行長が作ったものとされるが、はっきりしない。平家一門の栄華と滅亡とが、人の世をはかないものとする仏教の**無常観**を基調としてえがかれている。

漢語を交えた文体で独特の調子とリズムがあり、読みものとしてだけではなく、**琵琶法師**とよばれる人々による語りものとしても親しまれた。琵琶の伴奏に合わせた『平家物語』の語りを**平曲**という。

『平家物語』冒頭

※祇園精舎の鐘の声、※諸行無常の響きあり。
祇園精舎の鐘の音には、諸行無常の響きがある。

※沙羅双樹の花の色、※盛者必衰の理をあらはす。
沙羅双樹の花の色は、盛者必衰の道理を表している。

おごれる人も久しからず、ただ春の夜の夢のごとし。
おごりたかぶる者も長くは続かず、まるで春の夜の夢のようである。

たけき者もつひには滅びぬ、ひとへに風の前の塵に同じ。
勇猛な者もついには滅びてしまう、全く風の前の塵と同じである。

※祇園精舎…昔、インドの須達長者が釈迦のために建立した寺院で、釈迦が仏教の教えを説いた場所。
諸行無常…万物は常に移り変わり、不変なものはないということ。
沙羅双樹…インド原産の常緑高木で、釈迦が亡くなったとき、床の四辺に二本ずつ植えられていたこの木が、悲しみのために白色に変わり、枯れたという。
盛者必衰…勢い盛んな者も必ず滅びるということ。

古文の読み方

●歴史的仮名遣い
①語頭以外の「は・ひ・ふ・へ・ほ」→「わ・い・う・え・お」
※語頭のハ行や、助詞「は」「へ」などはそのまま。
②「ゐ・ゑ・を」→「い・え・お」
※助詞「を」などはそのまま。
③「ぢ・づ」→「じ・ず」
④「くわ・ぐわ」→「か・が」
⑤助動詞や助詞の「む・なむ」→「ん・なん」
⑥母音（a・i・u・e・o）が連続するとき
・au（ア段＋う・ふ）→ ô
・iu（イ段＋う・ふ）→ yû
・eu（エ段＋う・ふ）→ yô

●係り結び…係りの助詞が用いられると、結びの部分が変化する。
・係りの助詞
「ぞ」「なむ」「こそ」…前の語の強調
「や」「か」…………疑問・反語
（例）大将軍と　見まゐらせ候ふ。
大将軍とこそ見まゐらせ候へ。（「大将軍と」が強調される）

確認テスト　本文を読んで、問いに答えなさい。

(1) 次の文の（　）に当てはまる言葉をそれぞれ選びなさい。

『平家物語』は（①）に成立した（②）である。

ア 平安時代　イ 鎌倉時代　ウ 室町時代
エ 歌集　オ 軍記物語　カ 随筆（ずいひつ）

①〔　　〕②〔　　〕

(2) 『平家物語』の説明として適当なものを選びなさい。

ア 仏教の無常観を基調として、源氏（げんじ）一門の栄華と滅亡とがえがかれている。
イ 和語のみの文体で独特の調子があり、語りものとしても親しまれてきた。
ウ 琵琶法師らによる、琵琶に合わせた『平家物語』の語りのことを平曲という。

〔　　〕

(3) 『平家物語』の冒頭部分に合うように、（　）に入る言葉をそれぞれ選びなさい。

祇園精舎の鐘の声、（①）の響きあり。
沙羅双樹の花の色、（②）の理をあらはす。
おごれる人も久しからず、ただ（③）のごとし。
たけき者もつひには滅びぬ、ひとへに（④）に同じ。

ア 風の前の塵　イ 盛者必衰
ウ 春の夜の夢　エ 諸行無常

①〔　　〕②〔　　〕③〔　　〕④〔　　〕

(4) 『平家物語』の冒頭部分の内容に当て**はまらない**ものを選びなさい。

ア 祇園精舎の鐘の音には、万物は移り変わり、不変なものはないのだと伝えるような響きがある。
イ 沙羅双樹の花の色は、勢い盛んな者も必ず滅ぶのだという道理を示している。
ウ 春の夜の夢のように、おごりたかぶる者の栄華は久しく続いていく。
エ 風に吹（ふ）き飛ぶ塵と同じように、勇猛（ゆうもう）な者もついには滅んでしまう。

〔　　〕

敦盛の最期

一一八四年、一の谷の戦いで義経の奇襲を受けた平家は海に向かって敗走した。源氏方の武将・※熊谷次郎直実は、敵の大将軍と対戦したいと思い、磯の方へ馬を歩ませた。そこに見事な身なりの武者一騎が、舟を目指して馬を海に乗り入れていた。

熊谷、「あれは大将軍とこそ見まゐらせ候へ。
そこにいらっしゃるのは大将軍とお見受けいたします。

まさなうも①敵に後ろを見せさせたまふものかな。返させたまへ。」
見苦しくも敵に後ろをお見せになるものよ。（こちらへ）お引き返しください。

と扇を上げて招きければ、招かれて取つて返す。汀に打ち上らん
（その武者は）招かれて引き返す。（その武者が）波打ち際に上がろう

とするところに、押し並べてむずと組んでどうど落ち、
とするところに、（熊谷は馬を）並べてむずと組んでどうっと落ち、

取つて押さへて首をかかんと甲を押しあふのけて見ければ、
（武者を）取り押さえて首をかき切ろうと甲をあおむけにして見たところ、

年十六七ばかりなるが、薄化粧して、※かね黒なり。
年は十六、七くらいの者で、お歯黒をしている。

我が子の小次郎がよはひほどにて、容顔まことに美麗なりければ、
（熊谷の）我が子の小次郎の年齢くらいで、顔立ちが大変に美麗であったので、

いづくに刀を立つべしともおぼえず。
どこに刀を突き立てたらよいかもわからない。

「そもそもいかなる人にてましまし候ふぞ。名乗らせたまへ。
いったい（あなたは）どういう方でいらっしゃいますか。お名乗りください。

②助けまゐらせん。」と申せば、「汝は誰そ。」と問ひたまふ。
お助け申しましょう。お前は誰か。

「物その者で候はねども、※武蔵国の住人、熊谷次郎直実。」
物の数に入る者ではございませんが、

と名乗り申す。
と名乗り申し上げる。

「さては、汝にあうては名乗るまじいぞ。汝がためにはよい敵ぞ。
それでは、お前に対しては名乗るまい。お前にとってはよい敵だぞ。

名乗らずとも首を取つて人に問へ。③見知らうずるぞ。」
名乗らなくとも首を取って人に問うてみよ。（私のことを）見知っているだろうよ。

とぞのたまひける。
とおっしゃった。

※熊谷次郎直実…武蔵国熊谷（現・埼玉県熊谷市）の武将。のちに出家し、法然の弟子となった。
かね黒…お歯黒。当時の貴族などの風習で、歯を黒く染める。
武蔵国…現在の埼玉県・東京都・神奈川県の一部。

重要語句

…まゐらす	お…申し上げる（する）
候ふ	あります（ございます）・…ます（でございます）
…たまふ	お…になる・…なさる
のたまふ	おっしゃる

確認テスト 本文を読んで、問いに答えなさい。

(1) 次の言葉を現代仮名遣い(づか)に直し、ひらがなで答えなさい。

A まさなうも 〔　　〕

B よはひ 〔　　〕

(2) 例に従って、次の言葉に含(ふく)まれる係りの助詞を□で囲み、変化している結びの部分に――線を引きなさい。

(例) さぬきの造(みやつこ)と［なむ］いひ<u>ける</u>

大 将 軍 と こ そ 見 ま ゐ ら せ 候 へ

(3) 本文中から、何かが倒(たお)れ落ちる様子を表す言葉を三字で書きぬきなさい。

□□□

(4) ――線①「敵」とあるが、ここでの「敵」にあたる人物として適当なものを選びなさい。

ア 熊谷次郎直実　**イ** 大将軍　**ウ** 小次郎 〔　　〕

(5) ――線②「助けまゐらせん」とあるが、なぜ若武者を助けようとしているのか。適当なものを選びなさい。

ア 若武者が我が子くらいの年齢(ねんれい)で、美しい顔立ちだったから。

イ 若武者の名前や、どんな人物かがわからなかったから。

ウ 若武者が、物の数に入るほどの者ではなかったから。 〔　　〕

(6) ――線③「見知らうずるぞ」とあるが、この発言からどのようなことがわかるか。適当なものを選びなさい。

ア 若武者がまだ年若い人物であること。

イ 若武者が名の通った人物であること。

ウ 若武者が名乗るほどの人物ではないこと。 〔　　〕

敦盛(あつもり)の最期(さいご)

源氏方の武将・熊谷次郎直実(くまがえのじろうなおざね)は、捕(と)らえた敵方の武将が、我(わ)が子の年齢(ねんれい)ほどの若武者だったため、助けようとした。

熊谷(くまがへ)、「あつぱれ、大将軍や。①この人一人(いちにん)討ちたてまつりたりとも、
ああ、立派な大将軍だ。　この人一人をお討ち申ししたとしても、

負くべきいくさに勝つべきやうもなし。また討ちたてまつらずとも、
負けるはずのいくさに勝てるわけでもない。　お討ち申さなくても、

勝つべきいくさに負くることもよもあらじ。
まさかあるまい。

②小次郎(こじらう)が薄手(うすで)負うたるをだに、直実(なほざね)は心苦しうこそ思ふに、
（我が子の）小次郎が軽い傷を負ったのでさえ、（父であるこの）直実はつらく思うのに、

この殿(との)の父、討たれぬと聞いて、いかばかりか嘆(なげ)きたまはんずらん。
この殿の父は、（子が）討たれたと聞いて、どれほどかお嘆きになることだろう。

あはれ助けたてまつらばや。」と思ひて、
ああ　お助け申したい。

後ろをきつと見ければ、※土肥(とひ)、梶原(かぢはら)五十騎(き)ばかりで続いたり。
さっと見たところ、（源氏方の武将の）土肥・梶原が五十騎ほどで続いている。

熊谷涙(なみだ)を抑(おさ)へて申しけるは、
申したことには、

「助けまゐらせんとは存じ候(さうら)へども、味方の軍兵(ぐんびやう)、
お助け申そうとは存じますけれども、　味方の軍勢は、

※雲霞(うんか)のごとく候(さうら)ふ。③よも逃(のが)れさせたまはじ。
雲霞のように大勢群がっています。

人手(ひとで)にかけまゐらせんより、同じくは直実が手にかけまゐらせて、
他人の手におかけ申すより、　同じことならば直実の手におかけして、

後(のち)の御孝養(おんけうやう)をこそつかまつり候はめ。」と申しければ、
死後のご供養をさせていただきましょう。　と申したところ、

「ただとくとく首を取れ。」とぞのたまひける。
ただ早く早く首を取れ。　とおっしゃった。

※土肥、梶原…土肥次郎実平と梶原平三景時。ともに頼朝の信頼の厚い武将だった。景時は義経と対立したことで知られ、のちに鎌倉幕府の重臣となったが、頼朝の死後に失脚した。

雲霞…雲と霞。人が大勢群がるさまを「雲霞のごとく」という。

重要語句

……たてまつる	お……申し上げる
よも……じ	まさか（決して）……ないだろう

確認テスト 本文を読んで、問いに答えなさい。

(1) 次の言葉を現代仮名遣(づか)いに直したものとなるように、解答欄(かいとうらん)に当てはまる言葉をひらがなで答えなさい。

心苦しうこそ思ふに

心苦［　　］こそ思［　　］に

(2) ――線①「この人一人……やうもなし」とあるが、ここで熊谷が考えている内容として適当なものを選びなさい。

ア この武者を討っても討たなくてもいくさの勝敗には影響(えいきょう)がないのだから、お助けしたい。

イ この武者を討たないことで勝つはずの戦いに負けるかもしれないから、味方に気づかれてはならない。

ウ この武者を討つことで負けるはずの戦いに勝つことがあるかもしれないから、やはり大将軍だ。

［　　］

(3) ――線②「小次郎が……思ふ」とあるが、ここで熊谷が考えている内容となるように、（　）に当てはまる言葉を選びなさい。

我が子が軽傷を負ったのでさえ、父の私はつらく思うのに、（　）。

ア この方が討たれることは、避けられないにちがいない

イ この方が討たれたとなれば、その父の悲しみは計り知れない

ウ この方が討たれることもあるほど、戦いとは非情なものなのだ

［　　］

(4) ――線③「よも逃れさせたまはじ」の意味を選びなさい。

ア なんとか逃れさせたいと思います

イ 私もともにお逃げいたします

ウ 決してお逃げになれないでしょう

［　　］

敦盛（あつもり）の最期（さいご）

熊谷（くまがへ）は捕（と）らえた若武者を助けようとするが、周囲を味方の軍勢が取り囲む中、若武者を逃（に）がすことができない。

熊谷（くまがへ（エ））あまりにいとほし（オ）くて、いづ（ズ）くに刀を立つべしともおぼえず、
どこに刀を突き立てたらよいかもわからず、

目もくれ心も消えはてて、前後不覚（ぜんごふかく）におぼえけれども、
目もくらみ気も遠くなって、前後もわからないように思われたけれども、

さてしもあるべきことならねば、泣く泣く首をぞかいてんげる。
そのままでいるわけにはいかないので、

「あはれ（ワ）、弓矢取る身ほど口惜（くちを（オ））しかりけるものはなし。
ああ、弓矢を取る（武士の）身ほど残念であるものはない。

武芸の家に生まれずは、①<u>何とてかかる憂（う）き目をば見るべき。</u>
生まれなければ、

情けなう（ノウ）も討（う）ちたてまつるものかな。」とかきくどき、
非情にもお討ち申したものだ。とくどくど繰り返し嘆き、

袖（そで）を顔に押（お）し当ててさめざめとぞ泣きゐ（イ）たる。

やや久しう（シュウ）あつ（アッ）て、さてもあるべきならねば、※鎧直垂（よろひ（イ）たたれ）を取つ（トッ）て
やや長い時間がたって、そのままにしているわけにもいかないので、

首を包まんとしけるに、錦（にしき）の袋（ふくろ）に入れたる笛をぞ腰（こし）に差されたる。
包もうとしたところ、錦の袋に入れた笛を腰に差しておられる。

「あな②<u>いとほし（オ）</u>、この暁（あかつき）、城（じやう（ジョウ））の内にて管絃（くわんげん（カン））したまひ（イ）つるは、
なんと　今日の明け方、（平家の）城の中で音楽をなさっていたのは、

この人々にておはし（ワ）けり。当時味方に東国の勢何万騎（ぎ）かあるらめども、
この人たちでいらしたのだ。今、味方に東国の軍勢が何万騎かいるだろうけれども、

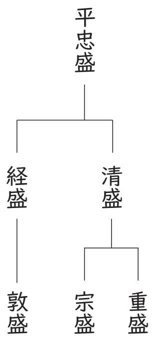
いくさの陣（ぢん（ジン））へ笛持つ人はよもあらじ。上臈（じやうらふ（ジョウロウ））はなほ（オ）も優（やさ）しかりけり。」
笛を持ち込む人は決していまい。高貴な方はやはり風雅なものだ。

とて、※九郎御曹司（くらう（ロウ）おんざう（ゾウ）し）の見参（げんざん）に入れたりければ、③<u>これを見る人、涙（なみだ）を流さずといふ（ウ）ことなし。</u>
と思って、（源氏の）御曹司・九郎義経にお見せ申したところ、

後（のち）に聞けば、※修理大夫（しゆり（シュ）のだいぶ）経盛（つねもり）の子息に※大夫敦盛（たいふあつもり）とて、生年（しやうねん（ショウ））十七にぞ
後に聞くところでは、（この方は）修理大夫経盛の子息で大夫敦盛といって、年、十七に

なられける。それよりしてこそ熊谷が④<u>発心（ほつしん（ホッ））の思ひ（イ）</u>は進みけれ。
おなりであった。このことがあってから、熊谷の発心の思いはより強くなった。

※鎧直垂…鎧の下に着る衣服。　九郎…義経は父・義朝の九男で、通称を九郎といった。
修理大夫…宮中の修理・造営の職の長官。　大夫…ここでは位が五位の者のこと。



重要語句

いとほし	かわいそうだ・ふびんだ
おはす	（……て）いらっしゃる
なほ	やはり

確認テスト 本文を読んで、問いに答えなさい。

(1) 例に従って、次の言葉に含まれる係りの助詞を□で囲み、変化している結びの部分に――線を引きなさい。

(例) さぬきの造と[なむ]いひ<u>ける</u>

さ め ざ め と ぞ 泣 き ゐ た る

(2) ――線①「何とてかかる憂き目をば見るべき」とあるが、これはどういう意味か。適当なものを選びなさい。

ア それでもこのようなつらい目にあうことがあるだろう

イ どうにかしてこのようなつらい目にあうべきだろう

ウ 決してこのようなつらい目にあうことはないだろう

〔　　〕

(3) ――線②「いとほし」の意味を選びなさい。

ア かわいらしい、愛らしい

イ ふびんだ、かわいそうだ

ウ たいへんめずらしい

〔　　〕

(4) ――線③「これを見る人、涙を流さずといふことなし」とあるが、これはどういう意味か。適当なものを選びなさい。

ア これを見た人は、みな涙を流した

イ これを見ても涙を見せず、何もいわなかった

ウ これを見る人の中には、涙を流さない人もいた

〔　　〕

(5) ――線④「発心の思ひ」とはどのようなものか。適当なものを選びなさい。

ア 改めて悲しみが深まり、嘆く思い。

イ 手柄を立て、立身出世しようとする思い。

ウ 出家し、仏門に入ろうとする思い。

〔　　〕

扇の的

　一一八五年、義経は平家の拠点となっていた屋島を攻めた。平家は海に逃れ、海上の平家と陸上の源氏が向かい合うこととなった。日が暮れ、義経が引き上げようとすると、沖から小舟が一そうこぎ寄せた。舟の中から年若い※女房が姿を見せ、扇を竿の先に付けて舟端に立て、陸へ向かって手招きをする。扇を射よということらしい。
　義経は、弓の名手と聞いた、※下野国の住人・那須与一に、扇の真ん中を射るよう命じる。与一は辞退しようとするが、義経の命令に背くことはできず、馬に乗って水ぎわに近づいた。味方のつわものどもは後ろ姿をはるかに見送って、「この若者は必ず射当てると思います。」と申し上げたので、義経も頼もしそうである。扇との間は※四十間ほどあった。

頃は二月十八日の※酉の刻ばかりのことなるに、
時は　酉の刻頃のことであるが、

折節北風激しくて、磯打つ波も高かりけり。
折から　岸を打つ波も高かった。

舟は揺り上げ揺りする漂へば、扇も串に定まらずひらめいたり。
舟は揺り上げられ揺り落とされ（上下に）漂うので、扇も竿の先に静止せずひらめいている。

沖には平家、舟を一面に並べて見物す。

陸には源氏、※くつばみを並べてこれを見る。いづれもいづれも
馬のくつわを　どちらもどちらも

晴れならずといふことぞなき。与一、目をふさいで、
晴れがましくないということはない（晴れがましい様子である）。与一は目を閉じて、

「南無※八幡大菩薩、※我が国の神明、※日光の権現、宇都宮、那須の
我が故郷の神々の、

湯泉大明神、願はくは、あの扇の真ん中射させてたばせたまへ。
射させてください。

①これを射損ずるものならば、弓切り折り自害して、

人に二たび面を向かふべからず。
二度と顔を合わせるつもりはありません。

②いま一度※本国へ迎へんとおぼしめさば、この矢外させたまふな。」
いま一度（私を）本国へ迎えようとお思いになるならば、外させないでください。

と心のうちに祈念して、目を見開いたれば、
心の中で祈り念じて、

風も少し吹き弱り、扇も射よげにぞなつたりける。
吹くのが弱まり、　射やすそうになっていた。

※女房…ここでは貴族や武家に仕える女性のこと。　下野国…現在の栃木県。
四十間…一間は約一・八メートル。　酉の刻…午後六時頃。
くつばみ…くつわ。馬の口にくわえさせ、手綱を付けるための金具。
八幡大菩薩…八幡神を仏教の菩薩とみたときの称号。八幡神は特に武家の崇敬を集めており、弓矢の神とされた。
我が国…ここでは与一の故郷である下野国のこと。ここから与一は下野国の神々を挙げている。
日光の権現、宇都宮、那須の湯泉大明神…それぞれ、日光二荒山神社（日光市）、宇都宮二荒山神社（宇都宮市）、那須湯泉神社（那須町）の祭神を指す。
本国…ここでは与一の故郷である下野国のこと。

確認テスト　本文を読んで、問いに答えなさい。

(1) 次の言葉を現代仮名遣(づか)いに直し、**ひらがな**で答えなさい。

A　にんぐわつ　〔　　　〕

B　あふぎ　〔　　　〕

(2) 本文中の対句(ついく)の表現となるように、解答欄(かいとうらん)に当てはまる言葉を書きぬきなさい。

□には□□、□を一面に並べて見物す。

□には□□、□□□□を並べてこれを見る。

(3) ――線①「これを射損ずる……べからず」から読み取れる与一の様子として、適当なものを選びなさい。

ア　自らや味方の名誉(めいよ)がかかる中、必死に祈(いの)り念じている。

イ　弓矢の腕(うで)に自信があり、射当てることを確信している。

ウ　矢を射るには不利な状況(じょうきょう)で、投げやりになっている。

〔　　　〕

(4) ――線②「いま一度本国へ迎へんとおぼしめさば」とあるが、この部分が表す内容となるように、（　）に当てはまる言葉をそれぞれ選びなさい。

（**A**）が、もう一度（**B**）を本国に迎えようとお思いになるならば

ア　源義経　　**イ**　那須与一　　**ウ**　我が国の神明

A〔　　　〕　**B**〔　　　〕

(5) 本文の内容に合うものを選びなさい。

ア　源氏の方から平家に向かって舟を近づけた。

イ　どちらを見ても、たいへん晴れがましい情景だった。

ウ　与一は屋島にある神社の神々に願をかけた。

〔　　　〕

扇の的

与一は義経に命じられ、敵味方が見守る中、舟の竿先に付けられた扇の的を射ることとなった。

与一、※鏑を取ってつがひ、※よつ引いてひやうど放つ。
鏑矢を取って（弓に）つがえ、十分引き絞ってひょうと放つ。

小兵といふぢやう、※十二束三伏、弓は強し、
小兵ということで、（矢は）十二束三伏、（だが）弓は強い、

浦響くほど長鳴りして、あやまたず扇の要際※一寸ばかりおいて、
（鏑矢は）浦一帯に響くほど長いうなりを上げて、誤りなく扇の要の際から一寸ほど離れたところを、

ひいふっとぞ射切ったる。
ひいふっと　射切った。

鏑は海へ入りければ、扇は空へぞ上がりける。
鏑矢は海に落ち、　扇は空へ舞い上がった。

しばしは虚空にひらめきけるが、春風に一もみ二もみもまれて、
（扇は）しばしの間は空中にひらめいていたが、

海へさっとぞ散ったりける。
さっと　散ったのだった。

夕日の輝いたるに、皆紅の扇の日出だしたるが、白波の上に漂ひ、
夕日が輝いている中に、　真っ赤な扇で（金の）日輪が描かれているものが、白い波の上に漂い、

浮きぬ沈みぬ揺られければ、沖には平家、舟端をたたいて感じたり、
浮いたり沈んだり揺られていたのを、　舟端をたたいて感嘆し、

陸には源氏、※箙をたたいてどよめきけり。
箙をたたいてはやし立てた。

あまりのおもしろさに、感に堪へざるにやとおぼしくて、
感に堪えなかった（感動した）のかと見えて、

舟のうちより、①年五十ばかりなる男の、※黒革縅の鎧着て、
舟の中から、　年が五十ほどの男で、

※白柄の長刀持ったるが、扇立てたりける所に立って舞ひしめたり。
持った者が、　扇の立ててあった所に立って　舞を舞った。

※伊勢三郎義盛、与一が後ろへ歩ませ寄って、「御定ぞ、つかまつれ。」
与一の後ろへ（馬を）歩ませ近寄って、　御命令であるぞ、射よ。

と言ひければ、今度は②※中差取ってうちくはせ、
と言ったので、　中差を取って（弓に）つがえ、

よつ引いて※しや首の骨をひやうふっと射て、舟底へ逆さまに射倒す。
十分引き絞って　男の首の骨をひょうふっと射て、

平家の方には音もせず、源氏の方にはまた箙をたたいてどよめきけり。
音もなく（静まり返り）、

「あ、射たり。」と言ふ人もあり、また、「情けなし。」と言ふ者もあり。
心ないことを。

※鏑…鏑矢。鏑は矢の先に付けると射たときに音が出る道具で、開戦の合図などに用いられた。
よつ引いて…よく引いて、という意味で、弓を十分に引き絞って。
十二束三伏…束は一握り（指四本分）、伏は指一本分の幅。
一寸…約三センチメートル。　箙…矢を入れる道具。
黒革縅…濃い色の革ひもで鎧の板をつづり合わせたもの。
白柄…木地のままで何も塗っていない白木の柄。　伊勢三郎義盛…義経に仕える重臣。
中差…箙に差した矢のうち、戦闘用の矢。　しや首…相手の首をののしって言う語。

確認テスト　本文を読んで、問いに答えなさい。

(1) 例に従って、次の言葉に含(ふく)まれる係りの助詞を□で囲み、変化している結びの部分に――線を引きなさい。

（例）さぬきの造(みやつこ)と[なむ]いひ<u>ける</u>

扇は空へぞ上がりける

(2) 本文に用いられている擬声語(ぎせいご)（擬音語）・擬態語のうち、次の音を表すものを選びなさい。

放たれた矢が風を切って飛び、勢いよく扇を射切った音。

ア　ひやう　　イ　ひいふつ　　ウ　ひやうふつ　〔　　〕

(3) ――線①「年五十ばかり……持つたる」とあるが、この人物は平家方と源氏方のいずれの人物か。適当なものを選びなさい。

ア　平家方　　イ　源氏方　〔　　〕

(4) ――線②「中差取つてうちくはせ」の主語に当たる人物を選びなさい。

ア　与一　　イ　年五十ばかりなる男　　ウ　伊勢三郎義盛　〔　　〕

(5) 本文の内容に合うものを選びなさい。

ア　与一が扇を射ると、鏑矢はしばらく空にひらめいた。
イ　与一が扇を見事に射切ると、平家は静まり返った。
ウ　与一が男を射倒(いたお)すと、源氏は舟端をたたいてどよめいた。
エ　与一が男を射たことを、心ないことだと言う者もいる。

〔　　〕

漢詩の基礎知識

漢詩は中国の伝統的な詩で、李白・杜甫などによる唐代の詩を中心に日本でも古くから親しまれてきた。漢詩の代表的な形式には、絶句と律詩がある。

絶句（四句）	五言絶句	七言絶句
律詩（八句）	五言律詩	七言律詩

漢詩には、押韻や対句などの表現技法がある。

・**押韻**…決まった箇所に同じ響きの音をもつ字を置く（韻を踏む）。
・**対句**…形や意味が対になる二つの句を並べる。

●絶句

絶句は**四句**からなる漢詩で、一句の字数によって五言絶句と七言絶句に分けられる。絶句は**起句**・**承句**・**転句**・**結句**で構成される。

・**五言絶句**

第一句（起句）	□□□□□
第二句（承句）	□□□□■
第三句（転句）	□□□□□
第四句（結句）	□□□□■

・**七言絶句**

第一句（起句）	□□□□□□■
第二句（承句）	□□□□□□■
第三句（転句）	□□□□□□□
第四句（結句）	□□□□□□■

五言絶句は偶数句の末尾で、七言絶句は第一句と偶数句の末尾で押韻する。

●律詩

律詩は**八句**からなる漢詩で、一句の字数によって五言律詩と七言律詩に分けられる。律詩は二句ずつ首聯・頷聯・頸聯・尾聯の聯にまとめられる。

・**五言律詩**

首聯	第一句	□□□□□
	第二句	□□□□■
頷聯	第三句	□□□□□
	第四句	□□□□■
頸聯	第五句	□□□□□
	第六句	□□□□■
尾聯	第七句	□□□□□
	第八句	□□□□■

・**七言律詩**

首聯	第一句	□□□□□□■
	第二句	□□□□□□■
頷聯	第三句	□□□□□□□
	第四句	□□□□□□■
頸聯	第五句	□□□□□□□
	第六句	□□□□□□■
尾聯	第七句	□□□□□□□
	第八句	□□□□□□■

五言律詩は偶数句の末尾で、七言律詩は第一句と偶数句の末尾で押韻する。

また、頷聯（第三句・第四句）、頸聯（第五句・第六句）を対句にするという規則がある。

確認テスト

(1) 絶句と律詩はそれぞれ何句からなるか。漢数字で答えなさい。

絶句 □ 句　律詩 □ 句

(2) 絶句の第一句から第四句は、内容の上でそれぞれ何句というか。それぞれ解答欄（かいとうらん）に当てはまる漢字を答えなさい。

第一句 □ 句　第二句 □ 句
第三句 □ 句　第四句 □ 句

(3) 五言絶句で、原則として押韻する箇所の□をぬりつぶしなさい。

第一句 □□□□□
第二句 □□□□□
第三句 □□□□□
第四句 □□□□□

(4) 七言絶句で、原則として押韻する箇所の□をぬりつぶしなさい。

第一句 □□□□□□□
第二句 □□□□□□□
第三句 □□□□□□□
第四句 □□□□□□□

(5) 律詩で原則として対句になるのは第何句と第何句か。漢数字で答えなさい。

第 □ 句と第 □ 句　第 □ 句と第 □ 句

漢文の訓読

漢文を日本語の規則に従って読むことを**訓読**という。漢字だけで書かれた原文を**白文**といい、これに**訓点**という訓読のための文字や記号を加えたものを**訓読文**という。訓点には、**送り仮名・返り点・句読点**がある。

〈白文〉春眠不覚暁 → 〈訓読文〉春眠不レ覚エレ暁ヲ

●主な返り点

・**レ点**……下から上に一字返って読むことを表す。

(例) ②レ① 不レ覚エレ暁ヲ

・**一・二点**…下から上に二字以上返って読むことを表す。

(例) ③二①②一 送ル三孟浩然ノ之クヲ二広陵ニ一

訓読文を、漢字仮名交じり文に書き改めたものを**書き下し文**という。

〈訓読文〉春眠不(ず)レ覚エレ暁ヲ → 〈書き下し文〉春眠暁を覚えず

訓読文を書き下し文に直すときは、次のような決まりがある。

・送り仮名はひらがなに改める。
・返り点が示す順に従って書き改める。
・漢字は原則そのままだが、「之(の)」「不(ず)」などの助詞・助動詞はひらがなに改める。

A 春暁(しゅんぎょう)(シュンギョウ) 孟浩然(もうこうねん)(モウコウネン)

春眠不(ず)レ覚エレ暁ヲ
処処聞ク二啼鳥ヲ一
夜来風雨ノ声
花落ツルコト知ル多少

春眠(しゅんみん)(シュン)暁(あかつき)を覚えず
春の眠りは(心地よく)夜が明けたことにも気づかない。

処処(しょしょ)(ショショ)啼鳥(ていちょう)(チョウ)を聞く
(目覚めると)あちらこちらで鳴く鳥の声が聞こえる。

夜来(やらい)風雨の声
昨夜は風雨の音がしていたが、

花落つること知る多少
花はどれほど散ったことだろうか。

孟浩然

孟浩然は唐(とう)代の詩人。「春暁」は孟浩然が暮らしていた鹿門山(ろくもんさん)の春の朝を、起承転結の構成でうたっている。

・起句…歌い起こす
・承句…起句を承(う)けて展開する
・転句…場面が転換(てんかん)する
・結句…全体をまとめ結ぶ

確認テスト 詩を読んで、問いに答えなさい。

(1) 返り点に従って、次の□に読む順に算用数字を書きなさい。

□レ□□□レ□

(2) 返り点に従って、次の□に読む順に算用数字を書きなさい。

□レ□□二□□一

(3) 返り点に従って、次の□に読む順に算用数字を書きなさい。

□三□□二□□一

(4) 次の数字の順に従って□を読むように、返り点を書き入れなさい。

1 5 2 3 4

(5) 次の訓読文を書き下し文に直し、解答欄に当てはまる言葉を書き入れなさい。ただし「不」は助動詞に当たる言葉である。

渾（すべテ）欲レ（ス）不レ（ざラント）勝レ（たヘ）簪（しんニ）

渾べて簪に〔　　　〕

(6) Aの漢詩の形式を選びなさい。

ア 五言絶句　**イ** 七言絶句

ウ 五言律詩　**エ** 七言律詩

〔　　　〕

(7) Aで「暁」と同じ音の響き（ひび）をもつ句末の字すべてに〇を付けなさい。

（暁）　鳥　声　少

(8) Aで場面が一転している句は第何句か。漢数字で答えなさい。

第□句

B 黄鶴楼にて孟浩然の広陵に之くを送る　李白

①故人西のかた※黄鶴楼を辞し
古くからの友は（揚州の）西方にある黄鶴楼に別れを告げ、
※煙花三月揚州に下る
春がすみの立つ三月に揚州へと（舟で）下る。
孤帆の遠影碧空に尽き
一そうの帆掛け舟の遠い影が青空のかなたに消え、
唯だ見る長江の天際に流るるを
ただ長江が天の果てまで流れるのを見るばかりである。

故人西ノカタ辞シ二黄鶴楼一ヲ
煙花三月下ル二揚州一ニ
孤帆ノ遠影碧空ニ尽キ
唯ダ見ル長江ノ天際ニ流ルルヲ

※黄鶴楼…武昌（現在の湖北省　武漢市の一部）にあった高楼で、長江に面していた。仙人が描いた黄色い鶴が壁から抜け出し、仙人を乗せて飛び去ったという伝説がある。
煙花…春がすみ。　揚州…現在、江蘇省　揚州市。古くは広陵といった。

C 絶句　杜甫

江は碧にして鳥は逾よ白く
川は深いみどりで、（その色を背景に）水鳥はいっそう白く、
山は青くして②花は然えんと欲す
山は青々として（その色を背景に）
今春看す又過ぐ
今年の春も見る間にまた過ぎていく。
③何れの日か是れ帰年ならん
いつになれば故郷へ帰る年がくるだろうか。

江ハ碧ニシテ鳥ハ逾ヨ白ク
山ハ青クシテ花ハ欲スレ然エント
今春看ス又過グ
何レノ日カ是レ帰年ナラン

李白と杜甫

李白と杜甫は唐代の二大詩人で、李白はその作風から「詩仙」、杜甫は「詩聖」と称される。
「黄鶴楼にて孟浩然の広陵に之くを送る」は、武昌から広陵（揚州）に向かう孟浩然を、李白が黄鶴楼で見送ったときのもの。孟浩然を乗せた舟が消えゆく姿と別れの悲しみがうたわれている。
「絶句」は、杜甫が戦乱を逃れるために都の長安（現在、陝西省の省都・西安市）を離れ、成都（現在、四川省の省都・成都市）にいたときのもので、成都の春の美しい風景と、故郷へ帰れないままに春を過ごす悲しみがうたわれている。

確認テスト 詩を読んで、問いに答えなさい。

(1) B・Cの漢詩の形式をそれぞれ選びなさい。

ア 五言絶句　イ 七言絶句
ウ 五言律詩　エ 七言律詩

B〔　　〕 C〔　　〕

(2) Cで韻を踏んでいる句末の字すべてに○を付けなさい。

白　然　過　年

(3) ――線①「故人」とあるが、ここでは誰を指しているか。適当なものを選びなさい。

ア 孟浩然　イ 李白　ウ 杜甫

〔　　〕

(4) Bの後半の情景として適当なものを選びなさい。

ア 舟に乗る李白が、黄鶴楼にいる孟浩然を見送っている。
イ 黄鶴楼にいる李白が、舟で長江を下る孟浩然を見送っている。
ウ 李白と孟浩然が、水平線まで流れる長江を眺めている。

〔　　〕

(5) Cの前半の二句は対句となっている。「江は碧にして」と対になっている箇所を書き下し文から書きぬきなさい。

〔　　〕

(6) ――線②「花は然えんと欲す」の意味を選びなさい。

ア 花が今にも燃え出すかのように赤く咲いている。
イ 花がまるで燃えてしまったかのように散っている。
ウ 花がことごとく燃え尽きたかのようにしおれている。

〔　　〕

(7) ――線③「何れの日か是れ帰年ならん」でうたわれている心情を選びなさい。

ア いつまでも美しいこの土地にいたいと願う気持ち。
イ まもなく故郷に帰れることをよろこぶ気持ち。
ウ 今年も故郷に帰れずにいることを嘆く気持ち。

〔　　〕

D 春望　杜甫（とほ）

国破れて山河在り
（戦乱で）国都（長安）は破壊されても、山や河はかわらずに在る。

城春にして草木（さうもく（ソウ））深し
城壁で囲まれた都市（長安）も春となり、草木が深く生い茂っている。

時に感じては花にも涙（なみだ）を濺（そそ）ぎ
時勢に悲しみを感じては、花にも涙を流し、

別れを恨（うら）んでは鳥にも心を驚（おどろ）かす
（戦乱による家族との）離別を恨めしく思っては、鳥の声にも心を驚かす。

烽火三月（ほうくわ（カ）さんげつ）に連なり
戦乱ののろしは三か月間続き、

家書万金（ばんきん）に抵（あた）る
家族からの手紙は万金にも値する（ほど貴重である）。

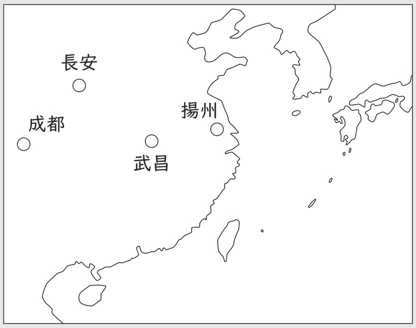
白頭搔（か）けば更（さら）に短く
白髪頭をかけば抜け落ちて少なくなり、

渾（す）べて簪（しん）に勝（た（エ））へざらんと欲（ほつ（ホッ））す
全く冠を留めるかんざしもさせないほどだ。

国　破レテ　山　河　在リ
城　春ニシテ　草　木　深シ
感ジテハレ　時ニ　花ニモ　濺ギレ　涙ヲ
恨ンデハレ　別レヲ　鳥ニモ　驚カスレ　心ヲ
烽　火　連ナリ二　三　月ニ一
家　書　抵ル二　万　金ニ一
白　頭　搔ケバ　更ニ　短ク
渾ベテ　欲スレ　不（ざ）ラントレ　勝ヘレ　簪ニ

長安

長安（ちょうあん）は唐（とう）の都であったが、七五五年からの安史（あんし）の乱で破壊（はかい）され、杜甫は長安から逃（のが）れることとなった。



確認テスト　詩を読んで、問いに答えなさい。

(1) Dの漢詩の形式を選びなさい。

ア 五言絶句　イ 七言絶句
ウ 五言律詩　エ 七言律詩

［　　］

(2) Dで韻を踏んでいる句末の字すべてに○を付けなさい。

在　深　涙　心　月　金　短　簪

(3) Dで対句となっているものをすべて選びなさい。

ア 第一句と第二句　イ 第三句と第四句
ウ 第五句と第六句　エ 第七句と第八句

［　　］

(4) ——線部「山河在り」と対になっている箇所を書き下し文から書きぬきなさい。

［　　］

(5) 詩の内容に合うものを選びなさい。

ア 戦乱の中で、都市ばかりでなく山や河も荒れ果てている。
イ 戦乱が終わり、訪れた穏やかな春を楽しんでいる。
ウ 戦乱が続き、家族からの手紙は貴重なものになっている。

［　　］

詩

大阿蘇

三好達治

雨の中に馬がたっている
一頭二頭子馬をまじえた馬の群れが　雨の中にたっている
雨は蕭々と降っている
馬は草をたべている
尻尾も背中も鬣も　ぐっしょりと濡れそぼって
彼らは草をたべている
草をたべている
あるものはまた草もたべずに　きょとんとしてうなじを垂れてたっている
雨は降っている　蕭々と降っている
山は煙をあげている
中岳の頂から　うすら黄いろい　重っ苦しい噴煙が濛々とあがっている
空いちめんの雨雲と
やがてそれはけじめもなしにつづいている
馬は草をたべている
草千里浜のとある丘の
雨に洗われた青草を　彼らはいっしんにたべている
たべている
彼らはそこにみんな静かにたっている
ぐっしょりと雨に濡れて　いつまでもひとつところに　彼らは静かに集まっている
もしも百年が　この一瞬の間にたったとしても　何の不思議もないだろう
雨が降っている　雨が降っている
雨は蕭々と降っている

阿蘇山

阿蘇山は熊本県北東部に位置する火山で、高岳・中岳などの山々から構成される。草千里ヶ浜（草千里浜）は阿蘇山中の草原で、東に噴煙をあげる中岳を見ることができる。

確認テスト　詩を読んで、問いに答えなさい。

(1) 詩を、使われている言葉や形式から分類したときに、「大阿蘇」に当てはまるものを次から二つ選びなさい。

ア 文語詩　イ 口語詩
ウ 定型詩　エ 自由詩　オ 散文詩

［　　・　　］

(2) 「蕭々」の意味を選びなさい。

ア とらえどころがない様子。　イ ものさびしい様子。
ウ 光が明るい様子。　エ 荒(あ)れ狂(くる)う様子。

［　　］

(3) 「濛々」の意味を選びなさい。

ア 温度が高い様子。　イ 静かな様子。
ウ あらあらしい様子。　エ 一面に立ちこめる様子。

［　　］

(4) 「大阿蘇」で用いられている表現技法として、適当なものを選びなさい。

ア 直喩(ちょくゆ)　イ 体言止め　ウ 反復

［　　］

(5) 「大阿蘇」では、阿蘇の風景を描(えが)いた箇所(かしょ)で行末(ぎょうまつ)に同じ言葉が繰(く)り返されている。その行末の三字を書きぬきなさい。

［　　　］

(6) 「大阿蘇」で、阿蘇の風景の中で感じた作者の思いが描かれている行を探し、最初の三字を答えなさい。

［　　　］

短歌の基礎知識

●**定型**

短歌は**五・七・五・七・七**の三十一音からなり、三十一文字とも呼ばれる。五・七・五・七・七はそれぞれ、**初句・二句・三句・四句・結句**といい、また、五・七・五を上の句、七・七を下の句という。

定型より音数が多いものを**字余り**、少ないものを**字足らず**という。

●**句切れ**

一首の中での言葉や意味の切れ目を句切れという。言い切りの表現があるところなどに句切れがある。

・初句切れ……五／七・五・七・七
・二句切れ……五・七／五・七・七
・三句切れ……五・七・五／七・七
・四句切れ……五・七・五・七／七

句切れがない歌（句切れなし）や、句切れが二か所以上ある歌もある。

和歌と短歌

和歌には長歌や短歌などさまざまな形式があるが、平安時代以降は和歌といえば短歌の形式を指すようになった。

明治時代になると和歌革新運動が起こり、近代短歌が確立した。

短歌五首

A　くれなゐ(イ)の二尺伸びたる薔薇の芽の針やはらか(ウ)に春雨のふる　正岡子規

B　みちのくの母のいのちを一目見ん一目みんとぞただにいそげる　斎藤茂吉

C　白鳥は哀しからずや空の青海のあを(オ)にも染まずただよふ(ウ)　若山牧水

D　※不来方のお城の草に寝ころびて
空に吸は(ウ)れし
十五の心　石川啄木

E　観覧車回れよ回れ想ひ(イ)出は君には一日我には一生　栗木京子

※不来方…岩手県盛岡の古称。

確認テスト　短歌を読んで、問いに答えなさい。

(1) Aの歌の鑑賞文として適当なものを選びなさい。

ア 助詞「の」の繰り返しが、やわらかなリズムを生んでいる。
イ 「針」という表現から、とげの鋭さや硬さが感じられる。
ウ 激しい雨に打たれるみずみずしい新芽がうたわれている。

〔　　〕

(2) Bの歌の鑑賞文として適当でないものを選びなさい。

ア 危篤の母に一目でも会いたいという思いが表現されている。
イ 言葉の繰り返しに、作者の痛切な思いが感じられる。
ウ みちのくから母のもとへと急ぐ思いがうたわれている。

〔　　〕

(3) Cの歌の鑑賞文として適当なものを選びなさい。

ア 空の青さにかすむ鳥の姿を、のどかなものに思っている。
イ 海をうつすように青みがかった鳥の姿を美しく感じている。
ウ 周囲に染まることのない白鳥に、自らを重ね合わせている。

〔　　〕

(4) Dの歌の鑑賞文として適当なものを選びなさい。

ア 思春期のわくわくするような希望がうたわれている。
イ かつての少年らしい心をなつかしむように回想している。
ウ もう故郷の情景を思い出せない自分をなげいている。

〔　　〕

(5) Eの歌の鑑賞文として適当でないものを選びなさい。

ア 相手にとっては何気ない時間も、自分にとっては忘れられないかけがえのないものだと感じている。
イ 対句を用いた表現によって、同じ出来事に対する相手と自分の思いの違いが鮮やかに対比されている。
ウ 命令形による呼びかけや体言止めを使って、時間を忘れるほど楽しんだ観覧車の思い出がうたわれている。

〔　　〕

(6) A～Eの歌の中から、二句切れのものを二首探し、記号で答えなさい。

〔　　・　　〕

鑑賞文　短歌を楽しむ (1)

（次の文章は、和歌と短歌について解説したものである。）

一般に、明治三十年代を境にして、それ以前の作品を和歌と呼んでいます。従って、和歌の時代は『万葉集』の頃から明治中期まで千二百年以上も続いたことになります。それに対して、短歌は明治三十年代から現在まで、まだ百年と少しの歴史しかありません。

では、明治三十年代に和歌はどんなふうにして短歌へと変わったのでしょうか。その経緯について簡単に解説してみましょう。

明治の中頃まで、和歌と言えば『古今和歌集』や『新古今和歌集』の作品と直結した、完全に①様式化された表現形態と見なされていました。平安時代の貴族社会の美意識がそのまま明治にも残っていたわけです。

たとえば、満開の桜の花をうたおうとする場合でも、目の前の桜の花をただ描写すればよい、というわけにはいきませんでした。「桜」と聞いただけで、『古今和歌集』（九〇五年成立）の紀貫之の桜の歌や、『新古今和歌集』（一二〇五年成立）の藤原定家の桜の歌をただちに思い浮かべねばなりません。さらにそこに『源氏物語』などの王朝文学の情緒も取り入れて……と、膨大な予備知識が要求されます。

それらをすべて下敷きにした上で、眼前の桜をうたわなければなりませんでした。だから和歌一首作るのにも本当に骨の折れることでした。こうなると、趣味や教養の範囲を超えて、もう学問の領域と言ったほうがよいでしょう。

②現に、当時は歌塾と呼ばれる一種の専門学校のような機関がありました。『たけくらべ』『にごりえ』などの小説で知られる女流作家樋口一葉も、歌塾で和歌を学んでいた一人でした。歌塾「萩の舎」の優等生であった一葉が遺した和歌を読んでみますと、

A　また更にあふべき夜半のあるものをなど死ぬばかりつらき別ぞ　（別恋）

などの作品があります。

歌の意味は〈またお会いできる夜もあるでしょうに、このお別れはなぜ死ぬほどつらく思われるのでしょうか〉。

この歌をどう思いますか。恋する気持ちをしっとりとうたってはいますが、どうも型にはまりすぎた印象を受けませんか。様式をはみ出さないように、という配慮ばかりが先立って、いまひとつ実感がこもっていない気がします。小説では複雑な女ごころをあれほど見事に書き表わした一葉なのに、なぜ和歌に対しては自分の心情をさらけ出せなかったのか、不思議なくらいです。

（中略）

歌塾では、たとえば「別恋」という題を塾生に与えて、彼らが王朝和歌や物語文学の情感をいかに巧みに和歌に反映できるかを競わせたのでした。そういう背景があったために、一葉に限らず、和歌の時代にはこうした没個性的な作品が好しとされたのでした。

（栗木京子『短歌を楽しむ』岩波書店　による）

確認テスト 本文を読んで、問いに答えなさい。

(1) ――線①「様式化された表現形態」とはどのような表現形態か。適当なものを選びなさい。

ア 形式や方法が近代的で、洗練された表現形態。
イ 形式や方法が多種多様で、個性的である表現形態。
ウ 形式や方法が決まりきっていて、型にはまった表現形態。

〔　　〕

(2) ――線②「現に、……ありました」とあるが、明治時代の歌塾の存在を通して、筆者は何を示そうとしているのか。適当なものを選びなさい。

ア 歌塾と呼ばれる機関があるほど、和歌が趣味として人々に広く親しまれていたということ。
イ 歌塾と呼ばれる機関があるほど、和歌を作るためにはたくさんの知識が必要だったということ。
ウ 和歌の世界は貴族社会と結びついていて、歌塾のように一般社会とかけ離(はな)れたものだったということ。

〔　　〕

(3) Aの歌に対する筆者の評価として、適当なものを選びなさい。

ア 恋する気持ちがしっとりとうたわれており、一葉の心情を見事にさらけ出した歌である。
イ 様式を守ろうとしすぎたために、一葉自身の実感がこもっていないように感じられる。
ウ 古典文学の情感が巧みに反映され、一葉らしい個性的な作品であるといえる。

〔　　〕

鑑賞文　短歌を楽しむ (2)

　しかし、明治の文明開化が進み、近代化の波は詩歌の世界にも次第に押し寄せてきます。そんな明治二十年代から三十年代にかけて、与謝野鉄幹や正岡子規が和歌革新運動の旗を掲げて活動を始めます。

　与謝野鉄幹は、明治二十九（一八九六）年刊行の詩歌集『東西南北』の序文で「小生の詩は、即ち小生の詩に御座候ふ」（私の詩や歌は、すなわち私のものです）と書き記しました。現代の私たちから見ると全く当然の宣言なのですが、伝統と形式でがんじがらめになっていた当時のことを考えると、①これがいかに画期的な決意であったか、わかってもらえると思います。

　春の桜をうたい、秋の名月をうたい、若々しい恋をうたう。そういった場面場面で、もう旧来の和歌の教養に縛られることなく、自分だけの率直な思いを表現することに全エネルギーをかけようとしたのです。

　正岡子規も同様に、新しい時代には発想の転換が必要である、と考えた人物でした。子規の斬新なところは、これまでの和歌では高尚なものしかうたわれる対象にならなかったのに対して、身の回りのどんなささやかなものでもうたってしまおう、と挑戦したことでした。

B　人皆の箱根伊香保と遊ぶ日を庵にこもりて蠅殺すわれは

正岡子規『竹の里歌』

　歌の意味は〈人々が皆、箱根や伊香保へ遊びに行く日も、私は粗末な家に籠って蠅を殺しています〉。

　蠅などという可愛気のない虫が出てきますし、しかもその蠅を「殺す」とうたっているのですから、美的表現とは程遠い歌です。

　子規は三十六歳で亡くなっていますが、亡くなる前の数年間は脊椎カリエスのため寝たきりの生活を送っていました。病床の限られた空間だけが自分の宇宙だった子規には、蠅を叩き殺すことも日々の大切な日課だったのかもしれません。

　絵空事の恋や花鳥風月をうたうよりも、蠅の歌の方がずっと自分らしい歌になっている。②きっと子規は誇りを持って蠅の歌を作ったのだろうと思います。

（中略）正岡子規たちの革新運動のお陰で、和歌はずいぶん日常的で親しみやすいものになりました。和歌から短歌への変化は、肩の凝るよそ行きの衣服を脱いで、お気に入りの普段着に着替えるような開放感、と言ってよいでしょう。また、開放的ではあるけれど、短歌には定型という決まりがあるため、適度の緊張感があります。普段着だけれどルーズになりすぎないのですね。そのことも、短歌で日々の思いを表わすときの安心感に繋がっています。

（栗木京子『短歌を楽しむ』岩波書店　による）

確認テスト

本文を読んで、問いに答えなさい。

(1) ——線①「これがいかに……思います」とあるが、与謝野鉄幹の宣言は何が画期的だったのか。適当なものを選びなさい。

ア 詩歌が伝統と形式で縛られたものだった時代に、旧来のものに縛られずに自分の率直な心情を表現しようとしたこと。

イ 現代から見ると当然の宣言のように見えても、明治時代の当時にあっては意図が伝わらない難解なものだったこと。

ウ 春の桜や秋の名月、若々しい恋といった、旧来の伝統的な和歌でうたわれた場面を詩歌にしないと宣言したこと。

〔　　〕

(2) **B**の歌に対する筆者の評価として、適当でないものを選びなさい。

ア 旧来の和歌では対象となることがなかった、身の回りのささやかなものをうたったことが斬新である。

イ 美的表現とは程遠い内容であり、高尚なものばかりうたっていた旧来の和歌にはないものである。

ウ 新しい時代の和歌にふさわしく、自分の日常を離（はな）れた世界の出来事を表現しようとしている。

〔　　〕

(3) ——線②「きっと子規は……思います」とあるが、筆者はなぜこのように考えるのか。適当なものを選びなさい。

ア 和歌革新運動を起こしていた子規にとって、蠅の歌は旧来の和歌になかったものを無理に歌にしたものだから。

イ 病床で過ごしていた子規にとって、蠅の歌は自分の過ごす日々や思いが表現された自分らしい歌だから。

ウ 明治時代に生きた子規にとって、蠅の歌は近代化された日本の風景が描写（びょうしゃ）された新しい時代の歌だったから。

〔　　〕

鑑賞文　短歌を楽しむ (3)

和歌と短歌の違いがわかったところで、では、最近の短歌作品の中から、普段着の思いをのびのびとうたっている歌を紹介してみましょう。

C なんでもない会話なんでもない笑顔なんでもないからふるさとが好き

俵万智『サラダ記念日』

「なんでもない」が三回も出てきます。普通は「なんでもない○○」と表わすと、いかにも何の価値もないような投げやりな調子になってしまいますが、この歌の場合は違っています。

作者は「なんでもない」ことの中に大きな意味を見出しています。ふるさとに住んでいた頃には気が付かなかった、方言のあたたかさや町の人たちのやさしさ。風のさわやかさや陽ざしのやわらかさ。久しぶりに帰郷してみると、そんな自然体のふるさとのすばらしさが身に沁みて感じられたのでしょう。

「なんでもない」が一回、二回、三回と繰り返されるごとに、「なんでもない」の値打ちがぐんぐん上がっていきます。声高に「ここがいいでしょう」と主張するよりも、もっとしっくりと読者の心に訴えかけてくる力があります。

作者の俵万智は、一九八七（昭和六二）年に歌集『サラダ記念日』を出版しました。この歌集は三百万部を超えるベストセラーとなり、大きなブームを巻き起こしました。俵万智の短歌が人気を呼んだ理由はいくつもあるでしょうが、そのうちの一つに、口語会話体（いつも私たちが使っている話し言葉）を自在に短歌に導入したことがあげられると思います。

（中略）

D 「寒いね」と話しかければ「寒いね」と答える人のいるあたたかさ

『サラダ記念日』

「」付きの会話体をとても自然に短歌に持ち込んでいます。この歌も、どこにでもある何でもない生活の一コマがうたわれています。一人でいると心底寒いのだけれど、作者には「寒いね」と話しかけると「寒いね」と答えてくれる人がいます。相手は肉親なのか友人なのか恋人なのか、それはここでは明かされていません。二人の関係が明示されていないことも、この場合かえって歌にふくらみをもたらしています。

相手を限定しないことによって、読者の中でいろいろな場面が自由に想像できます。恋人でも友人でも、それは誰でもいい。誰でもいいから言葉のキャッチボールのできる人が側にいてくれる。そのことが作者にはうれしいのです。「寒いね」で始まった一首が、最後には「あたたかさ」という逆転でうたい収められる心情の流れが、じつにスムーズに納得できます。

（栗木京子『短歌を楽しむ』岩波書店　による）

確認テスト 本文を読んで、問いに答えなさい。

(1) **C**の歌に対する筆者の評価として、適当でないものを選びなさい。

ア 「なんでもない」が繰り返されるごとに、「なんでもない」ことのすばらしさがより感じられる。

イ かつては気が付かなかった、自然体のふるさとのすばらしさがうたわれている。

ウ 何の価値もないことのなかにも、あえて価値を見出すべきだという作者の主張が伝わってくる。

〔　　〕

(2) **D**の歌に対する筆者の評価として、適当でないものを選びなさい。

ア 会話体を自然に用いて、どこにでもある何でもない生活の一コマがうたわれている。

イ 関係が明示されないことで、その場にたくさんの人がいるかのように感じられる。

ウ 会話ができる誰かが側にいてくれることへのよろこびが表現されている。

〔　　〕

(3) ――線部「『寒いね』で始まった……心情の流れ」とあるが、ここで説明されている心情の流れとして適当なものを選びなさい。

ア 「寒いね」から始まるのに、その言葉に答えてくれる誰かがいることに「あたたかさ」を感じたという心の動き。

イ 相手を限定した発言ではないのに、それに答えてくれる人がいることで関係が深まるという心の動き。

ウ 場面が自由に想像できるのに、「寒いね」と答えてくれるということから歌の場面が明示される心の動き。

〔　　〕

生物多様性「私」から考える進化・遺伝・生態系 (1)

　生物は多様です。多様とは、いろいろ異なったものがいるということです。イヌ・ネコ・ネズミ……と違った種が、なんと一九〇万もいるのです。種が違えば異なっているのは当然ですが、違いはそれだけではありません。同じヒトという種の中にも、個人差・男女差・大人と子ども・人種の違いなど、さまざまな多様さが見られます。さらに、同じ親から生まれた兄弟や姉妹の間でも、きわめてよく似てはいるのですが、それなりの違いが見られます。結局、生物の個体というものは、他の個体と異なっているのが原則なのです。

　地球上に、この私とまったく同じヒトはいません。過去にも未来にもいないでしょう。これはすごいことです。私は唯一、かけがえのない一人なのです。そしてそこらあたりにいる生物たちもみな、かけがえのない一匹なのです。だからこそ、異なった一人ひとり一匹一ぴきを大切にしなければなりません。まずこのことを確認しておきたいのです。

　このように、生物においては、兄弟の間でも、同種の中でも、そしてもちろん異種の間でも、どれをとっても多様性が見られます。多様なものそれぞれの中に、さらに多様なものが入れ子になっています。そうだからこそ生物の多様性がものすごく高くなるのです。では、①なぜそんなに多様性が高いのでしょうか？

　各生物は②自己の生きているそれぞれの環境に適応するものです。そして環境は多様です。多様な環境に適応して生物の方も多様になりました。適応とは、生物が、生存と繁殖に適した形態や生活様式をもっていることを言います。言い換えれば、その環境に適応しているとは、その環境において生き残って子孫をたくさん増やせるということです。

　環境はさまざまです。地球には熱帯から寒帯まで、いろいろな温度環境がありますし、生物が生きていくには水が必要ですが、水環境も、極端に乾燥した砂漠から、まわりが水だらけの湖や海までさまざまです。

　一本の木だって多様な環境を提供します。根っこのまわり、幹のなか、葉っぱの上では、環境が異なります。③葉と言っても、梢の先端の葉と根元の葉では環境は違うでしょう。葉の表と裏でも大違いです。木は丈が高く枝も茂り、さまざまな生息環境を動物に提供します。葉が茂っているので隠れやすく、幹の中に潜り込んで隠れることもできます。安全な住みかとなるのです。そして木は長命ですから住みかとして安定しています。つまり木は安全で安定したたくさんの住みかを提供してくれるのですが、その上、葉、果実、蜜、花粉、樹液と、さまざまな形の食物をも提供してくれます。そこで一本の木には多くの動物が住むことになり、だからこそ④植物の種数より動物の種数がずっと多くなるのです。一本の木でもそうなのです。木にはさまざまな種類がありますから、それらを利用する動物もものすごくたくさん出てくることになります。

（本川達雄『生物多様性　「私」から考える進化・遺伝・生態系』中央公論新社　による）

確認テスト　本文を読んで、問いに答えなさい。

(1) ――線①「なぜそんなに多様性が高いのでしょうか」とあるが、この問いに対する答えとして適当なものを選びなさい。

ア 種が同じ生物は個体同士に違いはないが、種が異なればさまざまな違いがあるから。
イ 多様な環境があり、それぞれの環境に適応することで生物の多様性が高まったから。
ウ 地球上に生きる生物は、どれをとってもかけがえのない大切なものだから。

〔　　〕

(2) ――線②「自己の生きているそれぞれの環境に適応する」とはどういうことか。適当なものを選びなさい。

ア 生物が、生きているそれぞれの環境における生存と繁殖に適した形態や生活様式をもつこと。
イ 地球上のさまざまな環境に、温度や水の有無(うむ)などの点で多様性があること。
ウ 生物の多様性によって、生物が生きている地球上の環境が多様に変化していくこと。

〔　　〕

(3) ――線③「葉と言っても、梢の先端の葉と根元の葉では環境は違うでしょう」とあるが、この文について正しく述べたものを選びなさい。

ア 梢の先端の葉と根元の葉について取り上げ、植物の葉が環境に適応するしくみを具体的に述べている。
イ 木のさまざまな場所に葉があることを挙げて、木は隠れやすく安全な住みかであることを強調している。
ウ 同じ葉でも、葉のある位置によって環境が異なることを指摘(してき)し、木が多様な環境を提供していることを示している。

〔　　〕

(4) ――線④「植物の種数より動物の種数がずっと多くなる」のはなぜか。適当なものを選びなさい。

ア 植物は動物の食物となるので、同じ環境の中では、植物は動物に比べて安定して生息することが難しいから。
イ 植物である木は多様な環境や食物を提供するので、一種の木に適応した複数の種の動物がいることになるから。
ウ 植物の同じ種の間では違いがなく、多様性が見られないが、動物は同じ種の中にもさまざまな違いがあるから。

〔　　〕

生物多様性「私」から考える進化・遺伝・生態系 (2)

（次の文章は、生物の多様性について説明したものです。）

【もちろん環境がいろいろあると言っても、どの環境にも生物が住めるわけではありません。水がまったくなければ生物は住めませんし、極端に高い温度や低い温度環境にも住めません。生物が利用できる環境は限られています。環境の種類に限りがあるなら、それらに適応した生物の種の数にも限りが出てくるだろうということになりそうですが、そう簡単にいかないところが生物の生物たるところです。】

生物は、生息可能な場所を拡大してきた歴史をもっています。その代表例が生物の陸上への進出でしょう。①生物はもともと海にだけ住んでいました。陸に住めなかった理由の一つは水です。生物の体は大量の水を含んでいるのですが、陸上では水を手に入れるのが難しい上に、（まわりが乾いた空気ですから）体からどんどん水分が空中へと失われて、すぐに干からびてしまい、陸上では生きていけなかったのです。もう一つの理由は強い紫外線です。紫外線は殺菌灯に使われることからもわかるように、きわめて有害です。遺伝物質であるＤＮＡが紫外線で傷つくのです。ところがシアノバクテリア（ラン藻）が海中でさかんに光合成して酸素を放出したことにより、大気中にオゾンの層が形成され、それが紫外線を吸収してくれるようになりました。つまり生物の活動により環境が変化し、陸上も生息可能な環境に組み入れられたことになります。そして、乾燥しにくい体を進化させた生物たちが上陸してきました。おかげで今見るような多様な陸上の生物たちの世界が展開されてきたのです。②生物は環境をも変えてさまざまな生息可能な環境をつくり出し、その新しくできた環境に適応した新たな種を進化させることにより、生物多様性を高めてきました。生物は進化の歴史をもっており、その中でどんどん多様性が高まっていったのです。

（本川達雄『生物多様性「私」から考える進化・遺伝・生態系』中央公論新社 による）

確認テスト 本文を読んで、問いに答えなさい。

(1) 【 】の箇所について正しく述べたものを選びなさい。

ア 生物の住む環境には、水の有無や温度などの条件があることを指摘し、環境の種類には限りがあり、それに適応した生物の種の数にも限りがあるのだということを強調している。

イ 生物の住む環境についての具体的な例を挙げたうえで、生物の住む環境の種類と、生物の種の数との間には何の関係性もないということを主張しようとしている。

ウ 生物の住む環境の種類に限りがあるなら、種の数にも限りがあるのではないかという意見を想定したうえで、生物が環境をも変え、多様性を高めてきたという内容を導こうとしている。

〔 〕

(2) ——線①「生物はもともと海にだけ住んでいました」とあるが、なぜ生物は陸に住むことができなかったのか。適当なものを全て選びなさい。

ア 陸上は生物の活動では環境が変化しづらい場所だったから。

イ 陸上は生物に必要な水が手に入りづらい場所だったから。

ウ 陸上は生物に有害な紫外線が多い場所だったから。

〔 〕

(3) ——線②「生物は環境をも……高めてきました」とあるが、本文中で、次の各文の具体例として挙げられているものをそれぞれ選び、記号で答えなさい。

A 生物は環境をも変えてさまざまな生息可能な環境をつくり出してきた。

B 生物は、新しく生息可能な環境ができると、その環境に適応した新たな種を進化させ、生物多様性を高めてきた。

ア 陸上は生物にとって生息可能な場所ではなく、生物は海にだけ住んでいた。

イ シアノバクテリアの光合成によってオゾン層が形成され、陸上は生物が生息可能な環境になった。

ウ 生息可能となった陸上に乾燥しにくい体を進化させた生物たちが上陸し、多様な陸上の生物が生まれた。

エ 生物は進化の歴史をもっており、歴史の中で多様性が高まっていった。

A〔 〕

B〔 〕

日本人にとって美しさとは何か（1）

だいぶ以前に、農学専門のある先生から①興味深い話を聞いたことがある。

その先生が留学していた頃、アメリカで人間の動物観を研究するというプロジェクトがあった。そのやり方は、例えば「一番美しい動物は何か」といったような質問を並べてアンケート調査を重ね、その答えが年齢、性別、職業、宗教、民族などでどのように違うか調べるのだという。

このことを聞いて、それは面白そうだから日本でも同じような調査をしようという話になった。うまく行けば日米比較文化論になるかもしれない。というわけでさっそく試みたのだが、これがどうもうまく行かない。アメリカでなら「一番美しい動物は」ときけば、すぐ「馬」とか「ライオン」とか、何か答えが返って来る。ところが同じ質問を日本人にすると、「さあ、何だろうな」とはなはだ歯切れが悪い。そこを無理に、何でも一番美しいと思うものを挙げてほしいと言うと、②「そうだなあ、夕焼けの空に小鳥たちがぱあっと飛び立っているところかな」といったような答えになる。「これでは比較は無理だから、結局諦めました」とその先生は苦笑していた。

私がこの話を聞いて興味深いと思ったのは、それが動物観の差異以上に、日本人とアメリカ人の美意識の違いをよく示すものと思われたからである。

アメリカも含めて、西欧世界においては、古代ギリシャ以来、「美」はある明確な秩序を持ったもののなかに表現されるという考え方が強い。その秩序とは、※左右相称性であったり、部分と全体との比例関係であったり、あるいは※基本的な幾何学形態との類縁性など、内容はさまざまであるが、いずれにしても③客観的な原理に基づく秩序が美を生み出すという点においては一貫している。逆に言えば、そのような原理に基づいて作品を制作すれば、それは「美」を表現したものとなる。

典型的な例は、現在でもしばしば話題となる八頭身の美学であろう。人間の頭部と身長が一対八の比例関係にあるとき最も美しいという考え方は、紀元前四世紀のギリシャにおいて成立した美の原理である。ギリシャ人たちは、このような原理を「カノン（規準）」と呼んだ。

（中略）

だがこのような実体物として美を捉えるという考え方は、日本人の美意識のなかではそれほど大きな場所を占めているようには思われない。日本人は、遠い昔から、何が美であるかということよりも、むしろどのような場合に美が生まれるかということにその感性を働かせて来たようである。それは「実体の美」に対して、「状況の美」とでも呼んだらよいであろうか。

（高階秀爾『日本人にとって美しさとは何か』筑摩書房　による）

※左右相称性…左右の対応するものが、つりあうように均等に配置されていること。
基本的な～類縁性…ここでは、形やありかたが、基本的な図形などに似通っていること。

確認テスト　本文を読んで、問いに答えなさい。

(1)　――線①「興味深い話」とあるが、何が興味深いのか。最も適当なものを選びなさい。

ア　アンケート調査の話が、日本とアメリカの動物に対する考え方の違いを明らかにするものであること。
イ　アンケート調査は日米比較文化論になるはずだったのに、調査がうまくいかず失敗に終わってしまったこと。
ウ　アンケート調査で得られた答えに、日本人とアメリカ人の美に関する捉え方の違いが表れていたこと。

〔　　〕

(2)　――線②「『そうだなあ、……答えになる」とあるが、ここからどのようなことが考えられるか。適当なものを選びなさい。

ア　日本人は、「美」とはある客観的な原理に基づく秩序から生み出されるものだと考えているということ。
イ　日本人が「美」を考えるときは、どのような状況で「美」が生じるか、ということに感性が働くということ。
ウ　日本人にとっての「美」は明確なものではなく、何がどのような場合に「美」が生まれるかは意識されないということ。

〔　　〕

(3)　――線③「客観的な原理に基づく秩序が美を生み出す」とあるが、本文中の八頭身の美学の例において、客観的な原理とは何か。適当なものを選びなさい。

ア　頭部と身長が一対八の比例関係にあること。
イ　八頭身の美学がギリシャにおいて成立したこと。
ウ　紀元前の美の原理が現在まで伝わっていること。

〔　　〕

日本人にとって美しさとは何か (2)

例えば、「古池や蛙飛びこむ水の音」という一句は、「古池」や「蛙」が美しいと言っているわけではなく、もちろん「水の音」が※妙音だと主張しているのでもない。ただ古い池に蛙が飛びこんだその一瞬、そこに生じる緊張感を孕んだ深い静寂の世界に芭蕉はそれまでにない新しい美を見出した。そこには何の実体物もなく、あるのはただ状況だけなのである。

日本人の①このような美意識を最もよく示す例の一つは、「春は曙、やうやうしろくなりゆく山ぎはすこしあかりて……」という文章で知られる『枕草子』冒頭の段であろう。これは春夏秋冬それぞれの季節の最も美しい姿を鋭敏な感覚で捉えた、いわば模範的な「状況の美」の世界である。すなわち春ならば夜明け、夏は夜、そして秋は夕暮というわけだが、その秋について、清少納言は次のように述べている。

> 秋は夕暮。夕日のさして山の端いと近うなりたるに、烏の寝どころへ行くとて、三つ四つ二つ三つなど、飛びいそぐさへあはれなり。まいて雁などのつらねたるがいとちひさく見ゆるは、いとをかし……。

これはまさしく「夕焼けの空に小鳥たちがぱあっと飛び立っているところ」というあの現代人の美意識にそのままつながる感覚と言ってよいであろう。日本人の感性は、千年の時を隔ててもなお変わらずに生き続けている。

「実体の美」は、そのもの自体が美を表わしているのだから、状況がどう変わろうと、いつでも、どこでも「美」であり得る。《ミロのヴィーナス》は、紀元前一世紀にギリシャの植民地であった地中海のある島で造られたが、二一世紀の今日、パリのルーヴル美術館に並べられていてもその美しさに変わりはない。②仮に砂漠のなかにぽつんと置かれても、同じように「美」を主張するであろう。だが「状況の美」は、状況が変われば当然消えてしまう。春の曙や秋の夕暮れの美しさは、長くは続かない。状況の美に敏感に反応する日本人は、それゆえにまた、美とは※万古不易のものではなく、うつろいやすいもの、はかないものという感覚を育てて来た。うつろいやすいものであるがゆえに、いっそう貴重で、いっそう愛すべきものという感覚である。③日本人が、春の花見、秋の月見などの季節ごとの美の鑑賞を、年中行事として特に好んで今でも繰り返しているのも、そのためであろう。

実際、清少納言が的確に見抜いたように、日本人にとっての美とは、季節の移り変わりや時間の流れなど、自然の営みと密接に結びついている。

（高階秀爾『日本人にとって美しさとは何か』筑摩書房　による）

※妙音…非常に美しい音。　万古不易…いつまでも変わらないこと。

確認テスト

本文を読んで、問いに答えなさい。

(1) ——線①「このような美意識」とはどのようなものか。適当なものを選びなさい。

ア「美」はそれまであったものにではなく、常に新しいものに見出されるのだという意識。

イ「美」は、何らかの実体物を指すというよりも、ある状況に表れるのだという意識。

ウ「美」とは失われやすいものであり、緊張感をもって捉えなければならないという意識。

［　　］

(2) ——線②「仮に砂漠のなかに……主張するであろう」とあるが、これについて本文の内容に合うものを選びなさい。

ア「実体の美」はそのもの自体が美を表現しているので、砂漠のなかにあっても表現される「美」は変わらない。

イ「実体の美」は紀元前から今日まで続くものなので、砂漠のなかにあっても壊れにくいのだと考えられる。

ウ「実体の美」は西欧において生まれたものなので、砂漠のなかにあっても似つかわしいものだと感じられる。

［　　］

(3) ——線③「日本人が、……そのためであろう」とあるが、ここで筆者が述べようとしている内容として適当なものを選びなさい。

ア 日本人にとって美ははかないものであるため、繰り返される行事のように長く続くものを貴重だと感じる。

イ 春や秋は千年の昔から変わらず日本人に愛されるものであり、夏や冬よりも日本で好まれている。

ウ 季節ごとの美は長く続かないものであり、だからこそ貴重なものとして日本人に好まれている。

［　　］

ゴリラからの警告「人間社会、ここがおかしい」(1)

人間以外の動物にとって、生きることとは食べることである。しかし、それを実現するには、いつ、どこで、何を、だれと、どうやって食べるか、という五つの課題を乗り越えねばならない。現代の科学技術と流通革命は、その多くを個人の自由になるように解決してきた。24時間営業のコンビニエンスストアや自動販売機。車や飛行機などの輸送手段や、インターネットを利用した通信手段。電子レンジやファストフードなどの調理や保存の技術。これらは①私たちが、いつでも、どこでも、どんなものでも、好きなように食べることを可能にした。

しかし、技術によっては変えられない課題もある。それは、だれと食べるかということだ。

ふだん単独生活をしているクマやカモシカのような動物には、この課題は必要ない。なわばりをつくって他者の侵入を防いだり、他者と出会わないようにして餌資源を確保したりすればいいからだ。しかし、群れをつくる動物は常に②この問題に直面する。とりわけ複雑な社会生活を営む人間にとって、いっしょに食べる相手は重要である。もちろん、移動手段の革新によって、遠くに住む知人や親族に会うことができるようになった。だが、だれと食卓を囲むかは、昔も今も個人の自由裁量によっては決められない。

古来、人間の食事には、栄養の補給以外にも他者との関係の維持や調整という機能が付与されてきた。いやむしろ、他者といい関係をつくるために食事の場や調度、食器、メニュー、調理法、服装からマナーにいたるまで、多様な技術が考案されてきたといっても過言ではない。どの文化でも社交の場として食事を機能させるために、莫大な時間と金を消費してきたのである。それは③効率化とはむしろ逆行する特徴をもっている。

（山極寿一『ゴリラからの警告「人間社会、ここがおかしい」』毎日新聞出版 による）

確認テスト 本文を読んで、問いに答えなさい。

(1) ――線①「私たちが、いつでも、どこでも……可能にした」とあるが、これは何によってもたらされたか。本文中から十二字で探し、最初と最後の三字を答えなさい。

□□□～□□□

(2) ――線②「この問題」とは、どのような問題か。解答欄に当てはまる言葉を、本文中から七字で探し、書きぬきなさい。

□□□□□□□という問題。

(3) ――線③「効率化とはむしろ逆行する」例として、適当なものを選びなさい。

ア お客に食事をふるまう際には、美しい調度品や食器を使ってもてなす。

イ 輸送手段の発達によって、新鮮な食材がいつでも食べられるようになった。

ウ 家族同士でも生活のリズムが異なるので、各自が好きなときに食事をとる。

〔　　〕

(4) 本文の内容に合うものを選びなさい。

ア いつ、どこで、何を食べるかといった課題は、技術によっては変えることができないものである。

イ クマやカモシカのような動物でも、食事をいっしょにとる相手は常に問題となる。

ウ 移動手段の革新によって、だれと食卓を囲むかは個人の裁量で決められるようになった。

エ 人間の食事には、栄養を補給するほかに、他者との関係を維持・調整する働きがある。

〔　　〕

ゴリラからの警告「人間社会、ここがおかしい」(2)

サルの食事は人間とは正反対である。群れで暮らすサルたちは、食べるときは分散して、①なるべく仲間と顔を合わせないようにする。数や場所が限られている自然の食物を食べようとすると、どうしても仲間とはち合わせしてけんかになる。だから、仲間がすでに占有している場所は避けて、別の場所で食物を探そうとするのだ。でも、あまり広く分散すると、肉食動物や猛禽類にねらわれて命を落とすおそれが生じる。②仲間といれば外敵の発見効率が上がるし、自分がねらわれる確率が下がる。そこで、仲間と適当な距離を置いて食事をすることになる。

しかし、食物が限られていれば、仲間と出くわしてしまうことはある。そのときは、弱いほうのサルが食物から手を引っこめ、強いサルに場所を譲る。サルたちは互いにどちらが強いか弱いかをよくわきまえていて、その序列にしたがって行動する。③それに反するような行動をとると、周りのサルが寄ってたかってそれをとがめる。優劣の序列を守るように、勝者に味方するのである。

強いサルは食物を独占し、他のサルにそれを分けることはない。サルの社会では、食物を囲んで仲よく食事をする光景は決して見られない。でも、サルの基本的な食物は植物なので、強いサルに独占されたからといって食物に困るわけではない。ちょっと移動すれば、食べられるフルーツや葉っぱが見つかる。要するに、サル社会のルールは、食べるときはけんかしないように分散して個食をしましょう、そのためには弱いサルが広く分散しましょう、ということなのである。

（山極寿一『ゴリラからの警告「人間社会、ここがおかしい」』毎日新聞出版　による）

確認テスト 本文を読んで、問いに答えなさい。

(1) ——線①「なるべく仲間と顔を合わせないようにする」とあるが、このようなサルの食事の仕方を表す言葉を、本文中から二字で探し、書きぬきなさい。

(2) ——線②「仲間と……下がる」とあるが、このためサルはどのように行動するか。最も適当なものを選びなさい。

ア 仲間が占有している一か所に集まり、顔を合わせないようにして食事をする。

イ 仲間が占有している場所から遠く離れ、肉食動物や猛禽類がいない場所で食物を探す。

ウ 仲間が占有している場所は避けながらも、あまり広く分散しすぎないようにする。

(3) ——線③「それに反するような行動」の例として、適当なものを選びなさい。

ア 食料を探しているサルが、仲間と出くわしてしまう。

イ 弱いほうのサルが、強いサルに食物や場所を譲らない。

ウ 強いほうのサルが、他のサルに食物を分けず、独占する。

ゴリラからの警告「人間社会、ここがおかしい」⑶

けんかの種となるような食物を分け合い、仲よく向かい合って食べるなんて、サルから見たらとんでもない行為（こうい）である。①なぜこんなことに人間はわざわざ時間をかけるのだろうか。

それは、相手とじっくり向かい合い、気持ちを通じ合わせながら信頼（しんらい）関係を築くためであると私は思う。相手と競合しそうな食物をあえて間に置き、けんかをせずに平和な関係であることを前提にして、食べる行為を同調させることが大切なのだ。同じ物をいっしょに食べることによって、ともに生きようとする実感がわいてくる。それが信頼する気持ち、ともに歩もうとする気持ちを生みだすのだと思う。

ところが、前述した近年の技術はこの②人間的な食事の時間を短縮させ、個食を増加させて社会関係の構築を妨（さまた）げているように見える。自分の好きなものを好きな時間と場所で好きなように食べるには、むしろ相手がいないほうがいい。そう考える人が増えているのではないだろうか。

でも、それは私たちがこれまで食事によって育ててきた共感能力や連帯能力を低下させる。個人の利益だけを追求する気持ちが強まり、仲間と同調し、仲間のために何かしてあげたいという心が弱くなる。勝ち負けが気になり、勝ち馬に乗ろうとする傾向（けいこう）が強まって、自分に都合のいい仲間を求めるようになる。つまり、現代の私たちはサルの社会に似た閉鎖（へいさ）的な個人主義社会をつくろうとしているように見えるのだ。

（山極寿一『ゴリラからの警告「人間社会、ここがおかしい」』毎日新聞出版 による）

確認テスト　本文を読んで、問いに答えなさい。

(1) ――線①「なぜこんなことに人間はわざわざ時間をかけるのだろうか」とあるが、この問いの答えとなるように、解答欄に当てはまる言葉を本文中から書きぬきなさい。

相手と争うことのない平和な関係であることを前提に、相手と同じものを食べることで、

□□□□□□□ ため。

(2) ――線②「人間的な食事」とはどのような食事か。適当なものを選びなさい。

ア　相手と同じ物をいっしょに食べ、気持ちを通じ合わせる食事。
イ　技術の進歩によって、短時間でとれるようになった食事。
ウ　個人の自由を尊重し、各自が好きなものを食べる食事。

〔　　〕

(3) 人間は、他者と向かい合って食事をとることで何を身につけるか。本文中から九字で探し、書きぬきなさい。

□□□□□□□□□

(4) 本文の内容に合うものを選びなさい。

ア　近年の技術によって食事の時間が短くなったことは、かえって個人の自由を奪うことになった。
イ　近年の技術によって個食が増えたことは、社会的な関係の構築を妨げている。
ウ　近年の社会関係の変化によって、人々は利害を超えた仲間を求めるようになっている。
エ　近年の社会関係の変化を反省し、サルの社会に似た開かれた社会を目指すべきである。

〔　　〕

「今、ここ」から考える社会学（1）

①私は、毎日大学に向かう電車の中で、常に「驚いて」います。通勤通学ラッシュの中、大半の人が黙々とスマホ画面を眺め、指を忙しそうに滑らせています。私は、この光景を異様に感じ、見事な「※画一さ」にいつも驚いています。もちろんスマホがだめだなどと言っているのではありません。これもまた、私たちが普段「あたりまえ」に電車に乗るための重要な※実践知と言えるのです。ただ狭い車内で、自分の立ち位置を決めた瞬間、周囲の人への関心を一斉に遮断して〝スマホバリアー〟で守られた世界へ人々が没入していく姿は私にとって、いつも驚きなのです。

かつては、新聞を四つ折り、八つ折りにして顔を近づけ無心に読む姿や週刊漫画雑誌を丸めて読む姿が中心でした。②新聞や雑誌を読む姿とスマホに没入する姿は同じなのでしょうか。それともまったく異質な日常を生きる私たちの姿ができあがっているのでしょうか。同じように見える混んだ車内の光景ですが、私はこの二つはかなり意味が異なっていると考えます。

新聞や雑誌は、確かに私たちはそれを読みたいから読むのですが、見方を変えれば、これらは、身体が触れあうぐらい混んだ狭い車内で、お互いが儀礼的に距離をとり、特別な興味や関心がないことを示し、相手に対して距離を保っていることを示す重要な道具と言えます。新聞や雑誌を読んでいても、周囲の音や隣の人の姿勢や動きなど細かい状況はわかるでしょう。その意味でこうした道具は、それに目を落としていたとしても、常に周囲の他者の気配は感じ取れるし、私たちは常に周囲に気を配っているとも言えるのです。つまり、③新聞や雑誌は、自分の周囲に〝バリアー〟を張る道具ではなく、周囲の他者とつながるための道具なのです。

他方、私たちはスマホを通して、混んだ車内でもそこにいない他者と交信したりゲームを楽しんでいます。いわばスマホは、「今、ここ」で全く異質な※リアリティへ瞬時に※跳躍できる驚きのメディアなのです。さらにスマホは、新聞や雑誌に比べ、小型軽量であり、周囲に迷惑もかけずに私たちは「混んだ車内」で操作ができます。イヤホンやヘッドホンをし、周囲からの音をさえぎり、視線をスマホの画面に集中させるとき、私たちの心や関心は「今、ここ」にはないのです。端的に言えば、スマホは、それを使って多様なリアリティを自在に移動できるとしても、新聞や雑誌のように「今、ここ」で儀礼的に周囲に無関心を示したり、距離をとるための道具ではないのです。

混んだ車内の二つの光景。一つは、新聞や雑誌を読みながらも、常に周囲の他者に対して儀礼的に無関心を示し、身体が密着しているとしても、そこに安心な距離があることを示しあう秩序が「今、ここ」で作られ維持されている空間です。そして今一つは、それぞれがスマホに没入することで「今、ここ」に居ながらも、個別のリアリティの跳躍を楽しんでいる空間です。

（好井裕明『「今、ここ」から考える社会学』筑摩書房　第2章による。
一部省略した箇所がある）

※画一…一様にそろっていること。すべてが同じようであること。
実践知…実践的な知識。ここでは、日常生活の中でものごとに対処し、暮らしていくための知識。
リアリティ…現実・現実感。　跳躍…とびあがること。

確認テスト　本文を読んで、問いに答えなさい。

(1) ——線①「私は、毎日……『驚いて』います」とあるが、筆者は何に驚いているのか。適当なものを選びなさい。

ア 狭い車内で大半の人々がスマホの画面に指を滑らせているなど、現代社会が忙しくなったこと。
イ 皆(みな)が黙々とスマホを使うほど、電車が混みあうのをあたりまえのことのように感じていること。
ウ 通勤通学ラッシュの中、車内の多くの人々がスマホの画面を眺め、周囲に対して無関心になること。

〔　　〕

(2) ——線②「新聞や雑誌を読む姿とスマホに没入する姿は同じなのでしょうか」とあるが、この問いに対する筆者の答えとして、適当なものを選びなさい。

ア 読みたいから読むものであるか、義務的に他者と交信するために眺めるものであるか、という点で異なっている。
イ 周囲に儀礼的に無関心を装(よそお)うものであるか、周囲への関心が遮断されるものであるか、という点で異なっている。
ウ 狭い車内で迷惑をかけてしまうものか、周囲に迷惑をかけないものであるか、という点で異なっている。

〔　　〕

(3) ——線③「新聞や雑誌は、……道具なのです」とあるが、周囲の他者とつながるための道具であるとはどういうことか。最も適当なものを選びなさい。

ア 新聞や雑誌は相手との距離を保っていることを示す道具であるという点で、周囲に気を配るためのものだということ。
イ 新聞や雑誌は自分の関心があるものごとを知るための道具で、世界について学ぶためのものだということ。
ウ 新聞や雑誌は儀礼的に距離をとるための道具で、個別のリアリティに跳躍するものだということ。

〔　　〕

「今、ここ」から考える社会学 (2)

（筆者は、スマートフォンが日常のあり方を大きく変え、私たちがスマホに〝飼い慣らされて〟しまっていると考えている。）

片手に収まる※端末としてのスマホ。それは画像や動画も撮れるし、鮮明な映像もみることができるし、もちろん電話の機能も備えています。すでにコンピュータの端末以上の機能を持っています。こうした道具を手にしてまさに一日中何らかの形で操作をすることで、私たちは「今、ここ」で、目の前にいるあなたとだけ出会えるのではなく、瞬時のうちに、①「今、ここ」を超越し、多様な現実とつながることができます。スマホを使いこなす日常で、私たちはいったい何を手にして、何が脅かされているのでしょうか。それは②端的に言って、「世界」を携帯する※悦楽であり、その裏返しとして「わたし」が不特定多数の匿名の人々にさらされる※リスクだと私は考えています。

コンピュータが開発されインターネット社会が登場してずいぶん時間がたっています。私はノートパソコンでこの原稿を書いていますが、少し前であれば、デスクトップのパソコンを前にしてキーボードを叩いていたはずです。原稿を書いて少しくたびれれば、ワードを閉じて、メールが届いていないか確認したり、ネットを開けてさまざまな情報にアクセスしたりします。ただこうした営みは、まさに「机を前にして」私がやっていることなのです。でも今は、「机を前に」する必要もないし、「ノートパソコンを膝の上に置く」必要もなく、ただ手のひらに収まっているスマホに指を滑らせることで、いつでもどこででも「世界」を自分の前に開くことができるのです。③デスクトップからスマホへ。これは単なる道具の技術革新だけではないのです。「机の前に座ったり」「部屋にこもったり」「何インチかの画面に集中したり」など、まさにネットへ私たちが向きあうためだけに一定の手続きや姿勢の変更、意識の変更が必要だったのが、そうした身体的動作や日常的な意識の変更をせずに、いつでも私たちは「世界」と向きあえるようになりました。このことが、日常生きていくうえで決定的な生活の「革新」をもたらしたと考えます。

なにか特別な手続きや意識の変化など一切不要で、いつでもどこででもネット「世界」を開き、自分自身をそこで遊ばせることができるとすれば、これはこのうえもない刺激や興奮をもたらす、※えもいえぬ悦楽ではないでしょうか。

（好井裕明『「今、ここ」から考える社会学』筑摩書房　第3章による）

※端末…端末装置。通信ネットワークに接続する際に利用者が直接操作する機器。
悦楽…よろこび楽しむこと。　リスク…危険、危険性。
えもいえぬ…言いようもない、言葉で言い表せない。

確認テスト　本文を読んで、問いに答えなさい。

(1) ——線①「『今、ここ』を超越し、多様な現実とつながる」の例として、適当でないものを選びなさい。

ア 目の前の人々と会話し、その人たちの考えを理解する。
イ インターネット上で、遠くにいる友人と交信する。
ウ スマホを通じて、今、海外で発生している事件を知る。

〔　　〕

(2) ——線②「端的に言って」が表す意味として適当なものを選びなさい。

ア 言葉をにごして言うと
イ 細部までこまかく言うと
ウ 要点だけをはっきりと言うと

〔　　〕

(3) ——線③「デスクトップからスマホへ」とあるが、デスクトップからスマホへの変化によってどうなったのか。本文の内容に合うものを選びなさい。

ア インターネットの世界に向きあうための動作や、意識の変更が不要になり、いつでもどこでもネットの世界を開くことができるようになった。
イ インターネットの世界は仕事をするためのものであったのに、ネットの世界は遊ぶためのものになり、刺激や興奮が求められるようになった。
ウ インターネットの世界にはパソコンでアクセスするしかなかったが、現在ではパソコンを使ってネットの世界を開くことはなくなった。

〔　　〕

「今、ここ」から考える社会学 (3)

（筆者は、スマホが日常に「穴」をあけ、そこから大量の情報が流れ込むようになったと述べている。）

確かに、あらゆる情報を瞬時のうちに確認したり手に入れたりできることは、すごいことかもしれません。しかしスマホを身体の一部にしていながらも、私たちは「穴」という「穴」から入ってくる情報の真偽や背景、根拠などの「意味」を同じく瞬時のうちに判断し、情報を取捨選択できる力と技量を備えているのでしょうか。またそうした力と技量が私たちのなかで育ってきているのでしょうか。言い換えれば、①玉石混交の情報の襲撃に対して、うろたえることなく冷静に向きあうことができるような②情報への〝耐性〟を私たちは、いま十分に身につけてきているでしょうか。

本章の冒頭に、私たちはいまスマホに〝飼い慣らされて〟いると書きました。これは私の実感から出てきた表現なのですが。スマホを飼い慣らすのではなく、スマホに飼い慣らされているとすれば、まさに、それこそ、情報への〝耐性〟を身につけておらず、スマホからあふれ出る情報に翻弄されている私たちの現在の姿ではないでしょうか。

③では、いかにしたら、情報への〝耐性〟を考え、自分なりに身につけていくことができるのでしょうか。

終日スマホとつきあうなかで、とりたてて目的もなく、ただ退屈をまぎらせるためにだけスマホに指を滑らせている自分の姿をいま一度確認してみてください。必要のない時間はスマホを切り、本を読んだり、別の営みをして、自らの情報をめぐるリテラシー（情報の質や意味を的確に判断できる能力）を高めていく、あるいはスマホを切り、いったん情報への依存を停止したうえで、自分の頭で、それまで自分が得てきた実践的な知だけを手がかりにして、いろいろなことについて思索する余裕を持つようにする、等々情報への〝耐性〟を養う試みは思い浮かびます。まずは、本書を読んでいるあなた自身がスマホからいったん距離をとって、日常を生きている自分の姿を考え直すことが第一なのです。

（好井裕明『「今、ここ」から考える社会学』筑摩書房　第3章による）

確認テスト 本文を読んで、問いに答えなさい。

(1) ——線①「玉石混交（玉石混淆）」の意味を選びなさい。

ア 価値がないように見えても、自分の役に立つこと。
イ 価値のあるものとないものとが、入りまじっていること。
ウ 価値はわからないけれども、十分な量があること。

〔　〕

(2) ——線②「情報への〝耐性〟」とあるが、次の中から「情報への〝耐性〟を身につけている」例として適当なものを選びなさい。

ア スマホをいつも持ち歩き、あらゆる情報を瞬時に手に入れることができる。
イ スマホからの情報を完全に遮断（しゃだん）し、うろたえることなく日常を生きることができる。
ウ スマホを通じて入ってくる情報の意味を判断し、落ち着いて情報を取捨選択できる。

〔　〕

(3) ——線③「では、いかにしたら……できるのでしょうか」とあるが、これに対する筆者の答えとして、適当でないものを選びなさい。

ア 退屈をまぎらせるためにスマホを使うのではなく、情報を手に入れる道具として使うようにする。
イ スマホを使わない時間を作り、情報の質や意味を自ら判断できるようになるために見聞を広める。
ウ 外部からの情報への過度な依存をやめ、自らの頭でものごとを考える時間を持つようにする。

〔　〕

襷を、君に。(1)

（高校一年生の倉本歩が所属する陸上部は、全国高校駅伝の前哨戦である九州瀬戸内駅伝のメンバー選考を行っています。歩は、一年生の高田稔、三年生の河合穂波と並ぶ形でラストスパートをかけました。）

向かい風に阻まれて、思うように進めない。体重の軽い稔も風の影響を受けて苦しそうだ。

そして、三人の中で一番大柄な河合さんが抜け出そうとした。追おうとした時に、横風が吹いた。

「あ！」と思わず声を出してしまった。

風でバランスを崩した歩は、内側によれ、河合さんにぶつかった。その拍子に、河合さんが転びそうになる。だが、すぐに立て直して走り出す。

ようやく歩がバランスを取り戻した時には、後ろを走っていた選手に抜かれていた。必死で追いすがる。四、五人で団子状になってゴールラインを通過した。①歩は遠ざかる河合さんの背中ばかり見ながら走っていた。追いつくことはできなかった。

「倉本、十分三十五秒」

そのまま倒れ込みたかったが、後ろを走ってくる人がいたから、暫く走った後で止まる。腰を折って呼吸を整えていると、汗がこめかみや顎を伝って地面に落ちた。

後藤田コーチが名前を呼んでゆく。

南原さん、畑谷さん、瑞希、河合さん。稔も呼ばれている。

最後の一人になった。

後藤田コーチは周囲を見回し、誰かを探している。

こちらを向いたから②胸が高鳴る。

だが——。

呼ばれたのは二年生の先輩の名前だった。

③目の前が真っ暗になった。

「……以上、八名。メンバーに選ばれなかった者も、付添や応援で同行する事になるから、体調管理にはくれぐれも気をつけて」

後藤田コーチの声が高らかに響き、その日の練習は終わった。

歩はふらふらとよろめき、倒れ込むようにトイレの扉を押した。蛇口を捻り、洗面器に水を溜める。いつもは足を冷やすのに使う洗面器に、歩は顔をつけた。

「ぷはぁっ」

息を止め、限界まで我慢した後で顔を上げる。

苦しい。

顔から水滴を垂らしながら浅い呼吸を繰り返す。必死で酸素を吸う。

「うう……」

嗚咽が止まらない。蛇口の水を勢い良く流しながら、声を殺して泣いた。

今回は本番ではない。まだ、次がある。一旦は、そう気持ちを切り替えていたのに、いざ、メンバーから漏れるとショックだった。

（蓮見恭子『襷を、君に。』光文社　による）

確認テスト 本文を読んで、問いに答えなさい。

(1) ——線①「歩は遠ざかる河合さんの背中ばかり見ながら走っていた」とはどういうことを表しているか。適当なものを選びなさい。

ア 歩が河合さんにぶつかってしまい、バランスを崩してしまったということ。

イ 歩が河合さんに追いつくことができないまま、距離をはなされてゴールしたこと。

ウ 歩が河合さんに必死で追いすがり、最後は並んで走るまでに距離を詰めたということ。

〔　　〕

(2) ——線②「胸が高鳴る」とあるが、このときの歩の様子として最も適当なものを選びなさい。

ア 自分が最後の一人に選ばれないことを覚悟し、緊張しながらコーチの言葉を待っている。

イ コーチがこちらを向いたことで、自分が最後の一人に選ばれるのではないかと感じている。

ウ 周囲を見回しているコーチの姿を見て、自分がメンバーに選ばれるかどうか不安に思っている。

〔　　〕

(3) ——線③「目の前が真っ暗になった」とあるが、この表現について正しく述べたものを選びなさい。

ア 時間の経過を、情景描写をもちいて表現している。

イ 歩が気持ちを切り替えたことを、隠喩で表現している。

ウ 強く気落ちする歩の心情を、印象的に表現している。

〔　　〕

欅を、君に。(2)

(陸上部に所属する高校一年生の倉本歩は、九州瀬戸内駅伝の登録選手に選ばれず、トイレで涙を流していました。そこに、二年生の畑谷さんが声をかけてきました。)

いきなり扉の向こうから声をかけられたから、飛び上がりそうになる。

「まだ、誰かいるの?」

畑谷さんだった。

「あ、すみません。すぐに出ます」

「早く着替えてね。警備員さんが戸締りに来るから」

慌てて顔を拭い、更衣室へと走る。外から窺うと、中に人がいた。声が聞こえる。

様子がおかしい。

ぼそぼそと声を潜めて話す合間に、呻き声が聞こえる。歩と同じようにメンバーに選ばれなかった人が泣いてるんだろうか?

音をさせないように扉を開くと、集まっていたのは三年生の部員達だった。南原さんも含めて、四人が勢揃いしていた。

輪の中心でタオルに顔を埋めているのは――。

河合先輩だった。

「ホナは、高校に入ってから、怪我に泣いたもんね。腐らずに、よく頑張った」

南原さんの声だった。

河合さんはタオルに顔を埋めたまま、感極まったように南原さんに抱きついた。

「ナンちゃん、ありがと。みんなも……」

「頑張ろう。一緒に頑張ろうね」

「最後の年だもん」

そのまま立ち尽くす。

①自分と河合さんとの差が分かった気がした。

大会にかける思いの強さだ。何処かで「まだ次がある。来年がある」と考えている自分と「今年で最後」と執念を燃やす最上級生。

②改めて見ると、体も随分と絞れている。

復帰してからの河合さんは本当に、こつこつと練習していた。皆が走り終えた後も、一人だけ残って練習していたり――。誰よりも入念にストレッチや体幹トレーニングをこなしていたのも、怪我を用心しての事だった。

いや――。

恐らく、復帰前から補強やストレッチなど、かなり熱心にやっていたのだろう。

その差はおのずと、走る時の気迫に現れていた。

――③頑張ってサポートしないと。

裏方として、先輩方の最後の大会をお手伝いさせてもらおう。

自然と※殊勝な気持ちになっていた。

(蓮見恭子『欅を、君に。』光文社 による)

※殊勝…けなげで感心なさま。

確認テスト 本文を読んで、問いに答えなさい。

(1) ――線①「自分と河合さんとの差」とは何か。本文中から十字以上十五字以内で探し、最初と最後の三字を答えなさい。

□□□ ～ □□□

(2) ――線②「改めて見ると、体も随分と絞れている」とあるが、これはどういうことを表しているか。適当なものを選びなさい。

ア 改めて河合さんの姿を見ると、最後の大会に向けて強い思いで臨(のぞ)んでいることがわかるということ。

イ 改めて自分の姿を見ると、どこかで次があると考え、練習をおこたってきたことがわかるということ。

ウ 改めて最上級生の姿を見ると、三年生の四人がこれまで過ごしてきた絆(きずな)の強さがわかるということ。

〔　　〕

(3) ――線③「頑張ってサポートしないと」とあるが、歩はなぜこのように思っているのか。適当なものを選びなさい。

ア 自分が選ばれなかったことを改めてくやしく感じ、裏方の仕事を通じて自分と河合さんとの差を知りたいと思ったから。

イ 最後の大会に対する最上級生たちの強い思いを知り、自分も大会に臨む最上級生を裏方として支えたいと感じたから。

ウ 今回が最後の大会だと執念を燃やす最上級生に対して、自分はこの大会が最後ではないと気楽に考えたから。

〔　　〕

走れメロス（1）

メロスは激怒した。必ず、かの※邪知暴虐の王を除かなければならぬと決意した。メロスには政治がわからぬ。メロスは、村の※牧人である。笛を吹き、羊と遊んで暮らしてきた。けれども邪悪に対しては、人一倍に敏感であった。①今日未明、メロスは村を出発し、野を越え山越え、※十里離れたこの※シラクスの町にやって来た。メロスには父も、母もない。女房もない。十六の、内気な妹と二人暮らしだ。この妹は、村のある律儀な一牧人を、近々花婿として迎えることになっていた。結婚式も間近なのである。メロスは、それゆえ、花嫁の衣装やら祝宴のごちそうやらを買いに、はるばる町にやって来たのだ。まず、その品々を買い集め、それから都の大路をぶらぶら歩いた。メロスには②竹馬の友があった。セリヌンティウスである。今はこのシラクスの町で、※石工をしている。その友を、これから訪ねてみるつもりなのだ。久しく会わなかったのだから、訪ねていくのが楽しみである。③歩いているうちにメロスは、町の様子を怪しく思った。ひっそりしている。もう既に日も落ちて、町の暗いのはあたりまえだが、けれども、なんだか、夜のせいばかりではなく、町全体が、やけに寂しい。のんきなメロスも、だんだん不安になってきた。道で会った若い衆を捕まえて、何かあったのか、二年前にこの町に来たときは、夜でも皆が歌を歌って、町はにぎやかであったはずだが、と質問した。若い衆は、首を振って答えなかった。しばらく歩いて老爺に会い、今度はもっと語勢を強くして質問した。老爺は答えなかった。メロスは両手で老爺の体を揺すぶって質問を重ねた。老爺は、④辺りをはばかる低声で、僅か答えた。

「王様は、人を殺します。」

「なぜ殺すのだ。」

「悪心を抱いている、というのですが、誰もそんな、悪心をもってはおりませぬ。」

「たくさんの人を殺したのか。」

「はい、初めは王様の妹婿様を。それから、ご自身のお世継ぎを。それから、妹様を。それから、妹様のお子様を。それから、皇后様を。それから、賢臣のアレキス様を。」

「驚いた。国王は乱心か。」

「いいえ、乱心ではございませぬ。人を信ずることができぬ、というのです。このごろは、臣下の心をもお疑いになり、少しく派手な暮らしをしている者には、人質一人ずつ差し出すことを命じております。ご命令を拒めば、十字架にかけられて殺されます。今日は、六人殺されました。」

聞いて、メロスは激怒した。「あきれた王だ。生かしておけぬ。」

※邪知暴虐…悪知恵を働かせ、残酷な仕打ちで人々を苦しめること。
牧人…ここでは羊飼いのこと。
十里…一里は約三・九キロメートル。
シラクス…地中海のシチリア島（現イタリア領）南東海岸にある港湾都市。古代ギリシア・ローマ時代から続く古い都市。
石工…石材を切り出したり、加工・細工したりする職人。

確認テスト　本文を読んで、問いに答えなさい。

(1) ——線①「未明」の意味を選びなさい。

ア　夜がまだ明けきらない頃。
イ　夜が明けてから昼までの間。
ウ　夕方から日が沈むまでの間。
エ　日が沈んで深夜になる頃。

〔　　〕

(2) ——線②「竹馬の友」の意味を選びなさい。

ア　馬が合う人　　イ　競い合う親友　　ウ　幼なじみ

〔　　〕

(3) ——線③「歩いているうちにメロスは、町の様子を怪しく思った」とあるが、これはなぜか。適当なものを選びなさい。

ア　既に日が落ちて夜になり、町が暗かったから。
イ　二年前と違い、町全体がやけに寂しいから。
ウ　質問しても、町の人々が何も答えないから。
エ　町に二年ぶりに来たので、不安になったから。

〔　　〕

(4) ——線④「辺りをはばかる低声」とはどのような声か。適当なものを選びなさい。

ア　周囲に響き渡るような低音の声。
イ　周囲に聞こえないように気づかった声。
ウ　周囲に遠慮せず、語気を強めた声。

〔　　〕

(5) メロスの説明として適当なものを選びなさい。

ア　シラクスの町で生まれ育った牧人である。
イ　政治はわからないが、邪悪に対しては敏感である。
ウ　妹の結婚式が行われるシラクスの町にやって来た。

〔　　〕

走れメロス (2)

メロスは単純な男であった。買い物を背負ったままで、のそのそ王城に入っていった。たちまち彼(かれ)は、※巡邏(じゅんら)の警吏(けいり)に捕縛(ほばく)された。調べられて、メロスの※懐中(かいちゅう)からは短剣(たんけん)が出てきたので、騒(さわ)ぎが大きくなってしまった。メロスは王の前に引き出された。

「この短刀で何をするつもりであったか。言え!」暴君ディオニスは静かに、けれども威厳(いげん)をもって問い詰(つ)めた。その王の顔は蒼白(そうはく)で、眉間(みけん)のしわは刻み込(こ)まれたように深かった。

「町を暴君の手から救うのだ。」とメロスは、悪びれずに答えた。

「おまえがか?」王は、※憫笑(びんしょう)した。「しかたのないやつじゃ。おまえなどには、わしの孤独(こどく)の心がわからぬ。」

「言うな!」とメロスは、①いきり立って反駁(はんばく)した。「人の心を疑うのは、最も恥(は)ずべき悪徳だ。王は、民(たみ)の忠誠をさえ疑っておられる。」

「疑うのが正当の心構えなのだと、わしに教えてくれたのは、おまえたちだ。人の心は、あてにならない。人間は、もともと私欲の塊(かたまり)さ。信じては、ならぬ。」暴君は落ち着いてつぶやき、ほっとため息をついた。「わしだって、平和を望んでいるのだが。」

「何のための平和だ。自分の地位を守るためか。」今度はメロスが②嘲笑(ちょうしょう)した。「罪のない人を殺して、何が平和だ。」

「黙(だま)れ。」王は、さっと顔を上げて報(むく)いた。「口では、どんな清らかなことでも言える。わしには、人のはらわたの奥底(おくそこ)が見え透(す)いてならぬ。おまえだって、今にはりつけになってから、泣いてわびたって聞かぬぞ。」

③「ああ、王は利口だ。うぬぼれているがよい。私は、ちゃんと死ぬる覚悟(かくご)でいるのに。命乞(ご)いなど決してしない。ただ、――」と言いかけて、メロスは足元に視線を落とし、瞬時(しゅんじ)ためらい、「ただ、私に情けをかけたいつもりなら、処刑(しょけい)までに三日間の日限を与(あた)えてください。たった一人の妹に、亭主(ていしゅ)を持たせてやりたいのです。三日のうちに、私は村で結婚(けっこん)式を挙げさせ、必ず、ここへ帰ってきます。」

「ばかな。」と暴君は、しゃがれた声で低く笑った。「とんでもないうそを言うわい。④逃(に)がした小鳥が帰ってくると言うのか。」

「そうです。帰ってくるのです。」メロスは必死で言い張った。

※巡邏の警吏…巡邏は警備のために見回ること。警吏は警官。
懐中…ふところの中。　憫笑…哀れんで笑うこと。

確認テスト　本文を読んで、問いに答えなさい。

(1) ――線①「いきり立って反駁した」が表す内容として適当なものを選びなさい。

ア　唐突(とうとつ)に、別の話を切りだして反抗(はんこう)した。
イ　落ち着かない様子で、不安げに反対した。
ウ　激しく怒(いか)って興奮し、いきまいて反論した。

〔　　〕

(2) ――線②「嘲笑」の意味を選びなさい。

ア　あざけり笑う。　イ　思わず笑う。　ウ　苦々しく笑う。

〔　　〕

(3) ――線③「ああ、王は利口だ」とあるが、このときのメロスの様子として適当なものを選びなさい。

ア　人の心を見抜(ぬ)くことができるという王に感心しつつ、言い返すべき内容を考えている。
イ　自分の考えを言い当てられ、驚(おどろ)きながらも三日間の日限を認めさせようとしている。
ウ　自分の覚悟も知らないのに、心を見透かしたかのように話す王を皮肉っている。

〔　　〕

(4) ――線④「逃がした小鳥が帰ってくると言うのか」とはどういうことを言おうとしているのか。最も適当なものを選びなさい。

ア　逃がした小鳥が帰ってこないように、メロスも帰ってくるはずがないということ。
イ　逃がした小鳥がいつかは帰ってくるように、メロスも帰ってくるだろうということ。
ウ　逃がした小鳥が帰ってくるとは限らないように、メロスも帰ってくるかわからないではないかということ。

〔　　〕

(5) 人の心を疑うことに対して、メロスと王はそれぞれどのように考えているか。解答欄(かいとうらん)に当てはまる言葉を本文中から書きぬきなさい。

メロスは、人の心を疑うことは□□□□□□□□だと考えており、
一方、王は、人の心を疑うのは□□□□□□だと考えている。

走れメロス ⑶

「私は約束を守ります。私を三日間だけ許してください。妹が私の帰りを待っているのだ。そんなに私を信じられないならば、よろしい、この町にセリヌンティウスという石工がいます。私の①無二の友人だ。あれを人質としてここに置いていこう。私が逃げてしまって、三日目の日暮れまで、ここに帰ってこなかったら、あの友人を絞め殺してください。頼む、そうしてください。」

それを聞いて王は、残虐な気持ちで、そっと②ほくそ笑んだ。生意気なことを言うわい。どうせ帰ってこないに決まっている。このうそつきにだまされたふりして、放してやるのもおもしろい。そうして身代わりの男を、三日目に殺してやるのも気味がいい。人は、これだから信じられぬと、わしは悲しい顔して、その身代わりの男を※磔刑に処してやるのだ。③世の中の、正直者とかいう※やつばらにうんと見せつけてやりたいものさ。

「願いを聞いた。その身代わりを呼ぶがよい。三日目には日没までに帰ってこい。遅れたら、その身代わりを、きっと殺すぞ。ちょっと遅れて来るがいい。おまえの罪は、永遠に許してやろうぞ。」

「なに、何をおっしゃる。」

「はは。命が大事だったら、遅れて来い。④おまえの心は、わかっているぞ。」

メロスは悔しく、じだんだ踏んだ。ものも言いたくなくなった。

竹馬の友、セリヌンティウスは、深夜、王城に召された。暴君ディオニスの面前で、よき友とよき友は、二年ぶりで相会うた。メロスは、友に一切の事情を語った。セリヌンティウスは無言でうなずき、メロスをひしと抱き締めた。友と友の間は、それでよかった。セリヌンティウスは縄打たれた。メロスはすぐに出発した。初夏、満天の星である。

メロスはその夜、一睡もせず十里の道を急ぎに急いで、村へ到着したのは、明くる日の午前、日は既に高く昇って、村人たちは野に出て仕事を始めていた。メロスの十六の妹も、今日は兄の代わりに羊群の番をしていた。よろめいて歩いてくる兄の、疲労困憊の姿を見つけて驚いた。

※磔刑…はりつけの刑。　やつばら…やつら。

確認テスト　本文を読んで、問いに答えなさい。

(1) ——線①「無二の友人」の意味を選びなさい。

ア　かつての親友。
イ　かけがえのない親友。
ウ　古くからの親友。

〔　　〕

(2) ——線②「ほくそ笑んだ」とあるが、「ほくそ笑む」の意味を選びなさい。

ア　小ばかにしたような態度で笑う。
イ　笑顔（えがお）を浮（う）かべ、穏（おだ）やかににっこりと笑う。
ウ　物事が思い通りになったと一人ひそかに笑う。

〔　　〕

(3) ——線③「世の中の、……見せつけてやりたいものさ」とあるが、王は何を見せつけたいと考えているのか。適当なものを選びなさい。

ア　約束は守らなければならないものだということ。
イ　自分はだまされたふりをしていたのだということ。
ウ　人はやはり信じられないものなのだということ。

〔　　〕

(4) ——線④「おまえの心は、わかっているぞ」とあるが、王はメロスがどのように考えていると思っているのか。適当なものを選びなさい。

ア　三日目の日暮れまでに王城に帰ってこようと考えている。
イ　友人を身代わりにして、自分は助かろうと考えている。
ウ　王が願いを聞き入れることなどないだろうと考えている。

〔　　〕

(5) セリヌンティウスのメロスに対する信頼（しんらい）が、セリヌンティウスの行動を通して描（えが）かれている一文を探し、最初と最後の五字を答えなさい。ただし句読点も一字に含（ふく）む。

□□□□□～□□□□□

(6) 本文の内容に合うものを選びなさい。

ア　メロスの話を聞く条件として、王はメロスに友人を人質とするよう提案した。
イ　王は、三日間だけ待ってほしいというメロスの願いを聞き入れた。
ウ　メロスは、王に本心を見透（みす）かされたことが悔しく、じだんだを踏んだ。

〔　　〕

走れメロス(4)

（妹の結婚式を終え、メロスはシラクスの町に向かって走り出しました。しかし川の氾濫や山賊に遭い、疲れ切って動けなくなってしまいます。）

私は精いっぱいに努めてきたのだ。動けなくなるまで走ってきたのだ。私は不信の徒ではない。ああ、できることなら私の胸を断ち割って、真紅の心臓をお目にかけたい。愛と※信実の血液だけで動いているこの心臓を見せてやりたい。けれども私は、この大事なときに、①精も根も尽きたのだ。私は、よくよく不幸な男だ。私は、きっと笑われる。私の一家も笑われる。私は友を欺いた。中途で倒れるのは、初めから何もしないのと同じことだ。ああ、もう、どうでもいい。これが、私の定まった運命なのかもしれない。セリヌンティウスよ、許してくれ。君は、いつでも私を信じた。私も君を欺かなかった。私たちは、本当によい友と友であったのだ。一度だって、暗い疑惑の雲を、お互い胸に宿したことはなかった。今だって、②君は私を無心に待っているだろう。ああ、待っているだろう。ありがとう、セリヌンティウス。よくも私を信じてくれた。それを思えば、たまらない。③友と友の間の信実は、この世でいちばん誇るべき宝なのだからな。セリヌンティウス、私は走ったのだ。君を欺くつもりは、みじんもなかった。信じてくれ！　私は急ぎに急いでここまで来たのだ。濁流を突破した。山賊の囲みからも、するりと抜けて一気に峠を駆け降りてきたのだ。私だからできたのだよ。④ああ、このうえ、私に望みたもうな。放っておいてくれ。どうでもいいのだ。私は負けたのだ。だらしがない。笑ってくれ。王は私に、ちょっと遅れて来い、と耳打ちした。遅れたら、身代わりを殺して、私を助けてくれると約束した。私は王の卑劣を憎んだ。けれども、今になってみると、私は王の言うままになっている。私は遅れていくだろう。王は、⑤独り合点して私を笑い、そうしてこともなく私を放免するだろう。そうなったら、私は、死ぬよりつらい。私は、永遠に裏切り者だ。地上で最も不名誉の人種だ。セリヌンティウスよ、私も死ぬぞ。君と一緒に死なせてくれ。君だけは私を信じてくれるにちがいない。いや、それも私の、独りよがりか？　ああ、もういっそ、悪徳者として生き延びてやろうか。村には私の家がある。羊もいる。妹夫婦は、まさか私を村から追い出すようなことはしないだろう。正義だの、信実だの、愛だの、考えてみればくだらない。人を殺して自分が生きる。それが人間世界の※定法ではなかったか。ああ、何もかもばかばかしい。私は醜い裏切り者だ。どうとも勝手にするがよい。※やんぬるかな。――※四肢を投げ出して、うとうと、まどろんでしまった。

※信実…正直で偽りのないこと、誠実な心。　定法…きまった法則。
やんぬるかな…やみぬるかな。今となってはどうしようもない、もうおしまいだ。
四肢…両腕と両脚。

確認テスト 本文を読んで、問いに答えなさい。

(1) ——線①「精も根も尽きた」とはどういうことか。適当なものを選びなさい。

ア 疲れ果て、精力も気力も失った。
イ 全力を尽くし、精いっぱい努力した。
ウ いろいろ試したがやりようがなかった。

〔　　〕

(2) ——線②「君は私を無心に待っているだろう」とあるが、メロスはセリヌンティウスがどのように待っていると考えているのか。適当なものを選びなさい。

ア メロスが苦労していることも知らず、のんきに待っている。
イ メロスが本当に帰ってくるか心配で、不安げに待っている。
ウ メロスが帰ってきてほしいと、祈りながら待っている。
エ メロスが帰ってくることを信じ、ただただ待っている。

〔　　〕

(3) ——線③「友と友の間の信実は、この世でいちばん誇るべき宝なのだからな」とあるが、この考えを否定している一文を探し、最初の三字を答えなさい。

(4) ——線④「ああ、このうえ、私に望みたもうな」とはどういうことか。適当なものを選びなさい。

ア これほど努力したのだから、これ以上は望まないでほしいということ。
イ もう間に合わないかもしれない状況なので、何か希望がほしいということ。
ウ 自分だからこそ困難を乗り越えられたので、王に望みを聞いてほしいということ。

〔　　〕

(5) ——線⑤「王は、独り合点して私を笑い」とあるが、メロスは、王がどのように考えてメロスを笑うと考えているのか。適当なものを選びなさい。

ア 困難に疲れ切って、メロスは遅れてきた。
イ 自分が助かりたくて、メロスは遅れてきた。
ウ 精いっぱい努めたけれども、メロスは遅れてきた。

〔　　〕

走れメロス（5）

（まどろんだメロスの耳に水の流れる音が聞こえました。見ると、岩の裂け目から清水が湧き出ています。）

その泉に吸い込まれるようにメロスは身をかがめた。水を両手ですくって、一口飲んだ。ほうと長いため息が出て、夢から覚めたような気がした。歩ける。行こう。①肉体の疲労回復とともに、僅かながら希望が生まれた。義務遂行の希望である。我が身を殺して、名誉を守る希望である。斜陽は赤い光を木々の葉に投じ、葉も枝も燃えるばかりに輝いている。日没までには、まだ間がある。私を待っている人があるのだ。少しも疑わず、静かに期待してくれている人があるのだ。私は信じられている。私の命なぞは問題ではない。死んでおわびなどと、気のいいことは言っておられぬ。私は信頼に報いなければならぬ。今はただ②その一事だ。走れ！　メロス。

（中略　メロスは再びシラクスの町に向けて走り出しました。メロスは口から血を噴き出しながらも走ります。）

「ああ、メロス様。」うめくような声が、風とともに聞こえた。

「誰だ。」メロスは走りながら尋ねた。

「フィロストラトスでございます。あなたのお友達セリヌンティウス様の弟子でございます。」その若い石工も、メロスの後について走りながら叫んだ。「もう、だめでございます。むだでございます。走るのはやめてください。もう、あの方をお助けになることはできません。」

「いや、まだ日は沈まぬ。」

「ちょうど今、あの方が死刑になるところです。ああ、あなたは遅かった。お恨み申します。ほんの少し、もうちょっとでも、早かったなら！」

「いや、まだ日は沈まぬ。」メロスは胸の張り裂ける思いで、赤く大きい夕日ばかりを見つめていた。走るより他はない。

「やめてください。走るのはやめてください。今はご自分のお命が大事です。あの方は、あなたを信じておりました。③刑場に引き出されても、平気でいました。王様がさんざんあの方をからかっても、メロスは来ます、とだけ答え、強い信念をもち続けている様子でございました。」

「④それだから、走るのだ。信じられているから走るのだ。間に合う、間に合わぬは問題でないのだ。人の命も問題でないのだ。私は、なんだか、もっと恐ろしく大きいもののために走っているのだ。ついてこい！　フィロストラトス。」

メロスの変化

メロスは疲労の回復とともに「正義」「信実」「愛」に立ち返り、次第に、義務の遂行よりも大切なことのために走ることとなる。

・泉の水を飲む場面
　義務遂行の希望。名誉を守る希望。信頼に報いなければならぬ。

・フィロストラトスとの対話
　信じられているから走る。間に合う、間に合わぬは問題でない。なんだか、もっと恐ろしく大きいもののために走る。

確認テスト　本文を読んで、問いに答えなさい。

(1) ――線①「肉体の疲労回復とともに、僅かながら希望が生まれた」とあるが、このときのメロスの心情を、情景を通して描写(びょうしゃ)している一文を探し、最初の三字を答えなさい。

(2) ――線②「その一事」とは何を指しているか。本文中から一文で探し、最初と最後の三字を答えなさい。ただし句読点も一字に含(ふく)む。

〜

(3) ――線③「刑場に引き出されても、平気でいました」とあるが、なぜセリヌンティウスは平気でいたのか。最も適当なものを選びなさい。

ア　メロスのことをただただ信じていたから。
イ　メロスが間に合うことを必死で願っていたから。
ウ　メロスを疑う王に反発し、強気な態度をとっていたから。

〔　　〕

(4) ――線④「それだから、走るのだ」とあるが、この場面でメロスはなぜ走っているのか。最も適当なものを選びなさい。

ア　まだ日が沈まず、間に合うかもしれないから。
イ　セリヌンティウスに対する負い目があるから。
ウ　自分が誰かに信じられているから。

〔　　〕

走れメロス (6)

（日が地平線に沈もうとするとき、メロスは刑場に突入しました。）

「私だ、※刑吏！　殺されるのは、私だ。メロスだ。彼を人質にした私は、ここにいる！」と、かすれた声で精いっぱいに叫びながら、ついにはりつけ台に上り、つり上げられてゆく友の両足にかじりついた。群衆はどよめいた。あっぱれ。許せ、と口々にわめいた。セリヌンティウスの縄は、ほどかれたのである。

「セリヌンティウス。」メロスは目に涙を浮かべて言った。「私を殴れ。力いっぱいに頬を殴れ。私は、途中で一度、悪い夢を見た。君がもし私を殴ってくれなかったら、私は君と抱擁する資格さえないのだ。殴れ。」

　セリヌンティウスは、全てを察した様子でうなずき、刑場いっぱいに鳴り響くほど音高くメロスの右頬を殴った。殴ってから優しくほほ笑み、

「メロス、私を殴れ。同じくらい音高く私の頬を殴れ。私はこの三日の間、たった一度だけ、ちらと君を疑った。生まれて初めて君を疑った。君が私を殴ってくれなければ、私は君と抱擁できない。」

　メロスは腕にうなりをつけてセリヌンティウスの頬を殴った。

「ありがとう、友よ。」二人同時に言い、ひしと抱き合い、それからうれし泣きにおいおい声を放って泣いた。

　群衆の中からも、※歔欷の声が聞こえた。暴君ディオニスは、群衆の背後から二人のさまをまじまじと見つめていたが、やがて静かに二人に近づき、顔を赤らめて、こう言った。

「おまえらの望みはかなったぞ。おまえらは、わしの心に勝ったのだ。信実とは、決して空虚な妄想ではなかった。どうか、わしも仲間に入れてくれまいか。どうか、わしの願いを聞き入れて、おまえらの仲間の一人にしてほしい。」

　どっと群衆の間に、歓声が起こった。

「万歳、王様万歳。」

　一人の少女が、※緋のマントをメロスにささげた。メロスは、まごついた。よき友は、気をきかせて教えてやった。

「メロス、君は、真っ裸じゃないか。早くそのマントを着るがいい。このかわいい娘さんは、メロスの裸体を皆に見られるのが、たまらなく悔しいのだ。」

　勇者は、ひどく赤面した。

（古伝説と、シルレルの詩から。）

※刑吏…刑を執行する役人。　歔欷…すすり泣き。　緋…濃く明るい赤。

王の変化

王・ディオニスはメロスとセリヌンティウスとの間の信実を見て、人を信じる心を取り戻す。

・王城「顔は蒼白」「人の心は、あてにならない。」
　「信じては、ならぬ。」

・結末「顔を赤らめて」
　「信実とは、決して空虚な妄想ではなかった。」

作品を通じて「赤」が象徴的に用いられていることにも注目する。

確認テスト　本文を読んで、問いに答えなさい。

(1) ――線部「メロス、私を殴れ」とあるが、セリヌンティウスはなぜこのように言っているのか。適当なものを選びなさい。

ア 殴られることで、メロスを許したことを示したかったから。

イ 生まれて初めて、メロスのことを疑ってしまったから。

ウ メロスが信頼のできる人物だと気づかされたから。

［　　］

(2) 本文ではメロスとセリヌンティウスの姿を見た王が、人の心に対する考えを改めている。王が悟った内容が読み取れる一文を、王の会話文の中から探し、最初と最後の三字を答えなさい。ただし句読点も一字に含む。

□□□～□□□

(3) 本文の内容に合うものを選びなさい。

ア メロスに頰を殴れと言われたセリヌンティウスは、事情がわからないながらも友の言う通り頰を殴った。

イ 群衆の背後からメロスとセリヌンティウスを見ていた王は、二人に負けた怒りで顔が赤くなった。

ウ メロスとセリヌンティウスに対する王の言葉に、群衆の間からどっと歓声があがった。

［　　］

よこまち余話（1）

（母と魚屋を切り盛りしている浩一には、中学に合格したばかりの弟・浩三がいます。次の文章は、弟の中学合格をどう祝えばいいか悩んだ浩一が、月に一度通う和菓子屋・光月堂に相談に行く場面です。）

浩三の中学合格をどうやって祝ったらいいものか、浩一はさんざん迷った挙げ句、光月堂の親爺さんに相談に行った。僕には①二心あるんです――愁嘆して告白する。

「ふたごころ？」

※番重の前で腕組みして、親爺さんは鸚鵡返しをする。娘さんと無事祝言をあげたばかりのあの背の高いお弟子さんが、のれんの奥から②案じ顔をひょっと覗かせた。

「それはですね、弟の合格をただ祝ってやりたいという正直な心と、弟の合格を誰彼構わず云いふらしたいという曲がった心のふたつです。それで、どうやってお祝いをすればいいのか、すっかりわからなくなってしまって」

ひと息に云ったせいで終いのほうでだいぶむせた。息が落ち着いてから、「まったく困りました」と眉のあたりを掻いた。

親爺さんは呆気にとられたふうに浩一を眺めてからお弟子さんと顔を見合わせ、③ふたり一緒に店が震えそうな音で噴き出した。腹を抱える両人を前に、浩一はただうろたえる。

「同じだよ、そりゃあ。二心なんかじゃねぇさ」

笑いの下から、親爺さんが云った。浩一はうれしいんだな、うれしくってしょうがないんだな。親爺さんは何べんも繰り返し、目尻に溜まった涙を拭った。

そういうことなら、紅白まんじゅうでもこしらえて、ご近所に配っちゃあいかがです？　云ったのはお弟子さんで、親爺さんも、④そりゃ名案だとすぐに乗った。うちで合格祝いの熨斗をつけてやるよ。それを配ればみんなに弟さんの合格が知れ渡る。まんじゅうをもらえば、周りもうれしかろう。おまいさんも嫌みなく弟を自慢できるってもんだ。

（中略）

浩一は、路地の住人と魚屋のお得意さんに配るために、十五箱の紅白まんじゅうを注文した。家に帰って、押し入れの奥に仕舞い込んであった木箱を取り出す。長年コツコツと貯めてきた小遣いを、背中を丸めて勘定し、「足りる」と、胸を撫で下ろした。

ふたごころ。

再び木箱を押し入れの奥に押し込んでから、浩一はつぶやく。親爺さんは笑ったけれど、やっぱりそのこと自体を喜ぶのと、みなに知ってほしいと思うこととは、ずいぶん隔たっているようだと改めて思う。

（木内昇『よこまち余話』中央公論新社　による）

※番重…和菓子などを入れる浅い重ね箱。

確認テスト

本文を読んで、問いに答えなさい。

(1) ――線①「二心」とは何を指しているか。本文中から二十字以上二十五字以内で二つ探し、それぞれ最初と最後の三字を答えなさい。

[　　　]～[　　　]
[　　　]～[　　　]

(2) ――線②「案じ顔」とはどのような顔か。適当なものを選びなさい。

ア　名案がありそうな顔。
イ　晴れがましい顔。
ウ　心配そうな顔。

〔　　〕

(3) ――線③「ふたり一緒に店が震えそうな音で噴き出した」とあるが、これはなぜか。最も適当なものを選びなさい。

ア　弟の合格をどうやって祝ったらよいかという、簡単なこともわからない浩一にあきれたから。
イ　弟の合格を云いふらしたいという気持ちを、よくない気持ちだと悩んでいる浩一がおかしかったから。
ウ　弟の合格がうれしくてしょうがないという浩一のことを、ほほえましく思ったから。

〔　　〕

(4) ――線④「そりゃ名案だ」とあるが、なぜ名案なのか。適当なものを選びなさい。

ア　まんじゅうを配れば周りもうれしいので、嫌みにならずに弟の合格を自慢できるから。
イ　まんじゅうで合格を祝えば、みなに弟の合格を知ってほしいという気持ちをおさえられるから。
ウ　まんじゅうの合格祝いであれば、浩一が貯めてきた小遣いでも十分なお祝いができるから。

〔　　〕

よこまち余話 ⑵

（母とふたりで魚屋を切り盛りしている浩一は、弟の中学合格を祝うため、月に一度通う和菓子屋・光月堂に十五箱の紅白まんじゅうを注文しました。）

「困ります」

浩一は食い下がった。小銭をかき集めて光月堂に行ったのに、「お代はいいよ。うちからのご祝儀だ」と①親爺さんはその金を受け取ろうとしないのだ。

「それはやっぱり、どうしたって困ります」

しつこく云い募ると、終いに親爺さんは、

「やるっつったらやるんだ！　月に一度っきゃ来なくても、一応はお得意さんなんだからよっ」

と、乱暴に云い捨てて、とっとと作業場に引っ込んでしまった。浩一は身をすくめ、どうしていいかわからずに立ちつくす。

「あれで、うれしくってしょうがないんですよ」

親爺さんの代わりにまんじゅうを包みながら、お弟子さんが云った。彼はここしばらくの間にニキビが消え、頬とあごも精悍に尖ったようだった。浩一と歳はさほど変わらないはずだが、浩一よりずっと先にいる顔になった。

「弟さんが中学に受かったのも、浩一さんがお祝いのことでうちに相談に来てくれたのも、親父は両方ともうれしかったんですよ」

浩一は、袋を受け取ってもまだまごまごしていた。長く※逡巡したあと、※天啓を得たように頭を撥ね上げ、②「そうだ、草餅」と叫んだ。ポケットから小銭を取り出して、「草餅をふたつください」と、お弟子さんに頼む。

「気を使わなくてもいいですよ」

「いえ。僕が食べたいんです。春が来ましたし」

浩一が真面目に返事をすると、お弟子さんは頬を弛め、③それから丁寧に草餅を包んだ。その分の代金はちゃんと受け取った。浩一はそれでも、店を出るたった三歩ほどの間に十回以上は頭を下げた。お弟子さんは奥に戻るに戻れず、浩一を見送りながら、困り果てた様子で何度もこめかみを掻いていた。

（木内昇『よこまち余話』中央公論新社　による）

※逡巡……ぐずぐずとためらうこと。　天啓……天の啓示。天が示した導き。

確認テスト 本文を読んで、問いに答えなさい。

(1) ——線①「親爺さんはその金を受け取ろうとしない」とあるが、これはなぜか。適当なものを選びなさい。

ア いつまでも食い下がる浩一に腹が立ち、まんじゅうの代金を受け取る気がうせてしまったから。

イ 小銭をかき集めてきた浩一を見て、一応はお得意さんでもある浩一からなけなしのお金をもらうのは気が引けたから。

ウ 浩一の弟が合格し、浩一がお祝いの相談に来てくれたことがうれしく、まんじゅうを祝儀にあげたいと思ったから。

［　　］

(2) ——線②「『そうだ、草餅』と叫んだ」とあるが、このときの浩一の様子として適当なものを選びなさい。

ア 春が来ていたことに思いいたり、まんじゅうのほかに草餅を買って帰るつもりだったことを思い出している。

イ まんじゅうの代金を払わないこととなったので思いがけず小銭があまり、草餅も買う余裕ができたのを喜んでいる。

ウ 何も払わずまんじゅうを受け取るわけにはいかないと思い、草餅を買い、せめてそのお代を払って帰ろうとしている。

［　　］

(3) ——線③「それから丁寧に草餅を包んだ」とあるが、このときの「お弟子さん」の様子として適当なものを選びなさい。

ア せめてもの思いを示そうとする浩一に対し、誠実な態度でその気持ちにこたえようとしている。

イ 草餅の代金を受け取ることで親爺さんに叱られるのではないかと恐れつつも、やむを得ず草餅を包んでいる。

ウ 親爺さんと浩一の間にはさまれることとなってしまい、困惑しながらも自分の仕事をこなそうとしている。

［　　］

リーチ先生（1）

（イギリス人の芸術家バーナード・リーチとその弟子・沖亀乃介は、美術評論家・柳宗悦の家に造った窯で陶器を焼き上げています。丸二日の火の番を続けたふたりは、窯を冷やす間、眠りにつきました。）

台所から、味噌汁の香りが漂ってきている。亀乃介は布団から飛び起きた。

廊下を小走りに、リーチの部屋へと出向いた。

「先生、お目覚めでしょうか。先生」

声をかけて、ドアを叩いた。返事がない。

「おーい、亀ちゃん。起きたのか。ちょっと来てくれ」

柳の声が、外から聞こえてきた。亀乃介は、急いで勝手口から庭へ出た。窯の前に、リーチと柳の後ろ姿が見えた。

着物姿の柳は、両腕を組んで、何ごとかを見守っているようだ。リーチはしゃがみ込んで、盛んに木槌を振っている。コツン、コツンとレンガが壊れる音がする。

①あっと小さく叫んで、亀乃介は、ふたりのもとへと駆け寄った。

「いけません、先生！　まだ壊しては……早すぎます！」

しかし、亀乃介の制止などまるで聞こえていないように、②リーチは木槌で窯の取り出し口をふさぐレンガを叩き続けた。

柳は亀乃介と目を合わせると、止めても無駄だ、と言わんばかりに、首を横に振った。

急速に窯を冷やすのがどんなに危険か、リーチはじゅうぶんわかっているはずだ。――それなのに。

ガラガラとレンガが崩れる音がして、窯の取り出し口が開いた。

リーチは、木槌を地面に落とすと、立ち上がって、両手に分厚い手袋をはめた。そして、ようやく振り向くと、言った。

「さあ、出来上がった。ついに完成したんだ。取り出そう、カメちゃん」

「いけません、先生。まだ熱すぎます。あわてて手を出したら、やけどしてしまう。それに、そんなに早く取り出したら、ひびが……」

むっとしたような顔になって、リーチが言った。

「手を貸してくれないなら、私がひとりでやる」

逸る心を、リーチはついに抑えきれなかった。

じゅうぶんに冷めるのを待たずに無理やり取り出した陶器のほとんどは、見るも無惨な状態になっていた。

※焼成する際、無我夢中で窯に火を入れたせいで、大量の灰が作品の上に降り落ち、表面がざらついた仕上がりになってしまっていた。

そのほか、ひびが入ったもの、割れてしまったもの、想像していたのとはまったく違う色になってしまったもの――。

③窯の中から陶器を取り出すリーチの顔を暗い雲が次第に覆っていった。窯を開ける喜びと興奮はたちまち消え、その表情は石のように硬くなった。

（原田マハ『リーチ先生』集英社　による）

※焼成…陶芸で、成形した土を高温で焼き、陶器とすること。

確認テスト

本文を読んで、問いに答えなさい。

(1) ――線①「あっと小さく……駆け寄った」とあるが、このときの亀乃介の様子として適当なものを選びなさい。

ア 陶器がすでに完成したことを知り、陶器の出来ばえがどのようなものか一刻も早く見ようとしている。

イ まだ窯を開けてはならないのにリーチが窯の取り出し口を壊しているごとに気づき、リーチを止めようとしている。

ウ ふたりが何をしているのかがわからず、窯のそばまで近づいて柳とリーチが何をしているのかを確認しようとしている。

(2) ――線②「リーチは木槌で……レンガを叩き続けた」とあるが、このときのリーチの様子として適当なものを選びなさい。

ア ついに焼き上がった陶器の仕上がりを確認したいと気が急いている。

イ 制止しようとするふたりへの反発から、無理に窯を開こうとしている。

ウ 急速に窯を冷やしたために陶器が無惨な状態になり、失望している。

(3) ――線③「窯の中から……覆っていった」とあるが、この表現について正しく述べたものを選びなさい。

ア 窯から陶器を取り出すにつれて陶器の状態に落胆していくリーチの心情を、比喩的な表現で描いている。

イ 窯から陶器を取り出すリーチを止めることができなかった亀乃介の後悔を、象徴的な情景で表している。

ウ 窯から陶器を取り出す作業に長い時間がかかったことを、リーチの顔を覆う雲を通じて間接的に表現している。

リーチ先生 (2)

（イギリス人の芸術家バーナード・リーチとその弟子・沖亀乃介は、美術評論家・柳宗悦の家に造った窯で陶器を焼き上げました。しかし、無理に火を入れ、また、窯を早く開けてしまったことで、陶器はひどい状態になっていました。）

亀乃介は、ひとつひとつ、作品を地面の上にきちんと並べていったが、①手袋をした手が震えてしまうのを止められなかった。

――これはひどい。

こうなってしまったのは……自分のせいだ。

あんなふうに火を入れたら危険なことは、わかっていたはずだ。それなのに、火事になる危険を冒してまで、燃やしてしまった。

窯を開ける頃合いも、いまではなかった。落ち着いて、もっと時間をかけて開けるべきだったのに――。

わかっていたのに、焦る先生を止めることができなかった。

自分のせいだ――。

絶望にも似た気持ちが、亀乃介の中に広がった。自分ですら、こんな気分になっているのだ。先生は、どんなに落胆していることだろう。

亀乃介は、がっくりと肩を落とした。激しい後悔が、嵐のように胸中に渦巻いた。

勇気をもって、リーチに進言できなかったことが悔やまれた。（中略）

「カメちゃん」

リーチに呼びかけられて、亀乃介は、うつむけていた顔を上げた。

額に汗をしたたらせながら、リーチがすぐそばに佇んでいた。両手に小さめの壺を抱えている。

「……これを、見てくれ」

リーチが差し出した壺を、亀乃介は両手を伸ばして受け取った。

それは、※青磁の壺だった。

見たこともないような深みと豊かさのある、美しい翡翠色。

表面にはざらつきがまったくなく、つややかな肌は朝日を反射して白い光を放っている。

――これは……。

亀乃介は震える瞳を上げてリーチを見た。リーチの顔に光が差しているのがわかった。

柳が歩み寄って、「どれ」と亀乃介に向かって手袋をした両手を差し出した。そして、壺を受け取ると、朝日が降り注ぐ中にかざして見た。

柳が目の前に掲げた壺を、リーチと亀乃介はじっとみつめた。

②まるで、翡翠色の水鳥のようだった。

柳の手から澄んだ夏空へと飛び立ってしまいそうな、みずみずしさと活力とがその壺には宿っていた。

柳は、リーチのほうを振り向くと、口元に微笑を浮かべて、ひと言、言った。

「――好いね」

③リーチの顔がたちまちほころんだ。

（原田マハ『リーチ先生』集英社　による）

※青磁……青緑色の陶磁器。

確認テスト

本文を読んで、問いに答えなさい。

(1) ――線①「手袋をした手が震えてしまうのを止められなかった」とあるが、このときの亀乃介の心情として適当なものを選びなさい。

ア ようやく出来上がった作品に万一のことがないように、慎重に作業を進めようと緊張する気持ち。

イ 作品がひどいものになったことに怒りがわき、進言を聞き入れなかった先生を責める気持ち。

ウ 焦る先生を止めることができなかったことを後悔し、作品の出来に強く落ち込む気持ち。

(2) ――線②「まるで、翡翠色の水鳥のようだった」とあるが、この表現について正しく述べたものを選びなさい。

ア 青磁の壺の美しい色合いや、みずみずしさと活力の宿る姿を、直喩をもちいて表現している。

イ 青磁の壺の背景に広がる青空や、朝日のまぶしさを、擬人法をもちいて表現している。

ウ 青磁の壺の出来を確かめる柳の姿を、リーチと亀乃介の視点から比喩的に表現している。

(3) ――線③「リーチの顔がたちまちほころんだ」とあるが、このときのリーチの様子として適当なものを選びなさい。

ア そっけない柳の言葉に、意図がわからず当惑する様子。

イ 壺の出来を評価する柳の言葉に、喜びがこみ上げる様子。

ウ 自分とは異なる感想を述べる柳の言葉に、不安を感じる様子。

ごはん（1）

（次の文章は、筆者が女学校の三年生だった頃に、東京大空襲にあった経験をえがいたものです。）

三月十日。

その日、私は昼間、※蒲田に住んでいた級友に誘われて潮干狩に行っている。

寝入りばなを警報で起された時、私は暗闇の中で、昼間採ってきた蛤や浅蜊を持って逃げ出そうとして、父にしたたか突きとばされた。

「馬鹿！　そんなもの捨ててしまえ」

台所いっぱいに、蛤と浅蜊が散らばった。

それが、その夜の修羅場の皮切りで、おもてへ出たら、①もう下町の空が真赤になっていた。我家は目黒の※祐天寺のそばだったが、すぐ目と鼻のそば屋が焼夷弾の直撃で、一瞬にして燃え上った。

父は※隣組の役員をしていたので逃げるわけにはいかなかったのだろう、母と私には残って家を守れといい、中学一年の弟と八歳の妹には、競馬場あとの空地に逃げるよう指示した。

駆け出そうとする弟と妹を呼びとめた父は、白麻の夏布団を防火用水に浸し、たっぷりと水を吸わせたものを二人の頭にのせ、②叱りつけるようにして追い立てた。この夏掛けは水色で縁を取り秋草を描いた品のいいもので、私は気に入っていたので、「あ、惜しい」と思ったが、さっきの蛤や浅蜊のことがあるので③口には出さなかった。

だが、そのうちに夏布団や浅蜊どころではなくなった。※「スタア」や料理の本なんぞといってはいられなくなってきた。火が迫ってきたのである。

「空襲」

この日本語は一体誰がつけたのか知らないが、まさに空から襲うのだ。真赤な空に黒いB29。その頃はまだ怪獣ということばはなかったが、繰り返し執拗に襲う飛行機は、巨大な鳥に見えた。

家の前の通りを、※リヤカーを引き荷物を背負い、家族の手を引いた人達が避難して行ったが、次々に上る火の手に、荷を捨ててゆく人もあった。通り過ぎたあとに※大八車が一台残っていた。その上におばあさんが一人、チョコンと坐って置き去りにされていた。父が近寄った時、その人は黙って涙を流していた。

（向田邦子『父の詫び状』文藝春秋 所収「ごはん」による）

※蒲田…現在の東京都大田区。　祐天寺…現在、東京都目黒区。
隣組…戦時下の国民統制のためにつくられた住民組織。
「スタア」～…「スタア」は映画雑誌。当時筆者は空襲のたびに雑誌や本を防空壕に持ち込んでいた。
リヤカー…人が引いたり、自転車の後ろに連結したりして荷物運搬に用いる荷車。
大八車…荷物運搬用の大きな二輪車。

東京大空襲

一九四五年三月十日の未明、B29爆撃機約三百機による東京への大規模な無差別爆撃が行われた。およそ十万人の人々が亡くなったと考えられている。

確認テスト　本文を読んで、問いに答えなさい。

(1) ――線①「もう下町の空が真赤になっていた」とあるが、これはどういうことか。適当なものを選びなさい。

ア　もう夜が明けたかのように感じられたということ。
イ　下町の空が暮れかかっていたということ。
ウ　既に下町に炎が広がっていたということ。

〔　　　〕

(2) ――線②「叱りつけるようにして追い立てた」とあるが、なぜ父は叱りつけるような態度だったのか。適当なものを選びなさい。

ア　空襲の中で、弟と妹をなんとか安全な場所に逃れさせようと必死だったから。
イ　空襲なのに場違いなことを言う弟と妹が情けなく、怒りがわいたから。
ウ　目の前に危険が迫っているのに、隣組の役員をしていて逃げるわけにいかなかったから。

〔　　　〕

(3) ――線③「口には出さなかった」とあるが、これはなぜか。適当なものを選びなさい。

ア　蛤や浅蜊を持ち運ぼうとして叱られていたので、この状況で夏掛けを惜しいと言うと父がまた怒るだろうと思ったから。
イ　夏掛けは品がよく、お気に入りのものではあったが、弟と妹の命を守るためなら惜しくはないと思ったから。
ウ　自分の家に火が迫ってきたので、浅蜊や夏布団などを気にかけているような状況ではなくなってしまったから。

〔　　　〕

火の勢いにつれてゴオッと凄まじい風が起り、葉書大の火の粉が飛んでくる。空気は熱く乾いて、息をすると、のどや鼻がヒリヒリした。今でいえばサウナに入ったようなものである。

乾き切った生垣を、火のついたネズミが駆け廻るように、火が走る。水を浸した※火叩きで叩き廻りながら、うちの中も見廻らなくてはならない。

「かまわないから土足で上れ！」

父が叫んだ。

私は生れて初めて靴をはいたまま畳の上を歩いた。

「このまま死ぬのかも知れないな」

と思いながら、泥足で畳を汚すことを面白がっている気持も少しあったような気がする。

こういう時、女は男より思い切りがいいのだろうか。父が、自分でいっておきながら①爪先立ちのような半端な感じで歩いているのに引きかえ、母は、あれはどういうつもりだったのか、一番気に入っていた松葉の模様の※大島の上に※モンペをはき、いつもの運動靴ではなく父の※コードバンの靴をはいて、縦横に走り廻り、盛大に畳を汚していた。母も私と同じ気持だったのかも知れない。

三方を火に囲まれ、もはやこれまでという時に、どうしたわけか急に風向きが変り、夜が明けたら、我が隣組だけが嘘のように焼け残っていた。私は顔中煤だらけで、まつ毛が焼けて無くなっていた。大八車の主が戻ってきた。父が母親を捨てた息子の胸倉を取り②小突き廻している。そこへ弟と妹が帰ってきた。

両方とも危い命を拾ったのだから、感激の親子対面劇があったわけだが、不思議に記憶がない。覚えているのは、弟と妹が救急袋の乾パンを全部食べてしまったことである。うちの方面は全滅したと聞き、お父さんに叱られる心配はないと思って食べたのだという。

孤児になったという実感はなく、おなかいっぱい乾パンが食べられて嬉しかった、とあとで妹は話していた。

（向田邦子『父の詫び状』文藝春秋　所収「ごはん」による）

※火叩き…竹竿の先に縄の束を付けた消火用具で、これで叩いて火を消す。
大島…大島紬。鹿児島県奄美大島などでつくられる織物。
モンペ…はかまの形をして足首の部分が絞られている衣服。労働着で、戦時中は女性の標準服としても推奨された。
コードバン…革の種類で、上質なめし革。

確認テスト　本文を読んで、問いに答えなさい。

(1)　――線①「爪先立ちのような半端な感じで歩いている」とあるが、父がこのような歩き方をしていたのはなぜか。適当なものを選びなさい。

ア　周囲に火が廻っているので、畳の上に土足で上がるのを気にしている状況ではないから。

イ　三方を火に囲まれて身に危険がせまり、恐ろしさのあまり足がすくんでいたから。

ウ　靴を脱いで上がるべき畳の上を、土足のまま歩くことに気が引けたから。

(2)　――線②「小突き廻している」とあるが、この動作から読み取れる「父」の心情として適当なものを選びなさい。

ア　怒り　**イ**　恐れ　**ウ**　驚き

(3)　本文の内容に**当てはまらない**ものを選びなさい。

ア　筆者の家は火に囲まれたが、急に風向きが変わったことで何とか焼け残った。

イ　筆者は、家族が生きながらえて再会できたときの、感動の対面の様子が印象に残っている。

ウ　筆者の妹は、うちの方面が全滅したと聞いても孤児になったという実感がわかなかった。

ごはん (3)

さて、このあとが大変で、※絨毯爆撃がいわれていたこともあり、父は、この分でゆくと次は必ずやられる。最後にうまいものを食べて死のうじゃないかといい出した。

母は取っておきの白米を釜いっぱい炊き上げた。私は埋めてあったさつまいもを掘り出し、これも取っておきのうどん粉と胡麻油で、精進揚をこしらえた。格別の※闇ルートのない庶民には、これでも①魂の飛ぶようなご馳走だった。

②昨夜の名残りで、ドロドロに汚れた畳の上にうすべりを敷き、泥人形のようなおやこ五人が車座になって食べた。あたりには、昨夜の余燼がくすぶっていた。

わが家の隣りは外科の医院で、かつぎ込まれた負傷者も多く、息を引き取った遺体もあった筈だ。被災した隣り近所のことを思えば、昼日中から、天ぷらの匂いなどさせて不謹慎のきわみだが、父は、そうしなくてはいられなかったのだと思う。

③母はひどく笑い上戸になっていたし、日頃は怒りっぽい父が妙にやさしかった。

「もっと食べろ。まだ食べられるだろ」

おなかいっぱい食べてから、おやこ五人が※河岸のマグロのようにならんで昼寝をした。

畳の目には泥がしみ込み、藺草が切れてささくれ立っていた。そっと起き出して雑巾で拭こうとする母を、父は低い声で叱った。

「掃除なんかよせ。お前も寝ろ」

④父は泣いているように見えた。

自分の家を土足で汚し、年端もゆかぬ子供たちを飢えたまま死なすのが、家長として父として無念だったに違いない。それも一個人ではどう頑張っても頑張りようもないことが口惜しかったに違いない。学童疎開で甲府にいる上の妹のことも考えたことだろう。一人だけでも助かってよかったと思ったか、死なばもろとも、なぜ、出したのかと悔んだのか。

部屋の隅に、前の日に私がとってきた蛤や浅蜊が、割れて、干からびて転がっていた。

戦争。

家族。

ふたつの言葉を結びつけると、私にはこの日の、みじめで滑稽な最後の昼餐が、さつまいもの天ぷらが浮かんでくるのである。

（向田邦子『父の詫び状』文藝春秋 所収「ごはん」による）

※絨毯爆撃…ある地域一帯に対してすきまなく行われる無差別爆撃。
闇ルート…正規の流通から外れたルート。戦時中多くの食料の流通は政府によって統制され、生活必需品は配給制となった。
河岸…ここでは魚市場のこと。

学童疎開

一九四四年頃から、空襲などの戦禍を避けるために、大都市の児童は地方都市や農村などに移住した。筆者の上の妹は、一九四四年の秋に、下の妹は東京大空襲後に、甲府（山梨県）に疎開した。

確認テスト

本文を読んで、問いに答えなさい。

(1) ——線①「魂の飛ぶようなご馳走」とあるが、これはどのような食事か。適当なものを選びなさい。

ア 驚くほどぜいたくな食事。
イ 気力がなくなってしまう食事。
ウ 戦時中らしい質素な食事。

〔　　〕

(2) ——線②「昨夜の……食べた」とあるが、このときの食事のことを、筆者は何と表現しているか。本文中から十二字で探し、最初の三字を書きぬきなさい。

□□□

(3) ——線③「母は……やさしかった」とあるが、このときの母と父の心情として適当なものを選びなさい。

ア 周囲が被災している中で天ぷらの匂いをさせることが不謹慎で、気まずく思っている。
イ なんとか空襲を生き延びることができ、無事にみんなで昼食を囲むことができたのでほっとしている。
ウ 家族での最後の食事となるかもしれず、子供たちにせめておいしいものを食べさせたいと思っている。

〔　　〕

(4) ——線④「父は泣いているように見えた」とあるが、このときの父の心情について、筆者の視点から思いを巡らせている箇所を探し、最初と最後の三字を答えなさい。ただし句読点も一字に含む。

□□□～□□□

日常の中から

短歌を作ることは、「日常」だろうか「非日常」だろうか。私にとってそれは、「日常の中の非日常」あるいは「日常の中からの非日常」ではないかと思う。

何をうたうか、という大きな問題がそこにはある。そして次に、どんな言葉で、という問題。

【まず「何を」であるが、日常の中からそれを見つけ出したい、と私は思う。旅や人の生死に関わることなど、非日常から生まれる歌も多い。が、それ以外にも、①八百屋(やおや)さんで買い物をするとき、ふるさとに手紙を書くとき、気のあった友人と会うとき、※エトセトラ。あっと思う一瞬(いっしゅん)の心の揺(ゆ)れをつかまえて、「何を」の種にする。うたわれなければその場で消えてしまうものが、うたわれることによっていつまでも残る。②三十一文字に真空パックされて。

特異な体験や特異な感受性の上に成り立つ歌ももちろんあるだろう。が、そうでなくても、歌は生まれるのだと信じたい。感じやすい心・感じにくい心、というのはあるかもしれない。けれど、感じない心なんてないはずだ。だからすべての人の心に、歌は生まれる可能性を持っている。どんな平凡(へいぼん)な日常の中にも、歌の種はひそんでいる。そして歌を作っていくことによって、私たちは小さな種をも敏感(びんかん)にキャッチできる心というものを、持つようになるのではないだろうか。

③短歌そのものは非日常だ。五七五七七という定型において。私たちはふだん、三十一文字の会話はしない。けれど、その非日常の花を咲(さ)かせる種が日常の中にある。心を敏感にすればするほど、日常は非日常の種だらけだ——ということにも気づく。何十年生きても、まったく同じ一日などありはしないのだから。そして日常の小さな窓から、大きな宇宙がかいま見られることが、人の一生のうちには何度かあるのではないかと思う。

次に「どんな言葉で」という問題。この点においても、私は日常派だ。ふだん、自分が使い慣れ、親しんでいる言葉をたっぷりとりこんで、うたいたい。すなわち日常の言葉で。それは、豊かな日本語の財産を無視するということではない。要するに、歌になる言葉・ならない言葉、という色分けをしたくないということである。歌の種のまわりには、それを包む言葉の土壌(どじょう)があるはずだ。自然に掘(ほ)りおこしてゆけば、日常の言葉がくっついてきて当然ではないだろうか。

ふだん何げなく使われている言葉が、五七五七七の中にとりこまれるとき、それは非日常の言葉になる。定型のリズムの中で、不思議な輝(かがや)きを放つ。④この意味でも短歌は、日常から非日常への装置なのだと言えるだろう。】

（俵万智『りんごの涙』文藝春秋　所収「日常の中から」による）

※エトセトラ…その他。等々。

確認テスト 本文を読んで、問いに答えなさい。

(1) ――線①「八百屋さん……友人と会うとき」とあるが、これは日常、非日常のどちらの例か。日常なら**ア**、非日常なら**イ**で答えなさい。

〔　〕

(2) ――線②「三十一文字に真空パックされて」とあるが、このあとに省略されている内容を、解答欄に当てはまるように本文中から七字で探し、書きぬきなさい。

三十一文字に真空パックされて□□□□□□□。

(3) ――線③「短歌そのものは非日常だ」とあるが、短歌のどのような点が非日常なのか。本文の内容に合うものを選びなさい。

ア 日常にはない出来事をうたうべきであるという点。
イ 日常の中での感情からは生まれないものである点。
ウ 日常の会話と異なり、五七五七七の定型を用いる点。

〔　〕

(4) ――線④「この意味でも短歌は、日常から非日常への装置なのだと言えるだろう」とあるが、どのような点で短歌は日常から非日常への装置だと言えるのか。適当なものを選びなさい。

ア 短歌の定型のリズムの中では、ふだん使い慣れている言葉が、不思議な輝きを放つ非日常の言葉となる点。
イ 平凡な日常の出来事を歌にするときにも、ふだんはあまり用いられることのない特異な言葉が使われる点。
ウ 歌の種のまわりには日常の言葉がくっついていても、平凡な日常の中には歌の種は見いだされない点。

〔　〕

(5) 【　】の箇所を大きく二つのまとまりに分けたとき、一つ目のまとまりはどこまでか。一つ目のまとまりの最後の五字を答えなさい。ただし句読点も字数に含む。

□□□□□

写真　アフロ
参考文献　小学館『新編 日本古典文学全集』

©RECRUIT
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。